アクエリアス

至福の時代に向けて

大和 武史

アクエリアス　「至福の時代に向けて」
第1章　現代社会は、まさに地獄
1節　社会悪は全盛期
2節　経済はお金の奪い合い
3節　国民にとって関心の無い政治
4節　不透明な国際情勢
第2章　現代の「常識」の大きな間違い
1節　「唯物論」の矛盾
2節　「唯物論」の生み出すもの
3節　間違った「平等観」

4節　責任の無い「自由」は凶器と同じ
5節　「無神論」の生み出した計り知れない損失
第3章　真実に目覚めよう
1節　エネルギーの科学される時代
2節　異次元世界の発見
3節　地球以外の生命の真実
4節　恒星、惑星は生命体である
5節　地球人どうしの戦争のばからしさ
6節　本当の「新人類」とは真理に目覚めた人々
第4章　アクエリアスの時代に起きる変革

1節　伝説の文明が蘇る
2節　世界戦争が集結する
3節　宇宙人との交易が開始される
4節　神への信仰の時代が来る
5節　地上は幸福な人々で満たされる
第5章　アクエリアスの時代を切り開こう
1節　このままで行けば人類は滅びる
2節　奇跡のシナリオを開く鍵ー経済改革
3節　奇跡のシナリオを開く鍵ー政治改革
4節　奇跡のシナリオを開く鍵ー真理教育

5節　アクエリアスの時代を切り開こう

第1章　現代社会は、まさに地獄

1節　社会悪は全盛期

１９９３年１月、山形県の中学校で男子生徒がマットでぐるぐる巻きにされて死亡するという事件がテレビや新聞により、報じられました。この事件は、少年達の間にこんな陰湿ないじめの実態があったのかと多くの人を驚かせました。この事件をきっかけに生徒の間の「いじめ」の問題が深刻な社会問題として認識されるようになりました。

その後も小学生がいじめを苦にして自殺するというショッキングな事件も発生して、このいじめの問題は他人事ではなく、自分達の家族にも直接関係する可能性のある問題として考えられるようになった気がします。

このような大きな事件はいわゆる氷山の一角で、実際には表沙汰にならない程度のいじめは何処にでもあるものと思われます。子供達はいじめられたくないし、親や先生はいじめは何としても阻止したいと考えているのですが、大人の目の届かないところでは、やはり大なり小なりのいじめに似た行為はどうしても起こっているようです。

やはり、学力や運動神経や普段の態度などは人によって皆違いますから、集団の中にいるとどうしても優劣が現れてくるわけですね。そうすると、優れている子は良いのですが、明らかに劣っていると思われる子に対してはどうしても接する態度がぞんざいになります。これはある程度仕方の無い事ですが、その子がコンプレックスや被害妄想に陥ってしまっていると、こうした自分への態度を敵意として受け取るようになります。

すると、回りが敵ばかりになりますから、学校に行っても面白くないし、それどころか苦痛にさえ感じるようになります。そして、回りの子供たちに対して身構えるようになり、人によっては、集団から離れて一人でじっとしていたり、逆に見境無く冷たい態度や言葉を発するようになったりします。こうなると、回りの子供たちもこの子のこうした態度にたまりかねて何か機会ある度に厳しい批判をしたりするようになってきます。こんな関係が出来てしまうと、ほんのちょとした些細な事からいじめは起きてしまいます。

ある日突然に、降って湧いたようにいじめが始まるわけではないのです。その特定の子との間に違和感が強く定着した結果として現れてくる場合が多いのです。ですから、同じ様な雰囲気の子でもいじめられる子とそうでない子はいます。いじめられるような要素を多く持っている子でも、みんなに好かれているような子どもはいじめられませんし、逆に、特に劣ったところがなくても皆から嫌われるような性格の子はいじめに会う場合があります。

いずれにしても、こうしたいじめは現代の社会の一つの特徴として挙げられると思います。

また、ここ２０年ほど相変わらず多いのが青少年の非行です。オートバイや自動車による暴走族もその一つですが、横浜などでは深夜、公道を利用してのレースまがいの暴走が繰り広げられています。全国から多くの青年が集まってきて、レースを始めるグループとそれを見物する青年達で大変な賑わいを見せています。警察隊と衝突したり、他のグループの者達と乱闘を起こしたり、大変な乱れようです。

そのほかでは相変わらず、シンナーや未成年の喫煙や飲酒などが取り締まりようもない

ほどに一般化してきました。実際、酒やタバコなどは未成年でも多くの人達がやっていますし、酒を一気飲みして急性アルコール中毒を起こして入院する若者も相変わらず多いです。こうした未成年達は好奇心や大人ぶったふりをしたいために、勉強などそっちのけでこうした火遊びのような事に夢中になって、やがて非行に走っていくパターンが結構多いようです。

そして、最近の傾向としては少女の非行が目だってきています。特に、性を中心とした非行です。たとえば古い言葉で言えば売春ですが、最近の少女はほんの軽い遊びのつもりでやっている子も多いようです。また、積極的に性を売りものにしてお金を儲けようとしている少女も結構います。アダルトビデオ女優やソープランドや各種のピンクバーなどで、お金を稼ぐ必要からやむにやまれず勤めている子もいますが、過半数は面白おかしく大金を稼ぎたいと思っている人達です。最近では、ブルセラとか言って女子高校生がお金欲しさに淫らな事を平気でしています。

このような青少年の実態とは別に、大人達はと言えば、大人の世界もまた乱れています。たとえば最近の流行の一つが不倫です。男も女も、妻や夫や子供達があるにもかかわらず、ほんの軽い気持ちで他の異性と肉体関係を持ってしまうのです。そして、それが家族にばれたり、あるいは相手が本気になってしまって離婚騒動に発展したりとか、家庭を壊す大きな原因になってきています。テレビドラマや週刊誌などにだいぶ煽られている感じがしますね。最初はちょとした好奇心や遊びのつもりでも、後で取り返しのつかない事態に陥る事は良くあるものです。

また、最近ではセクハラとか言って、女性の社員に対して性的ないたずらをする人達も

かなりいるようです。公私のけじめがつかず、自分の感情だけで横暴に振る舞った結果でしょう。

家庭においても、ひと頃は姑が嫁をいびるのが多かったのですが、最近は嫁が夫の親をいじめるのが流行っているそうです。小遣いも与えず、食事も自分達の残りしかやらないようなとんでもない嫁も出てきてずいぶん混乱してきました。

このように、子供からお年寄りまで、男女を問わず、様々な社会悪が現れてきています。そして、これらの社会悪はただ単にその行為だけにとどまらず、次から次へと悪い結果を生み出しているのです。

たとえば、子供がいじめられて母親が悲観してノイローゼになったり、またその夫がおもしろくなくて浮気に走ったり、それでまた離婚騒動になったり、それがまた子供を非行に走らせたりとか、適切な対応をしないとどんどん不幸な結果に陥っていくのです。

このように、現代社会には社会悪がはびこっており、普通の平凡な家庭がいつ不幸のどん底に落ちても不思議はないのです。まさに、社会悪の全盛期です。

そして、このままでいくともっと悪くなります。今、一部の人達が行っている社会悪が見慣れた行為と思われるようになります。そして、もっとエスカレートした行為が行われます。人々はそうした恐怖におののきながらも恐ろしい事態を受け入れて行くでしょう。

外出するのに武器を身につけたり、人目を偲んで歩かなければならなくなるかも知れません。いつも身の危険を案じながら生活しなければなりません。弱肉強食の動物の世界に似た生活です。

そして、家族さえも信頼できない天涯孤独な一匹の動物人間として生きて行かなければ

ならなくなるのです。

2節　経済はお金の奪い合い

一方、現代の経済社会はどうかと言うと、ほとんどの人達が企業に勤めているわけですが、その雇っているところの企業は一生懸命に利益という名のお金を求めています。

企業の中の社員の教育や健康管理などよりも利益が最優先という主義です。利益の上がらない職場はどんなに優秀な社員がいても切り捨てられます。利益の上がる職場へと方向転換を余儀なくされます。

合理的経営という名の美辞麗句でごまかしているのですが、本音は利益がすべてという考え方です。利益が上がるものが善で、採算の合わないものは悪という主義です。

このために、森林の乱開発やばい煙などの公害、土地や株式などへの投機などが後を絶たないわけです。要するに、自分の会社の利益だけを目的としていますから、他の人々の事など関係がないわけです。住民がどんなに困ろうと、環境がどれほど破壊されようと関心が無いわけです。

これは、企業単位のエゴイズムそのものです。他の人の事など関係なしに、自分の会社の利益だけを考えているのが、今のほとんどの企業なのです。

こうした企業の中で働く人達は、当然ながら大変辛い仕事を強いられます。なぜなら、利益が最優先で個人の都合など聞いてもらえないからです。昨日は眠れなくて、今日はあまり外へ出たくないとか、今日は風邪気味でだるいのでゆっくりと仕事がしたいとか思っ

ていても大抵の上司はそんな勝手な事は許してくれません。
ちゃんと給料を払っているのだからきちんと働いてくれなければ困ると言うでしょう。また、嫌ならいつでも辞めなさいと言うかも知れません。
仕事をしているというよりは、仕事に服従させられているといった感じです。自由を奪われているのです。給料を貰うために。
こんな仕事をしている人達は、当然ながらストレスが溜まります。お酒や色事やギャンブルなどで解消したくなる気持ちもわかります。でも、残念ながらほとんどの場合、こうしたストレスのはけ口のための遊びはそのうち何らかの形で破綻が来るようになっています。
たとえば、飲み過ぎて肝臓をこわしたり、胃潰瘍になったり、お金を使いすぎて借金に首が回らなくなったり、妻や子供から嫌われて家庭不和になったり、様々なパターンがありますが、大抵はそのままでいくと手痛い挫折を味わうようになっているのです。
そして、こうした事が会社に知れると、会社の地位さえも奪われてしまう場合もあります。仕事のストレスが第一原因なのに、最後はその仕事さえ奪われてしまうのです。何と哀れな話ではありませんか。
これは、下の方で働く社員の話ですが、上の方の人達はどうなのかと言えば、この人達もまた大変なのです。なぜなら、その地位を守る必要があるからです。大きな失敗は許されませんし、スキャンダルなどはもっての他です。自分の地位を守るために、常に大過無く、無事に治めて行かなければならないのです。
社員の身勝手やわがままなど許して失敗をされたら大変です。足を引っ張られないよう

に十分に管理しなければなりません。このために、仕事に不満な社員をきびしく管理するという難しい仕事が生まれてくるわけです。このために色々と頭を悩まされるようになります。
また、世の中の情勢も非情に不透明で先が読めません。いつ景気が変わって自分の会社の製品やサービスが売れなくなるかわかりません。常に不安がつきまといます。ノイローゼなどになる幹部も結構います。
このように、大抵、企業に勤めている人達はそこでよほどの事がない限り、自分の体の調子や家庭の都合など我慢して仕事に服従しているのです。そして、大変なストレスをお互いに与え合っているんです。
家庭に帰っても不機嫌な顔をしていても仕方がないのですが、これを働いていない妻や子供達はわからないんです。このために、よけい腹が立ってきて、家庭がうまく行かなくなります。そして、1節で話が出たように不倫やあるいは、子供の非行などが始まる場合もあります。
このように、現代の経済はその本質がお金の奪い合いであり、その中で働いている多くの人々にとっては非情に厳しい試練の時代である事は否めません。

3節　国民にとって関心の無い政治

現在の政治はどうでしょう。政党政治という事で、自民党や連立与党などにより内閣が組織され、このところは平均で1年から2年毎に総理大臣が変わっています。

ある時は、重要議案を廃案にしたために辞めたり、またある時は個人的なスキャンダルをマスコミに暴かれて辞任に追い込まれたり、色々な理由で内閣総理大臣が次々と変わっていっています。

その結果、総理の椅子の奪い合いの感じがします。政党間では当然、同じ政党内でも、総理の椅子をめぐって色々な駆け引きが行われています。ですから、国会の審議を見ていても相手の足の引っ張り合いです。総理や大臣が少しでもおかしな発言をしたら最後、辞任に追い込むまで容赦なく追求します。

また、野党側は何でもかんでも徹底的に反対です。とにかく反対していれば良いとも受け取れるくらい反対しています。そして、相手のあら捜しばっかりやっています。そして、案件の審議の遅延化を招いているのが現状です。

中には、こうした審議の遅延によって審議される事なく、廃案になる案件もあります。非情に不思議な話です。仮にも国会に上がるような重要な法案が時間切れという事だけで審議もされずに廃案になるなどという事があって良いものでしょうか。そんなどうでも良い法案なら国会に上がるはずもないし、重要な法案なら会期を延長してでも十分審議すべきです。そのための代議士なのですから。

こうした本来の仕事をそっちのけにして、自分達とは違う政党や派閥を攻撃する事に一生懸命になっているのです。これが現在の大部分の政治家の姿ではないでしょうか。

そうすると、当然の事ながら国民から信頼される事はありません。内閣の支持率を見ればそれが良くわかります。最近の内閣は大抵、５０％前後です。５０％越えれば多い方と思います。しかし、考えてみれば５０％という数字は半分という事ではありませんか。

あと半分の人達は、支持しないか、どうでも良いか、わからないか、とにかく賛成しないという事です。すると、内閣が国政を担っていく際に、国民の半数が反対か、あるいは無関心かという状態で本当に素晴らしい行政が遂行できるでしょうか。

そんな国民の半数にそっぽを向かれているような内閣にいったいどれほどの事ができるでしょうか。ちょっとした失敗でもしたらとたんに終わりです。支持率は簡単に５０％を割り込んでしまいます。すると、野党はすぐに「国民の支持を得られない内閣は解散するべきだ。」と言うでしょう。

ですから、無難に運営するしか方法がないのです。可もなく、不可もなくという感じの政治にならざるを得なくなります。思い切った行政ができないんです。ちょっとでも芳しくない結果がでると命取りになるからです。

こんな内閣が最高の政治など行えるわけがありません。私は、やはり内閣の支持率というものは最低でも８０％は必要であると思います。８０％と言う数字は言葉で表現すれば、「ほとんど」という表現になると思います。国民のほとんどの人々の支持を得て始めて国政を担う権利があるのです。

昔の大名は、領地の大きさで格が決まりました。そして一番大きな領地を取った大名が天下を握ったわけですが、これを現代に当てはめて考えると、領地に当たるのが国民の信頼なのです。一番国民の信頼を得た人が天下を取るわけです。

すると、現代はどのような時代に当たるかと言うと、戦国時代です。比較的小さな武将が沢山出てきて、ある者が天下を取ったと思ったらすぐ違うのに奪われ、その者もまたすぐ敗れていくという戦国の武士の時代と実質的に同じです。

ですから、人々が政治に関心がないと言っても当たり前なんです。そんな殺し合いばかりしている政治に関心深い方がおかしいと思います。

普通の主婦などは今、国会が開かれている事すら知りません。ましてやその中でどのような法案を審議しているかなど知る由もありません。これが現在の普通の状態なのです。政治というものがいかに国民生活から遊離してきているかがわかります。

それほど、現在の政治は国民にとって魅力がないと言いきっても、間違いではないと思います。

国民が関心もないような政治では、所詮、長続きするはずがありません。なぜなら、政治とは、国家の首領が国民を治める事を言うからです。関心も持たれないような政治で国民を治める事などできるはずがないのです。

すると、現在の政治においては本来いるべき人がいない、すなわち国民を治めきれる本当の政治家がいない状態であると言う事ができるでしょう。よりどころの無い政治です。形ばかりの政治なのです。

このような政治では、国民は安心も安定も感じる事はできません。この先どうなるかわからないような、頼りない基盤の上に生活しているのです。たとえ、現在幸福な生活をしている人があっても、その幸福は非情に不安定な基盤の上にあると言わざるを得ないのです。いつ、政治的な不幸がふりかかってくるかわからないのです。そのような、非情に不安定な時代です。

4節　不透明な国際情勢

そして、日本の外に目を向けてみると、たとえば中東、アラブの土地の中にぽつんとちっぽけなキリスト教国、イスラエル。

このキリスト教の聖地、エルサレムはヨーロッパやアメリカなど西欧諸国の繁栄と彼らの信仰により周りのアラブ諸国の驚異から守られてきたのですが、ヨーロッパが没落してきています。かつてのイギリスやフランスのような力はありません。かろうじてドイツ一国が面目を保っているような状態です。よって現在では、主としてアメリカに守られてイスラエルは存在を許されているのです。

この強いアメリカもそろそろ疲弊が見えてき始めています。国民一人当たりのＧＮＰにしても既に日本に抜かれていますし、貿易収支もこのところずっと赤字です。それも日本に対しての赤字が多いのです。アメリカは第二次世界大戦によって軍事力により日本を破りましたが、それから４０年以上経った今、経済で逆転現象が起きています。経済力により日本に敗れようとしているのです。

そして、国内は黒人達の暴動、銃による凶悪犯罪などにより治安は大きく乱れています。また、エイズやセクハラの問題や人種問題なども大きな影を落としています。クリントン大統領が選ばれたのは国民が経済を重要視している証拠ですが、逆に言うと、海外の事などよりも国内の情勢を何とかしてくれと言う悲鳴でもあるのです。

このままでいくと、アメリカの国力は年々落ちていくと思われます。そして、もう十年もすれば多分、中東の争乱に首を突っ込む余裕は無くなると思います。

そうすると、その時期、アラブ諸国は必ずイスラエルを潰しにきます。そこにアラブの

共和国を造る動きが出てくるはずです。その過程には色々な争乱や大小様々な戦争があるでしょう。こうした戦争に日本もまったく無関係ではいられないはずです。

また、もう少し近いところの火種は朝鮮です。今、北朝鮮が核を保有しているかいないかという事で大きな国際問題になっていますが、この南北朝鮮の不和の問題があります。かつてのように北の後ろに大国ソビエト連邦、南の後ろに大国、アメリカがいた時はそれなりにバランスが取れていて大きな戦争はなかったのですが、ソ連が崩壊し、その国力がほとんどロシアに受け継がれたもののロシアのエリツィン大統領は西側諸国寄りの政策を展開していますので、北朝鮮にとっては後ろ立てがなくなったのと同じなのです。だから、核を保有してその国威を誇示したいと思っているんです。

この朝鮮問題もまだまだ余談を許しません。３８度線を越えて南北の衝突があるかも知れませんが、もう一つの可能性としては、ベルリンの壁が取り去られ、南北ドイツが統一されたように、南北朝鮮の統一という事も考えられるのです。

ドイツの場合は、東ドイツは失業者の山でしたが、西ドイツは順調に発展していました。そして、この統一ドイツが発展するのか衰退するのかはこれから決まるのですが、南北朝鮮にも同じ様な情勢があります。北は苦しい経済事情ですが、南は日本を脅かすほどに発展を遂げてきています。この朝鮮を統一して大きな繁栄をめざそうという動きもあるのです。

しかし、これには現在の北朝鮮の共産主義政権の崩壊が前提となるわけです。これは大きな危険が伴いますし、悪くすれば大戦争にもなりかねません。また核を保有しているとなると一層、危険です。しかし、情勢はそちらの方に流れて行くでしょう。なぜなら、こ

の方向には統一朝鮮の繁栄という夢があるからです。単なる南北の同一民族間の戦争よりは国民に説得力を持つからです。

ところが、もしこの統一朝鮮が実現したとき、そこには巨大な軍事力、経済力を持つアジアの強国が誕生するのです。日本にとっては非情な驚異となる事は必至です。そしてその国がもしかつての大戦当時のような、帝国主義国家であったなら日本は大変な危険を覚悟しなければなりません。軍事力により植民地化される可能性があります。

そんなばかな、日米安保条約によりアメリカが守ってくれるじゃないかと言われるかも知れませんが、その頃アメリカが瀕死の重傷で日本どころではなかったらどうでしょうか。日本も自分の力で国を守る努力をしなければならなくなります。現在の自衛隊のような、軍隊で本当に国が守れると思いますか。統一朝鮮は２国分の軍事力を持っているのです。また、核さえも持っているかも知れないのです。非情な危険が伺い知れると思います。

それに、ソ連が分裂しましたが、この分裂した旧ソ連の国々も大きな火種です。その中でもロシア共和国は一番裕福な国ですが、それでも十分な食糧がなく、経済も低調な状態が続いています。そして、エリツィン大統領は西側の裕福な国との積極的な外交により経済を立て直そうとしていますが、なかなか十分な成果を挙げるところまでいかないようです。

特に問題になるのは、ウクライナとか、このロシア以外の国々です。これらの国はロシア以上に貧しく、その経済は破綻に近いところまでいっています。そして、主要な資源や産業はロシアの方にありますからどうしようもありません。十分にあるのは武器や兵器だけです。しかし、こうした武器や兵器も既に、かなり年代物も多く、そのうちにこれらの

維持や修理や解体などに多大な経費を必要とするようになります。

つまり、これらの国は経済の復興の見込み無く、放置しておいたら莫大な経費を食う武器や兵器だけが沢山あるのです。彼らが飢えに苦しむような生活を、じっと何百年も我慢してくれたら良いのですが、そうでなければこの軍事力を行使して国を立て直そうとするしか道はありません。隣接の国々を侵略して領土を広げ、植民地にし、金や資源を奪う以外に道はないと思います。核兵器も使用される危険が十分あります。そうなると、大変な危機になります。

また、中国はどうでしょうか。天安門事件より数年の月日が経過して、当時ほど切迫していないように見えますが、革命の動きはまだ死んでいません。静かに機会を伺っているように私には感じられます。毛沢東の築いた中国共産党政権も最大の危機に見舞われています。あのような形でソ連共産党が崩壊した今は、共産党の政治思想では国民に夢を見させる事はできません。変化の無い停滞政治を望むか、犠牲を払ってでも発展を夢見るか、その内選択をしなくてはならなくなるでしょう。

そして、おそらく革命により中国共産党の支配は終えんを迎える事になると思います。もちろん、悲惨な事件や争乱があるでしょう。多くの人々の血が流されるでしょうが、それでもやがて革命に成功するのではないかと思います。多分、強力な指導者が出てくるでしょう。この指導者の元で革命は成功すると思います。

このように、世界のあちこちで大きな火種があり、そしてそれらが火を吹く可能性は非情に高いと言わざるを得ません。でも、第二次大戦から今まで平和な日々が続いていたのに何故急に次々と戦乱が起きるのでしょうか。

それは、今までの平和と言うのはアメリカとソ連という二大国の敵対の結果、世界が西側、東側と二分して敵対していたため、お互いに牽制が働いたのです。もし、戦争を始めたら西側諸国と東側諸国の全面戦争になってしまい、大変なリスクが伴うわけです。むやみに仕掛ける事ができない状態にあった訳です。そのために「冷戦」というように一見、平和な日々が続いていたに過ぎません。

しかし、既にソ連が崩壊し、アメリカの没落が現在進行形で進みつつある今、世界の勢力関係は大きく変わろうとしています。いつどこからどんな戦乱が突発してきてもおかしくないのです。そして、悪くすれば世界大戦という事態も十分に考えられます。

こうした険悪な世界情勢の中にあるという事を良く認識して下さい。これからは、日本だけが無傷で無事でいられるなどという事は常識では考えられない場面なのです。

このように考えてみると、これからの私達の生活は非情に危険をはらんだ苦渋の日々になる可能性が多分にある事が良くわかります。まさに、地獄のような毎日が足音もなく忍び寄って来ているようです。

第2章　現代の「常識」の大きな間違い

1節　「唯物論」の矛盾

常識という言葉があります。一般の人が共通して持っている知識、理解という意味ですが、現代社会においては、この常識というものほど間違ったものはありません。

たとえば、唯物論は現代人の常識です。万物は原子からできていて、その原子が集まって分子を造り、分子が集合して粒子となり、粒子が集合して物質を形作るという科学的定理とうまくミックスして、この唯物論は人々の心の中に深く浸透した感じがします。

唯物論というのは、元々物質だけが存在するという極端な考え方なのです。いわゆる、心とか精神という存在を否定した思想です。

もちろん、科学はこのような心とか精神を否定しているわけではないのですが、このような分野はわずかに心理学程度しか発達していないのに対して、物質科学の方は物理学であるとか、化学であるとか、めざましい発展を遂げたわけです。そして、電気工学や、電子工学、コンピュータ工学など様々な産業が起きてきて、人々の生活は見違えるように便利になりました。

このため、物質科学の人々の生活に対する貢献度が高い事は認めます。しかし、これらは何も唯物論を証拠づけている学問ではない事も事実なのです。人々は物質科学万能主義に陥っているのです。

そして、悪い事に、帰納法的な考え方ですね、これが科学の主流になりました。つまり、個々の具体的な事実から一般的な法則を導き出すという事が科学者の基本的な立場となったのです。すると、当然ながら実験ですね、実験によって理論を証明するという方法こそが科学的な証明だとする風潮が生まれた訳です。

この結果、心とか精神などという実験も証明もできない分野は片隅に追いやられてきたのです。この実験科学主義が結果的に唯物論を主流にするような働きをした事は否めません。

現代の一般の人に「人間は何からできているのですか。」と問えば、「人間は肉や骨や皮や血や内臓などでできており、それらはすべて沢山の細胞でできている。そして、その細胞自体はタンパク質などでできており、それは沢山の粒子の結合したもので、元々は原子である。」と答える事でしょう。これは、万物は原子からできているという唯物論そのものです。

しかし、その一方で心理学者がいて、心理学や精神科学があるということは現代科学自体が唯物論そのものではないという事です。ただ、人々の関心が電気やコンピュータや航空機や自動車など形あるものばかりに集中し過ぎており、その結果、さきほどのような物質の成り立ちの定理だけを真理と思い込んでしまっているようです。そして、心とか精神などは問題外にされ、物質以外のものの存在など否定されるような状態になって行ったのだと思われます。

ところが、この唯物論というものは大変な矛盾をはらんでいるのです。

たとえば、生命です。生命というものをどう説明するのでしょうか。今、ここにヒアシンスの球根があるとして、これを土の中に埋めて水をやると数日で芽が出てきて２週間位すると、花が咲いてきます。この花の生命力をどう説明するのでしょう。球根がタンパク質やでんぷんやその他の物質でできているのはわかります。でも、それから芽が出てきて花が咲くという事はどういうことなのですか。これを説明できないのです。唯物論だけでは。

帰納法的に物質の成り立ちを説明するのには向いているのですが、生物などの自然の変化を説明できません。何故、芽が出て花が咲くのかと言っても、「そんな事は当たり前で

はないか。」という返事くらいしか帰ってきません。

こうした主体的な実体の変化は、単なる物質の変化だけでは説明がつかないのです。これは、物質を形作っているものの作用であるはずです。このヒアシンスの球根の例では、芽を出させ、花を咲かそうとするエネルギーが元々、球根の中に存在していると考えるのが妥当だと思います。いわゆる、物質という物の中にその形態を統制する理念が存在するという事です。

この理念、あるいはエネルギーを哲学ではイデアと呼んでいるのです。そして、唯心論とは簡単に言えば、すべての物質はこの理念により統制されているという考え方とも受け取れます。こういう観点からこの唯物論、唯心論の正否を論じるならば、唯心論の方が真実により近いのです。

人間でも他の生物でも同じです。確かに、肉体は骨や皮などでできていますし、それらの細胞は原子から成り立っているでしょう。しかし、そうした生体ですね、これを統制する意識があるという事を見逃しているのです。脳が勝手に物を考えたりはしないのです。自分という主体的な意識があって、この意識が考えようと意図して脳を機能させて思考しているのです。ここの所を間違わないで欲しいのです。

そんな脳が勝手に考えているのなら、人間が皆、これほどまでに個性に違いがある事はおかしいです。脳なんてそれほど顕著な違いはありません。やはり、人間の体を統制している意識の個性の違いによるものなのですね。ですから、体に合わずに、気の若い人や年寄りじみている人やあるいは抱擁力のある人とか、無い人とか色々に分かれるわけです。脳の発達具合だけなら同じ年代ならそれほど違いはないはずです。

しかし、実際は同じ年齢でも非情に寛容で抱擁力があり、物事の道理をしっかり読み取れる人もいれば、まったく感情に振り回されていて言う事も筋が通っていない人もいます。これは、肉体年齢ではなく、精神年齢、すなわち精神の発達具合が違うからなんですね。肉体を統制している意識自体の成長度が異なっているのです。

現代科学は、この肉体を統制している意識、言い替えると生命のエネルギーの研究がまったくおろそかにされているのです。生命エネルギー科学とでも言いましょうか、こうした分野が非情に遅れているわけです。そして、先ほど言ったような物質科学ばかりが脚光を浴び、発展してきたものですから、唯物論が民衆の人々の心を捉える事はたやすい事であった訳です。

ですから、唯物論は正しい理論だと現代の科学が証明しているわけでは決してないのです。

物質科学が人々の生活を潤すのに非情に有効であったために、人々の関心がそちらに集中し、本来は同程度に発展するべきであった生命エネルギー科学がおろそかにされたという結果と、いわゆる帰納法的な手法が科学の主流を占める流れがあったために実験により証明する事が非情に大切であるとされた訳です。そして、これはこれで間違いでも何でもないわけですが、問題は、逆に実験によって証明できないものは問題外とする風潮が定着した事です。

こうした社会の通念が形成される事により、唯物論は現代人の常識として広く支持されるに至ったのです。

しかし、結論から言えば唯物論は明らかに間違いです。物質だけしかない世界にどうし

て、愛や喜びや悲しみや苦しみや希望や夢など人々の心を捉えて放さないようなものが存在するのでしょうか。こうした精神的なものはすべて存在しないもので幻のようなものなのでしょうか。では、そんな幻のために人々は歓喜したり、あるいは号泣したりしているのでしょうか。いや、そうではないはずです。

確かに物としては存在していませんが、たとえば愛情というものは厳に存在しています。親がわが子を思う気持ちは生きている間、いつの日も変わる事なく続いているではありませんか。幻のようなものであったらすぐに消え去ってしまうはずです。

このような精神分野とか生命の神秘の分野があまりにもおろそかにされていると思います。非情に残念な事です。このために、大多数の人々は唯物論を真理だと錯誤しているのです。

2節　「唯物論」の生み出すもの

前節では唯物論は間違っているという話をしましたが、ではその間違った唯物論はどのような効果をもたらしたのでしょうか。

唯物論とは結局、物質だけがすべてだという考え方です。ですから、人間は死んだら肉体と共に滅びていくという結論になります。つまり、死ねばすべて終わりという結論しか出てこないわけです。

この唯物観が人々の心を捉えてしまったら、人々は当然ながら死を恐れるわけです。死んでしまえば自分は消滅するのですから、これは最大の不幸です。恐がって当然ですね。

そして、次に生きている間の自分の待遇が気になります。死んだら終わりなのなら、生きている間にできるだけ幸福な待遇を受けたいと思って当然ですね。この自己中心的な価値観が強く出てくる事になります。他人に譲るような事よりも、自分が奪い取るような事を考えるようになります。なぜなら、死んだら終わりなのなら、生きている間によい目をしなければ損だからです。

このために、極端な人はエゴイズムに走っていくようになります。他人の事など関係なしに、自分の利益が最優先という考え方ですね。現代人であるなら、だれでも大なり小なりこのエゴを持っているのではないでしょうか。

自己中心的な考え方をしていると、どうしても他人に冷たくなります。他人と協調することに努力しなければならない理由がわからないからです。自分さえ良かったら良いわけですから他人など関係がないわけですね。そうすると、他の人が困っていても知らぬふりになります。他人の事に無関心になります。

電車などで自分が席に座っていて、後からお年寄りが乗ってきても、自分がわざわざ変わってやらねばならない理由がないわけですね。自分だけ良ければ良いのであって、お年寄りは後から乗ってきたのだから立って当たり前だと都合の良い考え方をするようになります。相手への思いやりというものが無いからですね。だから、席を譲れないんです。

このような人間ばかりになってくると、社会には争いが絶えないようになってきます。人々は自分の利益だけを求めていますから、利害関係が対立するような事柄があると、当然争うようになるわけです。

第1章で様々な社会悪の実態を書きましたが、これらの原因は何ですか。

たとえば、青少年の非行ですが、彼らは何故勤勉に勉強にいそしもうとしないのですか。それは、そうした勤勉や模範というようなものを最高の価値と思えないのです。「そんな勉強ばかりして回りに良い格好ばかりして、いったい何になるものか」と思っているんです。これは親との会話が少なくなったことも関係しているでしょう。

また、大人が「そんなことはない。勤勉に勉強して良い学校に入り、立派な職業に就けば幸福な生活が送れるんだよ。」と説明したところで、彼らはこう考えます。「そんなに勉強に明け暮れても受験に合格するかわからないし、立派な職業に就いて裕福な暮らしができたとしても、それが何になる。どうせあと少しで死んでしまうのではないか。ならば、あくせく働いて苦労して生きるより現在ただ今を楽しまなければ損だ。どうせ人間など、いつぽっくり死ぬかわからないのだから。」

もし本当に唯物論が真実であったなら彼らの言っている事は正論です。人間はいったい何のために努力したり、忍耐したりしなければならないのか、また、すべての喜びや悲しみ、苦しみ、楽しみなどもうつろな意味の無いものになってしまいます。ただ一時の幻と化してしまい、目標に向けて人生を生きる事が茶番化されてしまいます。非行など当然ですね。面白くないからです。こんな社会が。自分が生きている事自体があまり意味がありませんね。どうせ、いつかは死んで消滅するのなら。

また、大人の社会でも同じです。会社でも人々は自分の生活のために、給料を貰うために働いているんです。会社や社会への奉仕のつもりで働いている人など皆無です。ですから、最大の関心事は自分の給料です。待遇です。よって、この奪い合いという争いが生じてきます。労使の間の闘争もそうですし、上司に取り入ったり、逆にライバルの足を引っ

張ったり手段を選ばない人もいます。

そして、給料のために厳しい労働に服従しているわけですが、他人が怠けるのは許せないのです。自分が我慢しているのにあいつはけしからん。と厳しく指摘したりするわけです。その結果、お互いに首の締め合いですね。がんじがらめにお互いを縛り合って大きなストレスを抱いているわけです。そして、家庭に帰ってからぶつぶつと不平や不満を言うのですが、そうなると家族も面白くありませんから家庭もうまく行かなくなります。それで、空虚な気分を埋めたいと不倫に走ったり、ギャンブルに夢中になったりして泥沼に落ちていく人もいます。

政治家にしてもそうですね、要は自分がかわいいだけで、自分の所に入ってくるお金や、あるいは票を確保したいがために公私混同している人が多いのです。公務上の権限を利用して献金や賄賂を受けたり、あるいは政策の内容など関係なしに、政党間の関係や派閥の関係から反対したりしているわけです。要するに、公の仕事に完全に徹しきれないわけです。なぜなら、自分ばかり苦労して貧乏くじを引いていたのでは損だからです。生きている間に少しでも良い成果を上げたいからですね。

幼少の子どものいじめの問題については、特に幼少の子どもというのは親の鏡なんですね。親の影響を強く受けるんです。親が大きなストレスやコンプレックスを持っていると、こういう子どもたちは敏感に反応します。暗い子供に育ったり、聞き分けの無い子供ができたりします。また、家庭がおかしな雰囲気であったりすると、回りに対して意味もなく反抗的な態度を示したり、逆に、回りから孤立する事を望むようになったりします。

つまり、精神的に病気になるわけですね。あるいは、病気と言えないまでも、友達を許

すという事ができない子ができたりします。いじめなどという陰湿な行為はこうした家庭や社会の異常さを映した出来事であると私は思います。幼少な子供というのは本来純粋、無垢なものであり、これがそうでないように現れているのは回りの毒気が伝染してきているために他ならないと思うのです。

このように考えてみると、唯物論がもたらす自己中心的な人々の考え方が社会を蝕んでいる部分が多分にある事が良くわかります。

唯物論というのは完全に間違いです。人間は肉体ではなく、その肉体を統制している意識こそ本当の自分自身なのであり、生命なのです。ですから、肉体が滅びたからと言って生命自体も亡くなったとは限らないのです。

生命というのは、形あるものではありません。エネルギーの事です。はっきりとした意志を持った思考するエネルギーこそが生命の真実なのです。だから、上司に褒められたり先生に褒められたりすると、急にやる気が出てきたりしますし、逆に失敗すると、落胆してやる気がなくなります。生命力が変動するからです。生命エネルギーの量が変化するのです。

では、生とは死とはどういう事でしょうか。また、ほんとうに肉体が滅びても生命は亡くならないのでしょうか。

生きているという事は心臓が動いている事でしょうか。あるいは、脳が活動していることでしょうか。実は、生きているという事は肉体が生命エネルギーにより統制されているという事なのです。ですから、逆に死という事は生命エネルギーが肉体を統制できなくなった状態を言います。つまり、肉体と生命エネルギーが一体となって活動できる状態が生

であり、生命エネルギーが肉体を操れなくなって離れる状態を死と言うのです。

ですから、現在、脳死の状態をもって死とする事に対して議論を呼んでいますが、この死の判定は間違っています。唯物観が生み出した議論です。内臓の何処が機能しなくなった状態が死なのかと唯物的に考えてしまっているのです。

普通、内臓が全部停止しても、しばらくは生命エネルギーは肉体の中に留まっています。つまり、まだ生きているわけです。そして、だんだんと肉体から遊離してくるのが普通です。その期間は大体半日から1日くらいかかります。だから、お通夜の間はそっとしておいて1日以上経ってからしか火葬しないことになっているのです。

この、肉体は死んだように見えるが、まだ生きている状態の時に、もう死んだと思って解剖とか火葬とかしますと大変な事になります。本人はもう肉体は何一つ動かす事はできませんが、まだ神経はつながっているのですから非情な痛みを味わう事になります。大変な恐怖です。でも、それを表現する術がないのです。だから、西洋医学の臓器移植などはよほど気をつけないととんでもない間違いを犯す事になりかねません。

もちろん、この生死の定義を証明する手だては何もありません。しかし、この真実を伺い知る手がかりはあります。

たとえば、臨死体験と呼ばれるものもこれの一つです。事故などで重体になり、心臓が止まり、瞳孔が開いても、しばらくして蘇った人達がいます。そして、彼らは後にどうしていたのかと聞くと、一様に、もう一人の自分がベッドで動かなくなっており、自分はドームのような所を昇って行ったとか、川を渡ったとか野原があって綺麗な花がいっぱい咲いていたとか言っているのです。

まあ、いわゆるあの世とか天国とか言われる世界かも知れませんが、いずれにしても、肉体的には死に至ったと思われる状態から蘇った人も中には現実にいる事は事実です。そして、共通している事はもう一人の自分がベッドで動かなくなっているのを見ている事です。これは生命エネルギーが肉体から離れかけているわけですね。本当の自分が自分の動かなくなった肉体を見ているのです。

そして、次に、肉体が滅んでも生命自体は亡くならないのかという問題について考えてみたいと思います。

それには、まず、物質とエネルギーの存在の仕方というものを考えてみなければなりません。水が熱すると水蒸気になったり、逆に冷やすと氷になったりするのはその内部エネルギー量の変化によるわけですが、鉄などもものすごい高熱にすると溶けてどろどろになります。これも内部エネルギー量が変化したためです。このように、すべての物質はその中に内部エネルギーを持っています。

そして、そのエネルギー量により存在状態が変化するようになっているのです。つまり、物質はエネルギーと共存しているという事なのです。物質だけが単体で存在しているのではないのです。エネルギーと一体となって始めて存在が可能となっているわけです。

これは、人間や他の生物についても同じです。生命エネルギーと一体となって始めて生命は生きて行けるのです。

すると、この私達が生きているこの空間というものは物質とエネルギーが共存している空間になっている事になります。だから、世界中、あるいは宇宙の何処でもエネルギーを使用する事ができるのです。その空間にエネルギーが同居しているからです。だから、電

球に電気を通せば明るい光を発するのです。その空間に電気エネルギーや光エネルギーが存在しているからです。これが、電球に電気を通すというきっかけによって光という形になって現れて来ただけです。

現代の物理学が見いだした法則にエネルギー保存の法則というのがあります。科学変化の前後の総エネルギー量は保存されている、つまり総量は変化しないという事です。このエネルギー保存則は生命エネルギーにも当てはまります。死という物理変化の前後でも生命エネルギーが変化する事はないのです。生命は決して消滅したりしないという事です。

これが真実なのです。生命というのは不滅なんです。たとえ、肉体は滅んでも私達の生命自体は消滅する事はないのです。

こうなると、まったく考え方が変わってきます。

今までは、どうせいつかは誰でも死なねばならないという事で、それまでの間の人生は蜃気楼のような一時の幻のような感覚を受けたのですが、永遠の生命の中の一時を人間として生活すると考えると、逆にこの人生の間が貴重な体験であるように思えてきます。

また、数十年の命と思っていると、限られた人生を良い待遇で過ごしたいと思うのですが、永遠の命であったなら、それほど自分の利益だけにこだわる必要も無くなってきます。時間的な余裕が出る分だけ寛容になってくるんですね。

それと、一番大切な事は人生そのものが学習の場であるという観点が生まれてくる事です。一回切りの人生ならなりふり構っていられませんが、何度もある事なら今回の人生ではどんな事を学んで還ろうかという視点が出てきます。

これが大切な事だと私は思います。やはり、自分の利益だけを考えている間は聖人や偉

人には成れるはずがありません。自分の事は後回しにして、人々の幸せのために全力を尽くす事によって、聖人や偉人と成る事ができるし、そういう人が多数出る事によって世の中は良い方向へ変わっていくのです。

それは、過去の歴史を見ればはっきりしています。たとえば、アメリカの偉人と言えば、リンカーンやルーズベルトなどですが、彼らが出る事によって人民のための政治が実現したり、恐慌を切り抜けたりして社会は多いに発展しましたし、人々もより良い生活を送れるようになりました。

それもこれも、彼らが社会や人々のために全身全霊、尽くしてくれたからに他なりません。もし、彼らが自分の利益だけしか考えない人であったなら歴史はもっと悪い方に変わっていたでしょう。

このように考えていくと、唯物論が生み出すところの自己中心的な考え方は、社会を良くしていこうとする方向とは逆に、人々を争いに導き、社会を険悪になる方へ進めていく事がわかります。現代の社会悪はこれによりかなり影響を受けているのは間違いありません。

ですから、ここでは「たった一度切りの人生」という唯物観から生じてくる自己中心的な考え方が間違いである事をはっきりと認識して欲しいのです。そして、永遠の命の内の数十年を今、人間として地上で生活しているのであり、この経験が自分にとっても、他の人々にとっても貴重な体験となるよう努力研賛して欲しいと思います。

3節　間違った「平等観」

平等とは、すべて皆差別がなく等しい事ですが、この平等という事は現代社会ではあるべき姿のように考えられています。

そして、黒人や先住民の差別の問題や男性と女性の職業上での待遇の違いの問題や、その他様々な問題が起きています。いずれも、人種や性別などによる差別を問題にしているわけです。そして、こうした差別に反対する人々は平等な待遇を目標として闘争しています。

もちろん、人種や性別が違うからと言って隷属的な扱いをされる事は間違っていますし、改めていかねばならない事であります。しかし、すべての人がまったく同じ報酬を受けなければならないという考え方は非現実的です。そこで、この節では社会にとって、この平等という事は実際、どうあるべきかという事について考えてみたいと思います。

まず、平等にも二通りの平等があるという事を知って下さい。一つは、機会の平等です。そして、二つ目は結果の平等です。

第一の機会の平等とは、たとえば、選挙権ですね、誰でもどんなに貧しくても、教養がなくても自分達の代表を選ぶ選挙に投票する事ができるし、また、選挙に出馬する事もできる。この他にも、たとえば、教育を受ける権利ですね。義務教育までは誰でも受ける事ができます。この他にも、公務員試験を受けられる権利とか、様々な権利があります。

これらは、年齢的な制限とか地域的な制限など、ある程度の制約はありますが、かつての身分制度社会のように、奴隷に近いような待遇を受けることのないように、基本的な人

権と機会の平等を保証したものです。

そして、特にこの精神が強く打ち出されたのは、やはり南北戦争当時のアメリカでしょう。当時のリンカーン大統領ですね。この人によって現在の民主主義は開かれたと言っても過言ではありません。彼はこの南北戦争によって黒人の奴隷達を開放し、人民の、人民による、人民のための政治を打ち立てたのです。それ以来、アメリカ合衆国は現在まで百年余りの間、民主主義の代表国として大いに発展してきました。

この頃のアメリカ合衆国は、自由、平等、博愛をモットーとして明るく、自由奔放な国造りを進め、広大な国土の開拓と有効な資源の発掘を進め、急速な発展を遂げる事ができました。経済的にも、文化的にも、あっという間に世界一の大国になってしまいました。

日本も第二次大戦後、現在の憲法が施行され、基本的人権の尊重と主権在民が打ち出され、アメリカに準じたような議会制民主主義政治が行われるようになり、敗戦により荒廃した国土と惨めな想いをした国民も新しく出直し、今では経済的には世界のトップの地位を占めるまでになりました。

この機会の平等という思想は、国民にとっては非情に大きなカンフル剤として、このような飛躍的な発展の推進力となった事は否めないと思います。

このように、機会の平等という事は非情に大きな支持を得て、近代民主主義の礎となっているのです。ですから、機会の平等という考え方は正しい考え方である事がわかります。

次に、二番目の結果の平等はどういう事かと言うと、その人の人種、性別、能力などには関係なく一律の等しい待遇をすべきだという考え方ですね。これは、いわゆる貧富の差を無くそうという考え方で、誰でも等しい報酬を受けるべきだとする共産主義思想と通じ

るものです。

ところが、この結果平等という事は、非情に矛盾を含んだ考え方なのです。

たとえば、会社の経営についてもそうですね。色々な地位や身分がありますし、その肩書きによって報酬は皆違います。また、管理能力や処理能力に優れた人が上位の地位に就くようになっています。そして、その優れた才能により多くの部下を統率し、より優れた仕事をさせる事が出きるような仕組みになっているわけです。

そうすると、企業の中ではそもそも結果平等では経営そのものが成り立たないわけです。その組織体制自体が社長から平社員までの違いを前提として成立しているわけです。そして、上司からの指令によって組織としての意志統一を図れるようになっているのです。ゆえに、すべての人が同じ地位で同じ報酬にしてしまったら最後、企業は崩壊するしかありません。

また、学校の成績などについてもそうですね。皆同じ成績をくれるようになったら、誰も勉強などしなくなるでしょう。なぜなら、勉強してもしなくても同じ成績なら勉強などしないで遊んでいる方が楽だからです。そうすると、学校でも誰も真剣に勉強しなくなりますし、先生も教えるのがばからしくなって時間潰しの授業になるでしょう。すると、どうなるかというと、生徒の実際の学力は極端に低下します。優秀な人が出なくなり、経済的、文化的な発展も鈍ります。

つまり、結果を平等にするだけでは必ずしも良い結果は出ないという事です。やはり、適当な競争がないと、発展していかないのです。それには、一見、悪のように見えるけれども、待遇の違いというものが競争心の引き金になっているのです。これが完全になくな

ってしまうと、停滞と怠慢の社会に堕落してしまうわけです。

共産主義国が皆、停滞しているのはこのためなのです。結果平等を目指しているからです。誰でも貧富の差の無い平等な社会は、一見、理想のように見えますが実は競争心を失わせ、人々を停滞と怠慢に導いているのです。

報酬の額が一律であったら、誰でも楽をする事を考えます。手を抜いて楽をしても、一生懸命汗を流しても、受け取る報酬が同じなら、誰も一生懸命働く人はいなくなります。皆が一生懸命働かなくなったら、社会全体として労働の生産量は低減していく一方です。縮小経済ですね。だんだん小さくなって行きます。衰退の構図です。

旧ソ連のゴルバチョフ大統領時代のペレストロイカは、この体質を改革しようと行われたのですが、流通機構の形成が不十分なために実際には大きな効果が出ずに失敗してしまいました。

このように、結果平等は効果としても衰退の方に向かう結果しか引き出せないのです。結果平等というのは、実は間違った考え方である事が良くわかります。

現在でもこの結果平等の考え方が様々な混乱を与えています。

たとえば、労使の対立です。特に労働者側に多いようですが、他の業界などと比較して自分の会社の報酬が少しでも低いようだったらむきになって賃金アップを訴えます。彼らには、会社の経営状態など少しも眼中にありません。これは、明らかに結果平等を求めているわけですね。この結果、ストライキなどを始めて国民生活に支障を与えています。

他にも、男女雇用機会均等法などができて男女の雇用の機会の差を無くそうという動きがあります。これ自体は機会の平等を目指す動きであり、正しい事だと言えますが、最近

は企業や役所の中で男女の仕事や待遇そのものの平等を求める動きが出ています。

たとえば、女性だけにお茶汲みをさせるのはおかしいとか、男女の幹部の数を同じにしろとか色々言っていますが、もし、男女の仕事を完全に同じにしてしまったら、女性の方が悲鳴を上げるはずです。やはり、女性は重い肉体労働には向いていませんし、逆に、お茶を入れたり、花を生けたりという仕事は男性がやるより女性がやる方が安らぐのです。適材適所という事ですね。

そして、その仕事の量や質に応じた報酬が妥当なのです。困難な仕事も、簡単な仕事も、あるいは重労働も軽労働も報酬が同じであったら誰も難しい仕事や疲れる仕事はしなくなります。やはり、仕事の違いに合わせた報酬の違いは必要なのです。

このように、結果平等は間違った考え方なのですが、何故かと言うと結果は公平ということが必要だからです。

一生懸命、働いた人は怠けていた人より良い待遇を受けて当然なのです。そうであるからこそ、努力というものが生まれてくるのです。怠けたい気持ちは誰にでもあります。しかし、努力するという事は本人にとっても自らの才能を伸ばすことにもなるし、社会にとっても何らかの形でその恩恵を受ける事もあります。これは、望ましい行為であり、国家を発展させていくには、その中の国民が努力するという姿勢を持っている事は必要な事です。

それには、努力に応じた公平な結果がどうしても必要です。これがなければ、やる気も、工夫も、努力も、勤勉さも、消えてしまいます。出てきようがなくなってしまうのです。そして、代わりに停滞と、怠慢と、無気力とが人々の心を支配してしまうのです。

４節　責任の無い自由は凶器と同じ

現代、日本の人々は自由を保証されています。そして、したい放題勝手な事をしています。しかし、自由という事は何の制限も規制も伴わないのでしょうか。ここでは、自由という事について考え直してみたいと思います。

自由とは、確かに何の制限も、規制も無い事ですが、しかし、他の人々を傷つける自由というものは有り得るでしょうか。他人を中傷する自由、障害を加える自由、殺人をする自由など自分以外の人々に積極的に危害を加える自由というものは認められるものではありません。

しかし、本来、自由という事は何の制限もない事である事から考えると、この他人に危害を加える自由はない事は矛盾してきます。自由とは、何の制限も、規制もない事を言うのです。では、何故他人に対しては完全な自由がないのでしょうか。

それは、その他人もまた、自由な人々であるからです。つまり、こちらの気まぐれで傷つけられたり、殺されたりしたら、相手の自由は奪われるわけです。自分も自由だけれども、同じように他の人々もまた自由なのです。自分一人の勝手で他人の自由を阻害する事は許されない事であるわけです。

ですから、ここに自由に対する責任が生まれてくるのです。自由が自由である以上、そこには何の束縛もないわけですが、自分にとっての自由と相手にとっての自由は矛盾する場合があります。自分にとっては、自由であっても相手にとっては束縛である場合もあり

ます。このために、自由には客観性が要求されるわけです。

自分一人だけの片寄った自由ではいけません。他の人々に対しても危害を与えるようなものではなく、社会にとっても害にならないようなものでなければならないのです。

すなわち、自由は公衆の利益に反しない限りにおいて許されるのです。逆に言えば、自由には公衆の利益を守るという責任が付随するのです。

これが本当の自由なのです。他の人々の事など構いもせずに、自分の利益だけのために、他人を阻害する自由など許されないのです。こうしたものは責任の無い自由であり、凶器と同じです。他人を傷つけ、社会を暗く、厳しくしていくのです。このようなものは、実質的には犯罪と変わりがないのです。現代の人々はこの事がわからないのです。

人間は、子供の頃、そう年齢的には５才から１０才くらいの頃が一番顕著でしょうが、この頃の子供は、友達や兄弟などと遊んでいるうちに何か意見が対立すると、必ず喧嘩になります。物の取り合いとか、順番の奪い合いとか、たわいの無い事が多いのですが、お互いに自分の言い分を通そうとして喧嘩を始めます。

そして、大人に止められたり、あるいはどちらかが泣くまで続きます。彼らには、まだ、自分の事しか考えられないのですね。相手の気持ちを考えるという事ができないし、相手もまた、自分の事しか考えていないのです。そのために、この頃の子供は大人の注意を執拗に受けなければなりません。あれはいけない。これもいけない。と、注意ばかりされています。

彼らには、まだ人間としての自由が与えられていないのです。まだ、大人の指図の通りに従わなければならない段階でしかありません。なぜなら、放っておけば自分のしたい事

ばかり始めて、そのうちに他の子供と喧嘩になるからです。公衆の利益を守るというような事はまだ無理なのです。ですから、完全な自由もありません。大人の監視の中での部分的な自由だけです。

ところが、彼らも長ずるにつれてやがて、自分の経験から相手の気持ちがだんだん理解できるようになってきます。相手の態度や言動から、その人の気持ちが大体わかるようになってきます。そして、どうすれば相手が傷つくのかもわかってきます。

ですから、本来はこの時に、相手を傷つけるという事がいかに誤った行為であり、避けなければならない行為であるかを教えるのです。このために、しつけであるとか道徳教育があったのですが、現代の大人達は子供の教育は学校がするものと思い込んでいますし、学校は教育とは知識を詰め込む事だと思っているようでしつけや道徳などに真剣に取り組む人はほとんどいません。

このために、子供達は大人に見つからなければ何でも自由にできると思っているようです。隠れてタバコをすったり、いじめをやったり、万引きをしたり、色々と悪い事をしています。それらのほとんどが興味半分からやっているのですが、何となくスリルがあって面白いのですね。

このような子供が大きくなって、社会人になって会社に入っても上司の言う事を無批判に受け入れて、その指令に服従するような部下にはなかなかなれません。上司からの指令でも、なかなか言うとおりに動かないし、動いても手落ちが多いという仕事ぶりになります。いつも不平や不満ばかり言いながら、形ばかりの仕事をやっているような社員にしかなれません。

会社が、このような人ばかりになったら当然ながらその会社は衰退していきます。こういう人達は組織に入っても、その組織の中でも自分の都合ばかりで行動をしているだけで、組織の一員としての行動が取れないのです。個人的な自由ばかりを主張して、組織の中での役割を担うという事がわからないのです。

会社に入れば、会社の規範を守り、会社の利益のために尽くさなければなりません。同様に、社会の中では、公衆の利益を守るという責任を果たさなければならないのです。このような義務を自動的に負うわけです。

こうした責任を無視した自由は非情に危険な状態だと言わざるを得ません。他の人や社会の事など関係なく、自分さえ良ければ良いというエゴイズムとも関連して、責任の無い自由は公衆の敵だと言っても良いと思います。実際に、様々な社会悪を生み出します。

たとえば、環境汚染です。辺り構わずゴミや廃棄物を捨てたり、また、森林や山を乱開発したり、公害の原因になるようなばい煙や排水を垂れ流したりする人達がいます。彼らに言わせると、法律に触れる行為はいけないが、こうした事は誰でも大なり小なりしているのだから、自分達だけを悪者扱いするのはおかしいと言っています。

結局、公衆の利益を守るという責任が自覚されていない結果ですね。他にやっている人がいるから自分もやっただけで、自分は大して悪くないというくらいにしか考えていないのです。もし、一人一人が公衆の利益に反するような事はしてはいけないという自覚があれば、こんな事はできないはずです。

また、各種の犯罪もそうです。他の人々を陥れるような事は絶対してはならないのです。これが身に滲みてわかっていない。だから、自分の欲のためか、恨みや怒りのために、相

手の自由を強制的に踏みにじるわけです。暴力や窃盗、詐欺、殺人などによって。

また、自殺などもそうです。自殺は、他の誰にも迷惑をかけないのだから、本人の自由ではないかと言う人もいるかも知れませんが、実はそうではありません。人間は皆、社会の一員なのです。どんな人にも何らかの社会関係があるはずです。家庭の関係や会社の関係、地域の関係、学校の関係など様々な社会関係の中で人間は生きているのです。

自殺する自由など本当はないのです。自殺はほとんどの場合、自分の個人的な理由だけです。自分が所属する社会の利益を考えた事がありますか。自殺する事によってその社会は何らかの利益を被るでしょうか。いや、ほとんどの場合は利益はないか、むしろ逆に不利益な事が多いのではないでしょうか。

家族を悲しませ、学校の友達を悲しませ、会社の仕事をなおざりにして自分だけ死んですべてが終わるなどと考えているのなら大きな間違いです。前にも言ったように、死とは生命が消滅する事ではありません。肉体を失った自分の意識自体が地上の生命を中途半端に投げ出した事を後から大変な後悔をしなければならなくなります。

なぜなら、自分の今回の人生の結果を見てみると、家族の深い悲しみ、友達の悲しみ、会社の同僚や上司、部下の人達への迷惑など悪い結果ばかりであるからです。誰でも死ねば必ず今回の人生を振り返る様になっています。その時に深い後悔に打たれるしかないのです。大変、残念な結果です。今回の人生自体がマイナスであったとしか見えなくなります。

このように、現代に住む私達は自由を保証されてはいますが、その自由とは決して自分の勝手で何をしても良いというような自由ではないという事です。公衆の利益を害しない

範囲でしか認められない自由であるのです。これを間違っている人が非情に多いと思います。

本当の自由とは、心の自由であるのです。現実に社会の中で生きていると、色々な束縛があります。それらの中にはどうしようもないものが多くあります。たとえば、親としての子供への責任とか、上司としての部下への責任とか、色々あるわけですが、このような責任とか、どうしてもやらなければならない仕事とか私達にとって束縛とも感じられる事柄は多くあります。しかし、そうした束縛の中でも自由な心を持ち続ける事は可能なのです。

実際のしがらみの中でも自由奔放な純粋な心を持ち続ける事こそが万人に可能性としては与えられている平等な自由であるわけです。決して、何でもしたい放題にする事が自由ではないし、そんな事は許されない事である事を認識して欲しいと思います。

5節　「無神論」の生み出した計り知れない損失

前節までに述べたように、現代社会は色々な面でおかしくなってきています。

それには、唯物論や結果平等、責任を忘れた自由などが大きな原因となっているとお話しました。

それと、もう一つ付け加えるとすれば、人々の結果至上主義ですね。つまり、結果がすべてという考え方です。これも原因の一つになっていると思います。

たとえば、良く言われるのはプロ野球ですね。プロ野球選手は結果がすべてなんだ。ど

んなに力があっても、速い玉が投げられても試合で勝てなければ何にもならない。と、良く言われます。しかし、よくよく考えてみると、アマチュア野球、たとえば高校野球などがあれほど人気があるのは何故でしょうか。それは、高校生のあの熱心さですね。あの野球の中でのひたむきさに感動を覚えるからではないでしょうか。

アウトと思っても、一塁ベースに思いきりヘッドスライディングしていくあの闘志ですね。こうした一つ一つの夢中なプレーに人々は魅力を感じるのです。技術や実力はプロからみればはるかに低いです。力強いプレーや速い玉などを見るだけならアマチュア野球など見る必要はありません。高校球児のはつらつとしたプレーを楽しみにしているわけです。

では、プロ野球はどうでしょうか。本当に勝敗だけがすべてで、後は何もないのでしょうか。確かに、プロ野球選手は球団からは数字で評価されます。今年の成績を数字で評価されて年棒が決まっていきます。そういう面では結果がすべてという言い方はある程度正しいかも知れません。

しかし、現実は観客の動員数はどうですか。必ずしも強い球団に人気があるとは限っていませんし、良くホームランを打つバッターに人気があるとも限っていません。特に大した成績を挙げているわけでもないのに人気のある選手もいますし、逆に素晴らしい成績を挙げているのに人気の無い選手もいます。これは、単なる技術や実力だけではなく、その人の態度や一生懸命さやファンに対するサービス度などによって違ってくるからですね。

そして、球団側の最大の収入源はといえば観客動員数ですね。この観客の入場料です。すると、実力とはまた別に観客をどれだけ呼べるかという評価が本当は必要なのです。これが今は無いからですね。だから、優勝する事や個人成績にばかり評価が片寄っているた

めに、結果だけだという論理になるわけであって、もし人気度も評価されていたらマナーを良くして観客を集めようとする選手や高校球児顔負けのはつらつプレーで人気を呼ぶ選手などが現れてくるはずです。こうなれば、結果だけではなく普段のプレー自体が大切になってくるわけです。

今、プロ野球の例で説明したのですが、要するに結果至上主義は現在の制度の片寄りによって生じているのが大部分なのです。私達の生活について考えてみれば、プロ野球でも結果だけではなければ、普通の仕事なら、なおさらです。単なる給料や昇格だけがすべてではありません。普段の仕事ぶりや上司の信頼度や部下の信望などが非情に大切な指標なのです。もちろん、正当に評価されているとは限りませんが。

現代のような間違った常識がはびこっている社会では必ずしも公平な評価があるとは言えません。しかし、評価の正否は別として、結果がすべてという考え方はほとんどの場合が間違いです。これは唯物観とも関連して限られた人生の中で少しでも良い待遇を受けたいという気持ちが待遇という結果にしか目を向けさせていないのです。

しかし、これは前にも述べたように私達自身の生命は永遠であり、人生とは一回限りのものではありません。ですから、逆に今回の人生を特徴づける生き方が一番大事な事なのです。結果は三つしかありません。良い結果か悪い結果か、その中間かですが、しかし、その過程は様々な場合が有り得ます。どれだけ努力したか、どれほど工夫したか、どれだけ情熱的であったかなど、このような視点で見れば人生そのものの質が変化してくるのです。

ですから、一番大切な事は結果ではなく、その過程でどれだけ満足の行く行動を取れた

かということなのです。この事も間違っている人がかなり多いと思います。
さて、このように色々と間違った常識がはびこっている現代社会ですが、では理想的な社会とは果たしてどのような社会なのでしょうか。
現在の社会が犯罪やいじめなどの社会悪や戦乱の危険などに満ちている事を考えると、こうした事がない社会というのはかなり理想に近い社会ではないでしょうか。
もっと具体的に言うと、その社会の中では人々は共に尊重し合いながら生きており、従って各種の社会悪や犯罪などは無く、海外の国々とも親密な交易があり、よって戦争に巻き込まれる危険も無く、環境汚染や破壊をする人達も無く、人々は自分達の仕事や毎日の暮らしに満足して楽しく生活しているような社会でしょう。
このような社会があれば、人々はまるで天国で生活しているように幸福な日々が送れるのではないでしょうか。もちろん、個人的な環境や待遇というような問題もあって、必ずしもすべての人が幸福とはならないでしょうが。しかし、社会としてはかなり理想的な状態である事は確かです。
すると、現在の状態とはまるで正反対の状態である事が良くわかります。ですから、現代社会の常識でありながら大きく間違っている、唯物論や結果平等や責任の無い自由などを完全に排斥する事ができれば、かなり良い状態になる事も可能です。
そして、逆に何を取り入れて行けば良いのかと言うと、人々の心を互いに結び付け、協調や博愛を生み出し、不平や不満を感じず、現状に満足できるような国民になっていくようなものを取り入れていくべきなのです。そのような国民で埋め尽くせば、国の中には不平や不満から犯罪や各種の社会悪を働く人達は発生しませんし、逆に愛し合い、助け合う

人々で一杯になるはずです。
では、具体的にどのような精神を取り入れて行けば良いのかと考えてみると、協調、博愛、感謝などです。
これらをどのように国民に発揮させるかという点については、実は「信仰」が一番効果的なのです。いわゆる「宗教」です。
なぜなら、「人間は皆、神や自然に感謝しながら、お互いに助け合い、愛し合わなければならない存在である。」と、すべて包括して定義できるし、また神への信仰を通してこうした教えに心から無条件に従がう事が可能だからです。
ですから、このような国民を協調や博愛や感謝などに導くような宗教を根付かす事ができれば国は自然と調和されて行くはずです。先祖供養や霊能力や肉体行などばかりしているような宗教では何の役にも立ちません。人々を純粋に良くしていく宗教でなければなりません。
純粋に偉大なる神の存在を信じさせ、人間の小ささを教え、しかし、人間はその偉大な神の子である事も教え、お互いに愛し合い、助け合って生きていかせるようなものでなければなりません。このような宗教を国民が百％信じてくれればその国は地上にできた天国になるでしょう。犯罪や争いはほとんどなく、愛し合い、助け合う人ばかりになります。
しかし、そのような宗教を現代人が素直に信じる事ができるでしょうか。
今の人々の状況を見ていると、私はまず無理だと思います。なぜなら、現在は無神論が常識だからです。ごく、普通の人でも神など何処にいるのか、いるというなら証拠を見せて見ろと言うでしょう。現在、本当に神や仏の存在を信じている人は１０％もいないでし

ょう。こうした現状であるから、このような宗教を根付かす事は不可能に近いのです、現状では。

しかし、無神論というのは、実はこれも正しい事ではないのです。

まず、神というものを人間のような存在と思ってはいけません。人間などはるかに超越した巨大な意識です。そして、この巨大意識があって始めてすべてのものは存在できるのです。たとえば、太陽系、地球始め九つの惑星や他の衛星などを規則正しく運行させている太陽系の秩序があります。また、銀河系にはこの太陽系のような恒星系が何億とあります。これらのそれぞれに厳密な秩序があり、銀河系自体の秩序もまたあります。

そして、こうした星雲がこの宇宙には何百万とあり、それぞれが秩序を体現しており、そうした星雲を秩序正しく保っている宇宙の秩序もまた存在します。これらの秩序は、非情に正確にかつ、整然と保たれており、なかなか破られる事はありません。これは、単なる偶然などではなく、宇宙には宇宙全体を貫いた法則が、理法が働いているからです。この、宇宙全体に法則を働かせ、秩序を維持させている意識を神と呼ぶのです。

そうすると、神とは現在一般に思われているような信仰用の架空の存在ではないわけです。将来は、科学の研究対象にさえなるでしょう。しかし、現時点において本当に神が存在する事を証明する事など無理ですし、証拠もありません。

ですから、信じるか信じないかの問題になるわけですが、人々が信じてくれた方が私達にとって幸せな結果が出る事は先ほど述べましたが、現代の唯物思想の蔓延の状態の中では信じてくれる人は少ないのが事実です。

でも、結局はこの世のものすべてを偶然の産物と見るか、整然とした秩序の元に生まれ

たものと見るかの違いに過ぎないのです。

宇宙も、地球も、その他のあらゆる物や生物達を偶然生まれてきた存在と思っている人は神など信じる事はできないでしょう。いや、神どころか、他人を、あるいは自分自身さえ信じる事ができないのではないでしょうか。現在の自分の命を陽炎のような偶然の灯火と思っているのですから、悲壮です。他人を信じる余裕など無いでしょう。こういう人達に神を信じろと言っても無理ですね。精神的な余裕がないために、理性的な判断ができないのです。

しかし、宇宙にも、この地球上にも、大自然にも、必ず神を感じさせる瞬間があるはずです。始めて宇宙空間に出て、丸く青い地球の姿を見た宇宙飛行士の何人もが「地球の姿を見て、神が存在する事を実感した。あのような美しいものが偶然生まれるわけがない。」と言っていますし、大自然の景色にも思わず、私達の胸を打つような素晴らしい景色があります。大海原に沈む夕日や、雪の中の山頂の景色など、筆舌に尽くし難い景観というものは現実にあります。

こうしたものがすべて偶然の産物と言うのなら、美という概念自体が意味の無いものになってしまいます。偶然現れるものが美であるなら、美を求める事など幻を追いかけているようなものです。はかない事になってしまいます。芸術家が一生をかけて美を追求しているのは、自分の力で美を形にしたいからです。美とは、偶然生まれるものではなく、努力して創り上げるものなのです。美は創作するものであるわけです。

こうした美が既に宇宙や、地球や、自然の中にあると言う事はこれらが創作されたものであると言う事を如実に表していると思うのです。

しかし、神の存在証明をするところまでは無理ですから、ここでは現代社会にはびこる間違った唯物思想や物質科学万能主義が無神論の根拠となり、人々が素直に神への信仰を持てなくなっている事を認識して頂きたいと思います。そして、この無神論が理想的な社会の出現を阻んでいるのが事実で、これは本当に計り知れない損失なのです。

第３章　真実に目覚めよう

１節　エネルギーの科学される時代

この本の題名の「アクエリアス」とは何の事でしょうか。アクエリアスとは水瓶座の事です。星座や星占いに出てくる水瓶座の事なのです。

そして、この水瓶座はどんな意味を持つ星座かと言うと、実は幸福の象徴なのです。水瓶座の支配に入るという事は、人々が幸福に暮らすようになるという事なのです。そして、この水瓶座、アクエリアスの時代は星占いでも２０２０年前後に来るのですが、実際にも人類はこのくらいの頃に大変革を経てアクエリアスの時代を迎える事になると予想されます。至福の時代です。世界中の人々が幸せに平和に暮らしていける社会の誕生を意味します。

では、このアクエリアスの時代を迎えるためにはどのような変革が必要なのでしょうか。どんな事柄について目覚めなければならないのでしょうか。それについて、この章では現時点でわかる限り解説してみたいと思います。

まず、始めにエネルギーが科学される時代が訪れなければならないという事です。

エネルギーというのは目にも見えませんし、耳にも聞こえません、匂いもありません、もちろん味も確かめられませんし、指や皮膚でも触る事はできません。つまり、元々私達の肉体の五感では直接感知できない存在なのです。本来、エネルギーがここにあるのか無いのかは私達の感覚だけではわからないようになっているのです。

しかし、私達はそのエネルギーなる不思議な性質のものを様々な機会に間接的にその存在を伺い知る事はできます。たとえば、雷の時の電気エネルギーを落雷という自然現象から確認する事ができますし、今ではいつでも、誰でも、各家庭にある電気コンセントに電気機器をつなげば動かす事ができる事からも電気エネルギーの存在を確認できます。

電気エネルギーの他にも熱エネルギーとか、光エネルギーとか、原子力エネルギーとかがあります。これも現代では特に証明を必要とせずに、一般の人々にも理解していただけると思います。この種のエネルギーを利用した機器も現実に色々あります。たとえば、電気ストーブや電気こたつ、各種照明器具、あるいは原子力発電所や核ミサイルなどがこうしたエネルギーを利用して各種の働きを発揮しています。

こうした様々なエネルギーが確かに実在します。これは照明の必要もないと思います。誰でも納得していただけるでしょう。ところが、こうした私達が今まで良く利用していたエネルギーの他にもまだ様々なエネルギーがあります。その一つが生命エネルギーなのです。

生命エネルギーとは、端的に表現すれば生物を動かしている力の事です。たとえば、私達人間について言うと、内臓という物があります。この内臓、たとえば心臓などですが、これを動かしている力は何ですか。心臓はあのように１分間に６０回くらい鼓動していますがこの動力源は何でしょう。これが、実は生命エネルギーなのです。

テレビなどで、救急患者が手術室に運び込まれて色々な手当を受けるのですが、血圧が下がって心臓が停止する場面が出る事がありますね。そういう時に医者はすぐに、心臓マッサージと呼ばれる処置を施します。いわゆる電気ショックです。このパルス性の電気シ

ョックを与えると、その刺激によりまた心臓が動き出す場合があるのです。

これなどを考えてみますと、良くわかると思うのですが、心臓という内臓自体に動こうとする力が内包されているのです。ですから、通常は絶えず動いているのですが、事故などによって肉体が傷ついたり、ショックを受けたりすると調子が狂ってくるわけですね。そして、最悪は停止してしまって体中に血液が循環しなくなってしまいます。こうなると、肉体はまったく機能しなくなりますね。

でも、このような停止の状態になっても先ほどの心臓マッサージによって回復する場合もあります。これは、なぜなら心臓自体に生命エネルギーを蓄えていて、これが絶えず心臓を動かそうとしているからなのです。だから、心臓への電気ショックというきっかけで本来の動きに戻る事があるわけで、この動かそうとする力自体がなければいくら電気ショックを与えたところで心臓が動き出す事など絶対に有り得ません。

これは、他の内臓にもすべて当てはまります。これらの内臓はすべて生命エネルギーによって活動しているのです。また、脳も同じです。生命エネルギーによって肉体のバランスのコントロールとか操縦を指令したり、外部からの刺激を感知したり、色々な重要な働きを担っています。この脳にも生命エネルギーが働いています。

こうした肉体の諸器官を活動させている意識が私達の生命だと前にお話ししましたが、この意識自体は一体何者かと言うと、これもまた生命エネルギーに他ならないのです。ただ、内臓などと一緒になっているエネルギーよりは、はるかに高度な働きを持っています。たとえば、思考したり、喜怒哀楽の感情や、閃きのような直感など様々な力を発揮できるエネルギー体なのです。このエネルギー体が私達の生命自身の本当の姿であり、肉体はこ

の物質の世界の中での投影にしか過ぎません。

この生命エネルギーが科学されなければならない時期が来ていると思うのです。現在では、この肉体の中に隠れている本来の生命の姿を言っているものは宗教だけです。宗教で言う魂とか霊とか言うものがこれに該当するのです。

しかし、宗教の中に、特に新興宗教の中にはおかしなものが一杯あってこれらに洗脳されると、奇行ばかりをするような人間になってしまいます。狂信、盲信のたぐいですが、これが一部では深刻な社会問題となっているのも事実です。

こうした社会背景もあって、宗教は気味の悪いものというのが、現在の一般的な印象になっているようです。ですから、学会などでも少しでも宗教まがいの発言をすればその科学者は間違いなく他の学者達からおかしく思われるでしょう。このような現実があって、こうした生命エネルギーの分野というのは、今まではほとんど見向きもされなかった訳です。このために、非情にこの分野の進歩が遅れました。

この遅れを急速に取り戻すべき時期が近づいてきています。まずは、この生命エネルギーの存在を新たに認識しなければなりません。そして、次には宇宙エネルギーとも呼ばれるエネルギーも実在する事に気づく必要もあるでしょう。

このごろ、フリーエネルギーとか呼ばれているようですが、要するにこの地上の物質世界では有り得ないエネルギーを引いてくる事を言っているようです。たとえば、永久に回り続ける機関とか入力よりも出力の方が大きくなる発電気などですが、こうした物は通常の地上の法則では絶対に不可能なのです。何をするにも必ずロスがあり、そのロスの分だけはどうしても効率が落ちますから、永久に動き続けたり、あるいは入力より出力が多い

ようなものなどできるわけがないのです。

これが地上での科学常識ですし、また正しい法則でもあります。

ところが、これには例外があるのです。それは、物質の変化に伴わない余分なエネルギーを引いてこられた場合です。たとえば、今は超伝導効果と言う言葉もかなりポピュラーになってきました。リニアモーターカーが浮上するあの原理ですね。ある種の合金やセラミックスを極低温にすると、超伝導と言って電気抵抗が0になる現象です。

これなども、地上の普通の法則では考えられないのです。電気抵抗が無い導線が開発されれば発電した電気をそっくりそのまま保存しておく事が可能となります。送電線により発熱などによって失われる電気がなくなりますから、回路を閉じてそこに電気を一度流せば永久に流れ続けるわけです。結果的に保存しておく事になります。

これは、先ほどの永久に動き続ける機関とほぼ同じ事ですね。夢のようなものが実現するわけです。

しかし、これはロスを無しにしただけです。入力より出力を多くしようとすれば、どこかからエネルギーを取り組む以外に手はありません。これがフリーエネルギーの研究なのですが、この分野もこれから本格的に研究されていくと思います。

ここで、「そんなフリーエネルギーなど一体何処にあるのか。そんなものあるわけがない。」と言われるかたぶつの科学者もいるでしょうから、触りだけ解説しておきたいと思います。

たとえば、ピラミッドパワーと言う言葉を聞いた事もあると思いますが、ピラミッドには数々の不思議があります。まず、あの巨大な石ですね。あんな巨大な石をどうやって積

んだのか。また、その積み方もマッチ棒さえ入らないほど隙間がありませんし、巨大な山のような大きさの物までであります。また、その切り出された石ときたらまるでレーザ光線で切られたように正確に鋭利に加工されていますし、その一個の巨大な事、いったいどのようにして上に積んでいったのか不思議ばかりです。

もっと不思議な事は、これらのピラミッドの辺の向いている方向が正確に東西南北に合っている事です。また、その辺の長さと高さの相関関係には地球と太陽の距離の比が含まれていると言う事です。

そして、驚くべき事はこのピラミッドの重心付近にある棺のある部屋では何故か、死体が腐らずにミイラ化してしまうという事です。気温や湿度のせいだろうと思われているようですが、そうではありません。

このピラミッドの形そのものに大きな意味があるのです。この大きさの相似のピラミッドを作り、正確に方位を合わせると、この内部や頂点付近にエネルギーの集中が起きるようです。重心付近にはエネルギーの集中が、頂点付近にはエネルギーの放射が行われるようで、この辺りに物を置いておくと果物などが長く鮮度が落ちなかったり、水がおいしくなったり、人間が入ると精神的なパワーが増大すると言われています。

こうした未知のパワーをピラミッドパワーと呼んでいますが、これなども宇宙に遍満するフリーエネルギーを増幅しているのです。この原理はまだ良くはわかっていませんが、私はこれは私達が現在使用している八木アンテナのような物だと推定しています。

八木アンテナはその構造上、周波数にあった長さのアルミ棒に一定の距離を置いて後ろに少し長い棒と前に短い棒を置くと、これらが電波を増幅する効果があり、今市販の物で

も普通のアルミ棒一本よりは１０倍ほどの効果があります。しかし、これらの長さや距離は使用する電波の波長によって決まっており、またその方向も正確に放送局に向いていなければなりません。このアンテナの原理とおそらく同じ様な理屈でフリーエネルギーが増幅されるのだと思います。

また、現実にこのフリーエネルギーを取り組む事に成功した人達もいるのです。ＥＭＡモーターといって入力よりも出力の方が大きいモーターを開発した人達がいます。それらの構造はまちまちですが、傾向としては、単なるモーターとは違って高圧コイルなどがあってこれでできた高圧電流で放電させる部分を持っている構造が多いようです。

そして、成功したモーターを動かしてみると、モーターは通常は発熱により熱くなるのですが、このＥＭＡモーターは逆に冷たくなって水滴が付いてきたという事です。そして、入力の和と出てきた出力の和を計算してみると出力の方が大きいという結果が出ているのです。

これは、この放電部分からフリーエネルギーを取り込んでいるようです。このため、通常の現象とは逆にモーターは長時間運転を続けると、冷却されるのです。

ただ、残念な事にこうしたフリーエネルギーを取り込んだ装置はことごとく妨害にあって、今のところ社会に普及する事ができないでいます。なぜなら、こうしたフリーエネルギー装置は地球規模でのエネルギー革命を引き起こす可能性があるからです。このモーターのように一度動かせば永久に動き続ける、あるいは逆にエネルギーを生み出すとあっては、現在の石油などに頼っているエネルギー資源はもう要らなくなるからです。

そして、こうした資源で現在、巨大な利益を上げているところは死活問題になります。

莫大なお金が入らなくなるのです。そんな事になっては困るから今の内に妨害しておこうという事ですね。こうした影での駆け引きが現実にあるようです。

しかし、時代の流れ自体をいつまでも遮りきれるものではありません。やがて、フリーエネルギー全盛の時代が来世期には訪れるでしょう。

このようにこれからの科学は、エネルギーの科学される時代を迎える事になるのです。そして、現在その存在さえ疑問視されている生命エネルギーの神秘にも真剣に研究対象として取り組める時代もやがて来るでしょう。

2節　異次元世界の発見

この次に新しく踏み込んでいかなければならない分野として、異次元世界があります。異次元世界と言うとまるでＳＦのようですが、これはエネルギーの次元の事です。

エネルギーというのは物質的な形を持ちませんから、私達が今住んでいるこの地上の世界、縦、横、高さのある形状の世界、いわゆる三次元の世界ではありません。異次元の世界に存在しているのです。

そして、この異次元空間というのは何処か彼方にある空間ではなく、この三次元空間と同居して、共に同じ空間に共存しているのです。だから、生物という三次元世界に生命エネルギーという異次元世界が合体する事ができるわけです。同じ所に共存しているからです。

また、この三次元世界に存在する物はすべてその中にエネルギーを持っています。逆に

言うと、存在するためには内部エネルギーが必要なのです。

ですから、前節でエネルギーが科学される時代が来ると言いましたが、同じくそのエネルギーの存在する空間の研究も必要であると思うのです。

このエネルギーの次元とはどういう次元なのでしょうか。まず、花の場合の生命エネルギーを考えてみますと、花自体は三次元の物質世界ですが、最初は種や球根ですね。これを土に蒔く事によって芽が出ます。そして、これが成長すると、茎が伸び、葉が出てきて、やがて花が咲きます。

この間、三次元的に見ると、様々に姿が変化しています。しかし、その急激な変化ではありますが、最後は決まった花を咲かすようになっているわけです。つまり、一定のプログラムが花の中に仕組まれているわけです。ですから、朝顔はいつも朝顔ですし、ひまわりはいつもひまわりです。こうした固有のプログラムに当たる物と、その変化に要する力これが生命エネルギーの働きなのです。

ですから、生命エネルギーの存在自体には既に種や球根から芽を出させ、茎や葉を繁らせ、やがて菊なら菊の花を咲かせるというプログラムとその成長に必要なエネルギーが包含されているのです。その種や球根が成長する前から既に生命エネルギーにはそうした計画を持っていた訳ですね。その生命エネルギー自体がそうした一つの概念を形成しているのです。

この意味から言うと、生命エネルギーは時間を既にその存在の中に合わせ持っていると言う事ができます。すなわち、私達の住むこの三次元の物質世界は総体的な時間の流れの中で存在しています。誰でも、何年何月何日の何時何分何秒という時間は共通ですし、誰

もこれを変える事はできません。

しかし、生命エネルギー自体はそうではなく、その存在が時間を内包しているのです。ですから、私達が考えるときでも未来の事を想像したり、過去の出来事をふりかえったり自由にできるのです。存在の中に時間を併せ持っているために、現在を離れた思考や予想や回顧が容易にできるのです。本来、生命エネルギーというのはもっと自由な存在なのです。この三次元のようにいつの時間の何処の場所に存在が限定されるような物ではないのです。

自由自在にいつの時間にも存在できるし、何処の場所にも存在できるのです。ただ、この融通さが、肉体に入る事によって奪われているだけなのです。だから、肉体を離れれば現在も過去も自由自在ですし、場所も何処でも移動できます。こうした存在のあり方が生命エネルギーの世界なのです。こうした空間がこの三次元の空間と同居しています。

誠に不思議な話ではありますが、こうしたこの地上とはまったく異なった空間が存在するのです。この空間はこの三次元の空間が総体的な時間の流れの中でしか存在できないのとは違って、絶対的な時間に存在できる事から時間という要素をその構成要素に持つと考えられます。故に、縦、横、高さに時間の要素を加えて四次元世界と呼ぶ事とします。

すると、この四次元空間には固有の時間が存在しますから、三次元で我々が普通感じている時間の感覚とは随分変わった世界が展開してきます。たとえば、この地上のように現在、過去、未来というような明確な区別はありません。そのエネルギーの存在のあり方がすべてを規定する世界であって、そのエネルギーがずっと過去の姿を変えようとしなければ、永久に過去ですし、未来の姿を望めば未来ばかりです。

つまり、エネルギー、特に生命エネルギーですね。この生命エネルギーは、活力そのものが実態なのです。エネルギーとは形ある物ではありませんから、エネルギーとはこの世界に現象を引き起こす力の事をさします。たとえば、熱エネルギーとはこの世界に暖かさをもたらし、気温や水温の上昇を引き起こす力です。同様に、光エネルギーはこの世界に明るさというもの、光の粒子を通じて光度をもたらす力です。

これに対して、生命エネルギーとは生物の活力そのものなのです。この生命エネルギーがすべての生物を生かし、活動させているのです。ですから、この生命エネルギーに限って、異次元空間に於ける存在のあり方を考えると、特に人間のような高度に思考できる生命エネルギーはその思考そのものが力であり、エネルギーの活動そのものに該当します。

そして、姿形という物は本来あまり意味を持ちません。つまり、エネルギーとは力そのものが実態であり、それが力を発揮する事が活動なのですから、それが普段どんな形であるかとか、どんな姿をしているかなど関係がないのです。ところが、生命エネルギーには感覚というものが備わっています。感じる力ですね。これによって、人間でも相手の感情が伝わってきたりしますね。こうした感覚により、他の生命エネルギーの存在の仕方を感じる事ができます。

もちろん、人間のように肉眼で見ているわけではありませんが、この感覚によると過去の江戸時代に存在していた事ばかり思考している生命エネルギーは武士のように感じますし、未来の場合は未来人間のように見えます。ですから、その生命エネルギーの存在の仕方はその生命エネルギーが決めているわけです。これは、時間的な存在の仕方だけではなく、空間的な存在の仕方についても同様です。この場所に存在したいという意志があって

そこに存在しているのであって、あそこの方が良いと思えば、あそこに存在するという具合なのです。

そのものの意識が時間、空間の存在の仕方を規定しているのです。四次元空間ではこのような存在の仕方が普通なのです。結果的に、ある地点から別の地点まで瞬時に移動できる事になります。この世界では考えられない事が当たり前の世界です。なぜなら、この地上の世界では距離というものは移動に際しての移動速度に時間を掛けたものですが、四次元に於いては時間が意識の手に委ねられていますから、瞬間的な移動を望む以上、移動時間はゼロになるからです。このため、距離というものは移動速度にゼロを掛けたもの、すなわちゼロになるわけです。距離というものは無いのですね。遠いところ、近いところというものは有り得ないし、移動するのに時間がかかるという事も有り得ないわけです。

ですから、私達が死んで肉体を離れますと、この生命エネルギーの次元の世界に存在するようになるわけです。この地上で生きていたときの感覚で話をすると、何処でも瞬時に移動する事ができますし、地上のような時間的な束縛は何もありません。いつまでも同じ姿でいられるし、ずっと同じ事をしている事もできます。強制的な時間の流れがないわけですから、年も取りません。いつまでも同じ姿でいられます。

つまり、老いる事無く、死ぬ事無く、永遠の生命なのです。これがこの世界での普通の存在形式です。ところが、困った問題もあります。それは、その意識の絶対的な自由があるために、穏和な愛情深い意識はそうした思考ばかり発していますから、周りにはそうした世界が展開して幸せなのですが、逆に妬みとか恨みとか不平や不満などの思考ばかりしている意識の周りは争いや闘争の世界が展開して、たいへん不幸な世界となります。俗に

言うと、前者が天国ですし、後者が地獄です。

このように、その意識の思考がその意識の存在そのものを規定するという世界です。こうした異次元の空間が存在します。これを真剣に科学していかなければなりません。

前節で述べたフリーエネルギーが一体何処から引いてこられるのかと言うと、結局この異次元空間に存在するエネルギーに他ならないのです。ですから、まずこうしたフリーエネルギーを取り組む事から研究していき、実際にその技術を開発し、それを利用しながらこのフリーエネルギーが引いてこられる空間を研究していくのが妥当な順序だと思います。

また、このように順序を経て取り組んでいかないと、現在の物質がすべてという価値観が主流の状態からはあまりにもギャップがありすぎて人々に受け入れられるのは難しいと思います。

しかし、こうした異次元空間の存在の可能性はアインシュタインの特殊相対性理論などでも示されています。彼は、光速度を絶対の速度として考えるときにある条件下に於いては空間が歪む、あるいは時間が歪む事を発表しています。これは、タイムマシンの原理とも言われているようですが要するに、時間や空間がこの地上とは大きく異なる世界、異次元の世界の存在をほのめかしている事に他なりません。

いずれにしても、異次元空間の存在に気づくという事が必要な事であると感じます。

3節　地球以外の生命の真実

私達地球人が思っているように、生命とは地球にだけ生きているのでしょうか。地球以

外の星には生物はいないのでしょうか。

これについて考えてみると、一般の人々は地球人以外に生命はいないとは考えていないようです。しかし、人間より高度に発達した宇宙人がいるとも思っていないようです。地球以外にも生物はいるかも知れないが、我々地球人以上の知性を持った生物は信じられないというのが本音なのです。ましてや、ＵＦＯに乗って宇宙人が地球に来ているというような話はとても信じられないのが普通の人達でしょう。

でも、本当のところはどうなのでしょうか。まず、生命が地球にしかいないという考え方は明らかに無理があると思います。宇宙には非情に多くの星があります。銀河系だけでも何十万、あるいは何百万という星の周りに地球のような惑星が幾つかありますから、銀河系には地球のような惑星は億の数くらいある事になります。

この億の数の惑星にたった一つ地球にだけ生物が住んでいるという考え方は少し無理があります。やはり、同じ様な環境の星は幾つかあるでしょうし、そうした環境の星には地球と同じように何らかの生命が宿っていると考える方が自然でしょう。また、星雲は銀河系だけではないのです。他にも何万と無く星雲が存在するのですから、地球以外にも生命はいるという考え方は受け入れざるを得ないと思います。

しかし、そこに地球と同じ様な生物がいるとは限りません。まったく違った形態の生命かも知れません。しかし、何らかの形で地球外生命は他の星には生きているのは必然です。では、他の惑星には一体どのような生命が生きているのでしょうか。

まず、可能性としては三つの場合に分かれます。一つ目は地球人より文明の進んだ宇宙人はいない場合です。二つ目は地球人と同程度の文明を持つ宇宙人がいる場合です。そし

て、最後の三つ目は地球人よりも進んだ文明を持つ宇宙人がいる場合です。

最初の地球人以上に進んだ宇宙人はいないと考える場合は、いわゆるかびのような菌類や植物ばかりで動物がいても人間のように知恵のある動物はいないという考え方です。これは一見、真実味がありますが、理論的に考えてみると、同じ様な環境にあれば同じ様な人間もいても良いはずです。また、二番目のように地球人と文化程度が同じであると見るのは、進化速度がまったく同じであれば可能性のある事ですが、惑星の誕生した年代は皆違うのが現実であり、早く生まれた宇宙人もいるでしょうし、それらが皆同じ進化の状態にあると考えるのも無理があります。

すると、結局三番目の地球人より進んだ文明を持つ宇宙人もいるという仮説を受け入れざるを得ません。地球人だけがこの宇宙に住んでいるのではなく、我々地球人より進んだ文明を持つ宇宙人もいるという事です。

では、彼らが本当にこの地球に円盤に乗ってやってきているのでしょうか。これは、アメリカについて考えてみるとはっきりします。

まず、アメリカではＵＦＯの目撃報告が数多くあります。また、軍でもＵＦＯ関連のニュースはすべてトップシークレットと呼ばれる国家の最高機密です。ですから、情報公開を請求しても間違いなく拒否されます。まったくありもしない事柄を国家の最高機密として秘密にしておくはずもありませんから、やはり、何らかの事実があり、そしてそれは国家や軍にとって重大な意味を持つ事柄であるはずです。

また、現実にアメリカの各地でキャトルミューティレイションと呼ばれる不思議な事件がここ数十年間、時々起きています。これは牛の内臓がまるでレーザー光線で切りとった

ように鋭利な切り口で丸く切りとられ、内臓をそっくり持ち去られているという事件です。それも一晩の内に、そしてさらに不思議な事にはその牛の中にも、周りにも血が一滴もこぼれていないのです。

こんな怪事件が報道されたのはもう二十年以上も前の事です。そして、現在でもときどき起きているようです。しかし、国は何故かこの事件をあまり真剣に取り上げようとしません。それどころか、何故か隠すような工作さえ感じられます。こんな事件が地球人の今の科学力で起こせるわけがありません。地球以上に進んだ科学を使用しなければ不可能なのです。

でも、これを国家が隠しているのは何故でしょう。ＮＡＳＡも宇宙では何度もＵＦＯを目撃しているという情報もあるのにそうした発表は一度もされた事がありません。

こうした一連のＵＦＯ関連の事件を扱う機関にＭＪ－１２という機関があるようです。そして、この機関はある意味では大統領よりも権力を持っているようです。こうした秘密を守るためには暗殺さえすると言われています。この影の権力がこのＵＦＯ事件をことごとく闇に消してきたようです。これは、矢追純一さんとか色々なＵＦＯ研究家が本に書いています。はっきりとした事はわかりませんが、おそらくかなりの部分が本当でしょう。

こうした影の権力の思惑もあって、公然と発表はされていませんが、ＵＦＯが少なくともアメリカに来ている事は間違いないと思います。

すると、またさらなる疑問が湧いてきます。それは彼らは何処から、どうやって、何をしに来ているのかという疑問です。

これにもはっきりとはわかりませんが、何処から来ているにせよ、かなりの距離を飛ん

で来ているのは間違いありません。そんな光の速度でも何十年も何百年もかかるところから飛んでこれるものでしょうか。私達の宇宙船の速度では隣の太陽系に行くのさえ何十年もかかってしまうのです。

しかし、実はこれも可能なのです。それは前節の異次元空間を通ってくれば、たとえ何億光年という果てしない距離でさえ瞬間に移動できる可能性があるからです。前にも言ったように四次元空間には時間の要素が含まれていますから距離というものは何等拘束力を持たないわけです。この三次元のように距離を移動速度で除したものが時間ではないのです。ですから、可能性としては他の天体、私達がその存在さえ知らない遠い天体から高度に進んだ科学力を持つ宇宙人が飛来しているという事は大いに有り得るわけです。

四次元空間を通るとはどういう事でしょうか。そんな事が本当に可能なのでしょうか。それには、素粒子の最先端の研究がそのヒントを与えてくれています。プラズマ研究所でプラズマの高エネルギー状態を作り出すと、クォークという素粒子が突如出現したり、あるいは急に消滅したりする現象が現れています。

これは、素粒子という物質が忽然と出現したり、消滅したりするという不可思議な事実なのです。これに対して現在の科学では合理的な解説を付加する事ができないでいますが、これなどは実は異次元空間から三次元空間に現れたり、逆に三次元から異次元へ消えたりしているのです。つまり、物質の成り立ちというのはエネルギーが固形化して一定の形状を持ったものに他ならないのです。固形化したものが物質ですし、そうでない状態がエネルギーです。これがプラズマの高エネルギー状態により現象化しているのです。

ですから、宇宙船自体を高エネルギー状態にしてやれば異次元空間へ入る事は理論的に

は可能性はあると思います。もちろん、現在の科学力ではまだまだ無理ですが。

では、彼らは一体何のために地球に来ているのか、またそれほど科学力に差があるのならどうして地球を征服してしまわないのかについて考えてみましょう。

これには、何のために飛来してきているのかは色々な理由があるでしょう。地球人の文明を観察にきているとか、あるいは生体実験にきているとか、移住しようとして見に来ているとか色々あると思います。そして、生体実験にきている宇宙人たちが先ほどのキャトルミューティレイションを起こしているのです。

では、どうして正式に訪問したり、あるいは侵略したりしないのでしょう。それは、私達には不思議に見えますが、宇宙を旅する者のルールなのです。規則で決まっているのですね。他の惑星の文明に干渉してはいけない事になっているのです。やはり、その星独自の文明であるから価値があるのであって、すべて画一的なものになっては価値も半減してしまいます。また、自分達の欲望から他の星を植民地にすることなど許されないのです。

こういう宇宙の憲法のようなものがあって、またこれを守るために警察のような役割をしている宇宙人たちも現実にいるのです。このため、今までの地球人の科学レベルではむやみに刺激するのは好ましくないと判断され、なるべく発見されないように飛来してきているわけです。

しかし、宇宙人の中には警察のような優等生だけではなく、隙あれば侵略してやろうと狙っている者もいます。そういう意味では、私達は賢くなければならないのです。侵略の意図を持つ宇宙人達と仲良くしてはならないし、強い態度を見せなければなりません。

やがて、私達も宇宙の仲間入りをするときがきます。それももうそれほど遠い将来では

ありません。この本で言うアクエリアスの時代になれば、宇宙人達との頻繁な交易が開始されるでしょう。

4節　恒星、惑星は生命体である

この節のタイトル自体が奇抜に思えるでしょう。恒星や惑星が生命体とはいったいどういう事だろうかと思われるのではないでしょうか。

恒星と言うのはいわゆる太陽ですね。真っ赤に燃えている火の玉のように思われていますが、本当にそうなのでしょうか。確かに、望遠鏡などでみますと、周りが炎に包まれているように見えます。星自体が燃えているように見えますね。

しかし、私達は空気の無いところでは物は燃えない事を知っています。燃焼という現象が起きるのは空気中の酸素があるからですね。すると、太陽の周りに地球の中のような酸素を含んだ大気があるはずもないですから、火の玉のように星自体が燃えているのではない事は確かです。

現在、科学的には、太陽の周りで核分裂や核融合の反応が起きていて、それが炎や光を発していると考えられているようです。ですから、星自体が燃えているのではなく、その星の周りでそうした反応が起きているだけなのです。だから、太陽そのものが火の玉のように高温、高熱の星であるとは限りません。

もちろん、その周りでは核反応が起きていますから高温、高熱を発しているでしょうが、その内部は地球のように普通の温度の星であるかも知れないのです。まあ、言ってみれば

原子力発電所の原子炉のような物かも知れません。太陽の周りが３６０度原子炉になっていると思えば良いと思います。原子炉からは強烈な熱や光が放射されていますが、発電所自体は少しも熱くありません。太陽自体は普通の惑星と何等変わらないかも知れません。つまり、太陽自体は冷たい星で有り得るという事です。

次に地球について考えてみると、地球の内部はどうなっているのだろうと言う関心は古来からあります。そして、現在の科学では中心部はコアと呼ばれる非情に密度の高い部分でできていると考えているようです。そして、この密度の高い部分に引きつけられるために重力があると思っているようです。

でも、残念ながら私はこれは間違っていると思います。地球の中心部の事は良くわかりませんが、重力自体は密度とは無関係です。密度と言うのは単位体積当たりの重量ですね、これの大小を比較するための指標に過ぎません。

たとえば、密度の大きな物、鉄などで作ったボールと密度の小さな材料、たとえばゴムで作ったボールがあるとして、もし同じ大きさで同じ重さのボールを作れたとしたら、そしてそれらを同時に高い所から落としたとしたら、どちらが先に地面に着くでしょう。同じ空気の抵抗で同じ質量であるなら同じはずですね。そこには、密度の違いなど何の関係もないのです。

では、重力の元は何によるのでしょうか。これは私は磁気的な力の作用であると推定しています。つまり、地球には北極から南極に絶えず磁気が走っていますね。だから、磁石がいつも北を指すんですが、この磁気が重力の根拠であると思うのです。つまり、フレミングの法則等によると磁界と垂直の方向に力が発生しますね。この力が重力に当たるわけ

です。

地球の事物は例外無くある種の磁気を帯びているのです。この磁気と地球自体がその周りに張り巡らせている磁気に当たって下向きの重力となって作用しているわけです。

ですから、重力の大きさはその星の発する磁気の強さによって決まるのであって星自体の大きさとは関係がないのです。ですから、ブラックホールの中には巨大な星があるように思うかも知れませんが実は小さな星であるかも知れないわけです。要は取り巻く磁気の強さですね。これが光さえ離さないほど強い重力となっているのです。

少し話がずれてきましたが、要するに重力と言うのは地球の磁場による物であって、それはどのように発されているかと言えば、エネルギーであるという事なのです。つまり、この磁場を発生するためには巨大なエネルギーが必要であるとにう事なのです。

この巨大なエネルギーが磁場という形で現れ、地球に重力を造り、星自体の形状を保っていると共に、周りの大気や海などを一定の姿で保持しているのです。

そのおかげで地球の環境があり、生物が生存できているわけです。元は地球自体の発するエネルギーなのです。これが根源なのですね。

では、このエネルギーとはいったい何かと言えば、私達生物に共存している生命エネルギーと同様のエネルギーに他ならないのです。ただ、そのエネルギー量はもっと巨大ですが、同系統のエネルギーなのです。この巨大な生命エネルギーが星自体を造り、生物の棲める環境を形成しているのです。

要するに、地球自体も生命体であると言う事に他ならないのです。地球は巨大な生命体の体なのです。その体の中で私達は生かされているのです。

この真実を伺い知る事柄は多くあります。たとえば、地殻の変動ですね。大陸は動いています。もちろん、私達には感じる事ができないほどゆっくりとした速度でありますが。このために、かつては海であったところが陸になったり、また逆もあって山の地層から大昔の貝殻の化石が出てきたりしています。また、火山が噴火するのも地下にエネルギーが蓄積され、それが吹き出すからですね。これも単なる土の塊ではない証拠です。

そのほかにも自然の摂理が色々あります。大気の組成であるとか、水の循環であるとか、食物連鎖であるとか、こうした事柄は偶然起きているのではなく、生命の宿れる星にするために地球自体がそうした環境を創出しているわけです。

太陽についてもそうした役割を担うために生命エネルギーが太陽を創っているのです。太陽もまた、生命体なのです。そして、意識的に惑星に熱や光を与え、また太陽系という磁場を形成してその中に惑星を規則正しく維持しているわけです。太陽系の各惑星は太陽によって軌道を維持されているのです。

それはおそらく、太陽の発する太陽系全体に作用している磁場があり、また、各惑星はそれぞれ磁場を持っていますから、これらの磁場が相互に作用して垂直方向に力が働き、これがいわゆる遠心力となり、一体の軌道を周り続ける源となっているのだと思います。

ですから、太陽系の中に地球が存在する事自体が太陽のおかげなのです。太陽の生命体によって存在を許されているのです。

銀河の中にはこうした恒星系が何百万とあります。そして、それらも皆同様の構造となっています。その中の恒星により恒星系が維持され、その中の惑星は環境を創出するために惑星を創っているのです。また、こうした数多くの恒星系を規則正しく維持しているエ

ネルギーもまた存在します。すなわち、銀河系の生命体です。

この星雲の生命体になると、星と言うような三次元的な塊ではないようです。銀河の中心という事になるのでしょうが、まだ私達の認識ではどのような構造になっているのかはっきりとわからないのですが、もうおそらく太陽や惑星のような形はしていないと思います。単なるエネルギーが巨大な磁場を生み出しているような状態となっていると思います。なぜなら、もう私達のような惑星に棲む生命にとっては形は必要でないからです。

もう三次元的な形は無くても良いからですね。各星雲を規則正しく維持し、古い星雲の消滅と新しい星雲の生成を行っていれば良いわけです。生命体の三次元的な体は必要でないわけです。同様に宇宙空間についても同じ事が言えます。宇宙全体を統べるエネルギーがあって、この意識が各星雲を統制しています。また、この意識も特に体は必要としません。そういう空間ですね。宇宙空間という一つの磁場自体が生命体の姿なのです。

こうした意識により私達の宇宙も銀河系も太陽系も地球も必然的に存在させられているのです。惑星の中に様々な生命を育むために。私達は多くの巨大な生命体のおかげでこの三次元世界に生かされているのです。これが隠された真実なのです

しかし、現在の私達地球人はどうでしょう。このような地球の環境に感謝しているでしょうか。当たり前として少しも感謝などした事がないのではないでしょうか。たとえば、空気がある事、水がある事、植物がいて、動物がいて、様々な鉱物があって、色々な食糧や材料が手に入り、人間は色々な創造ができるようになっている事にほんの少しでも感謝の気持ちを持っている人がどれほどいるでしょう。

大抵の人達は、感謝どころか不平や不満ばかり言い、自分の欲のために周りの環境や自

然を汚染したり、破壊したりして平気な顔をしているのです。あまりにも愚かな事です。私達のために素晴らしい環境を創出してくれた地球や、動植物が生存していくために休み無く熱や光を供給してくれている太陽に対して裏切り行為をしているのです。恩を仇で返す行為そのものです。

私達はそろそろこうした真実に目覚め、方向転換をして太陽や地球に感謝すると共に、その恩に報いるためにも地球を平和で調和した進歩、発展のある素晴らしい星に変えなければならないのです。

5節　地球人同士の戦争のばからしさ

現在でも地球上の何処かで戦争が起きています。何故、同じ地球に棲む仲間なのに憎み合い、殺し合わねばならないのでしょうか。

それには、まずお互いの理解が不足しているのが一つの原因でしょう。そして、お互いの利害が対立するのが二つ目の原因でしょう。また、お互いを有限な命しか持たない動物と思っているのが三つ目の原因だと思います。

それぞれの原因について少し解説します。まず、お互いの理解の不足についてですが、これは言語や慣習、宗教などの違いが各民族には当然ありますから理解がしにくいという点があります。民族も違い、言語も違うと、どうしてもすぐには打ち解けられない雰囲気がありますね。それに輪を掛けるように、国同士でお互いに敵対するような関係にあればどうしても警戒が先に立つ物です。

彼らの中の誰か一人がおかしな事や悪い事をすると、その民族全部が差別の目で見られるようになるものです。相互理解が欠けているからですね。ですから、信頼し合うような関係を築けないのです。大昔のように各民族がその地域で勝手に生きていられる時代なら別ですが、現代のように地球の端から端まで数時間で行けるような時代には、世界の人々に何か共通の事柄が必要だと思います。

できるだけ重要な事柄で世界の人々の共通項を作らなければならないと思います。そのことについては、何処の国の人も同じ考えを持ち、同じ目標に向けて行動する事ができる事柄を作るべきです。この共通項がないとどうしても理解し合う事が難しい上にきっかけも少なく、争いの種を作らずに共存していく事は非情に難しいと思います。

次に、お互いの利害が対立するという原因があります。これはたとえば貿易にしてもある物について、一方の国は輸出ですし、他方は輸入です。一方の国にとっては少しでも高く売れれば良いわけですが、他方にとっては安く仕入れたいわけです。お互いの立場が違うために利害が対立するのですね。それに加えて関税などでお互いに国内の産業を保護しようとしていますから余計話は難しくなります。

相手の国は関税ばかり掛けて少しもうちの国の製品を買ってくれない。また、必要以上に輸入しろとうるさく交渉してくるとお互いに言い合っているのが現状ではないでしょうか。また、主義が対立する国で国交の無い国であれば貿易による利害の対立はないでしょうが、漁業区域の対立とか、その他色々な利害が対立する場合もあります。

それと最近も旭光を浴びている問題に核武装の問題があります。相手の国が核兵器を開発しようとしている事実があれば、これは大変な驚異になります。核に限らず通常兵器で

あっても一方の国が軍備を拡張すれば、その国は安心感が増したかも知れませんが、他方の国にとっては戦争への懸念が高まる事に他なりません。元々、国同士の関係というものはこのように利害関係が対立する事柄が多いのです。

最後に、お互いを有限な命しか持たない動物と思っていると言う話ですが、これはどういう事かと言うと、要するに唯物論ですね。これに毒されていて、死ねばすべて終わりだとする考え方ですね。これが国家レベルでも大きな害を与えていると思うのです。

たとえば、戦争などはこれの最たる物です。相手を殺してしまえば、自分の国が勝ち残る。そして、相手は滅びて自分の国は栄える。極端な言い方をすればこういう事ですね。死ねば終わりだから相手を殺せば良い。こんな考えの結果です。

しかし、この考え方が間違いである事は今までに何度も述べてきたところです。私達の命は肉体の事ではなく、その中に共存している生命エネルギーの事なのです。そして、この生命エネルギー自体は永遠不滅のエネルギーなのです。この真実をお互いが認識していたら話は大きく変わるはずです。

現在の人々が戦争をしている原因は何ですか。それは、民族間の憎しみや異なった宗教に対する対抗や政治上の主義の違いによる対立などです。

しかし、こうした事柄の違いで戦争が起きるという事は、お互いの国の人々が民族や宗教や政治などを守る事が相手の国の人々の命よりも大切だと思っているからに過ぎません。ですから、自分達の立場や主張を通すためにそれを阻害するものを排斥しようとしているわけです。あるいは、もっと積極的に相手の国を奪う事によって自分の国を豊かにしようとして戦争を始める場合もあります。この場合は、完全な国家単位のエゴイズム以外の何

者でもありません。

いずれにしても、こうした想いが戦争を起こす原因になっているのです。自分の国中心の考え方ですね。他の国よりもまず、自分の国を豊にしよう、そのためには他の国には少し犠牲になって貰わなければ仕方がない。こんな考え方ですね。

しかし、こんな自己中心的な考え方は少なくとも今の日本では個人では絶対に通りません。自分がお金持ちになりたいから他人に犠牲になって貰って、他人からお金を奪い取ったら間違いなく犯罪者になってしまいます。また、相手が自分とは違う宗教を信じているからと言って傷つけたり、殺したりしたら完全みに有罪です。当然ですね。自分の都合だけで他の人々を傷つけたり、所有物を奪ったりする事は許されない事なのです。

これは、個人の場合には少なくとも先進国では常識です。誰でも当然だと言います。しかし、これが国家の場合になると平気で戦争が起こせるのは何故なのでしょうか。国家というものは良識ある人々の集合体ではないのでしょうか。たとえ、いかなる理由があるにせよ、相手を殺せば普通は殺人者です。しかし、戦争に行って人を殺してきても殺人者とは言われません。むしろ、有能な軍人として評価されるのは何故なのでしょう。

ここのところに大きな矛盾があると思うのです。個人の場合でも、殺人をしても、それが自己防衛の場合だけは殺人罪には問われません。これと同じ様な考え方が働いているのでしょう。自分の命を守るための殺人は自衛の行為であって、故意の殺人とは事情が違う事は良くわかります。戦争の場合も国家のために仕事をするのであって、個人的な罪には問われるべき事項ではない。これもわかります。

しかし、だからといって戦争を肯定する事はできませんし、これを始めた者達の責任は

どうするのでしょう。負けた国の軍部や指導者を処刑してそれで済むのでしょうか。
私は、やはり戦争というものは人間として最低の姿であると思うし、絶対にこの世から排除しなければならないものと思いますから、どんな理由があるにせよ武器を持ったという行為自体は許されない事だと思います。ですから、それが国家のためであろうと、自分の命を守るためであろうと例外は無いと思うのです。その行為自体が間違っているのであって、理由によって善悪が変わる事など有り得ないはずです。
ただ、間違いを犯した事に違いはありませんが、その後の償いの仕方には違いがあっても良いと思うのです。故意の殺人は死刑かも知れませんが、自己防衛のための殺人なら執行猶予で良いでしょう。しかし、無罪ではおかしいと思うのです。殺された相手だって何か役に立っていたはずですし、家族だってあったでしょう。ただ、憎しみか急に逆上して暴行にでたのでしょう。人間誰でも過ちはあります。その過ちのために殺されていたのではかないませんね。
ですから、どんな理由にせよ殺人は有罪という原則を徹底すべきです。これが徹底できていないから、戦争に行って人を殺す事など少しも悪い事とは思われていません。相手の兵士だって人間です。それを殺しておいてどうして何も悪くないのですか。その家族は嘆き、悲しんでいるはずです。もし、殺された方が自分だったらどんな気持ちがしますか。決して許せないでしょう。そんな許されないような行為をして悪くないなどとは考えられません。
ですから、兵士として人を殺した者は全部有罪です。しかし、その償いは情勢によって判断されるべきです。これ以上、戦争を大きくしないためにやむを得ず戦争する場合もあ

りますし、その場合、場合において考えなければなりません。
要は、その人々の認識ですね。相手の国の人間など殺しても戦争なのだから当たり前だと思っているなら間違っています。やむを得ず戦争したけれども、亡くなった方々には非情に申し訳ないと思うし、こんな事は二度とあって欲しくないと思うようでなければならないのです。そして、こうした人々はその罪滅ぼしとして今回の惨めな戦争で亡くなった人達の追悼式やその他の機会に心から冥福を祈ると共に、これからの世代の子供達や青年達に自分が経験した事を語り継ぎ、戦争の愚かさと惨めさを教え、絶対に避けるべき行為である事を啓蒙していかなければなりません。これが償いです。
世界的にこのような心構えが常識になる時代が来れば、戦争というものは人類にはかなり縁の遠いものとなるはずです。すべては人々の認識から始まるのです。
戦争を決して容認してはなりません。しかし、現時点では戦争しなければならない事態もあるでしょう。その時は、償いの気持ちと二度と起きないよう努力する事です。これが人間として本当に当たり前の姿なのです。

6節　本当の新人類とは真理に目覚めた人々

新人類という言葉があります。俗にマスコミなどでは、世代の違いによる義理とか責任とかに無頓着で軽はずみな青年達の事を言っているようです。自分達とはかなり感覚が違う若者を称しているのです。
また、フィクションの世界では特にＳＦの世界では、超能力者の事を新人類と呼んでい

ます。つまり、念力やテレパシーを自由に使え、様々な人間とは異なる能力を持つ者達を新人類とかミュータントとか称しています。

そして、この新人類の出現は各種の予言書などに多くの予言者が予言しています。それもここ数十年の間に出現すると予言されているものが多数あります。

では、これを真実の目で解説してみましょう。

まず、多くの予言者が予告した新人類の出現とはＳＦで言うような超能力者の出現ではもちろんありません。まあ、超能力者自体がいないわけではありませんが、超能力者が急に数多く現れて地球の歴史を変えていくと言う話は現実的ではありません。やはり、超能力者というものは数少ないからこそ価値があるものなのですね。みんな超能力者になってしまったら人々は自らの能力によってまた凄惨な争いを始めるに決まっています。

きっと、誰が一番優れた能力を持つかという事で競いあい、争い始めるでしょう。戦乱の世になると思います。こんな世の中は好ましくないですね。やはり、極一部の人がそうした能力を披露して、現在の科学では解明できていないものがあるのではないか。人知を越えた世界の存在を伺わせる役目を果たすのです。これでこそ、意味があるわけです。

それと、世代の違いによる価値観の違いはいつの時代にも大なり小なりはあります。もちろん、現代のように目まぐるしく情勢が変化する時代は余計目だつでしょうが、これ自体は当たり前の事であり、新人類などと言う表現は誇張です。

では、一体何の事を言うのでしょう。実は、本当の新人類とは私がこうした本で説くところの真理ですね。これに目覚め、いままでの唯物的自己中心的な生き方を改め、真に人々が幸福に暮らせる社会の建設に立ち上がる人々の事を言うのです。

ノストラダムスがその予言書「センチュリーズ」の中で別の者が現れると言っていますが、この別の者、つまり普通の人は唯物論が常識で人間は死ねば終わりだと思っているのですが、別の者はそうではないわけです。死んでも生命自体は永遠不滅であると信じる人々なのですね。これが別の者なのです。霊性に目覚めた人々です。こうした人々が自らの人生にまつわる個人的な欲望や不平や不満、こうした感情から解脱し、現在自分が生かされている事への感謝と同じく同時代に生きている他の人々への愛に目覚めていく時に、世の中は根本的に変わる可能性が出てくるわけです。

この真理に目覚めた人々こそが新人類であり、新しい時代、人々が本当に幸福に暮らして行ける時代、アクエリアスの時代をもたらすことのできる人々なのです。

私のこの「アクエリアス」という本は、これを人々に告げ知らせるためのものなのです。そして、読者の中から多くの人達が現代社会の間違いを認識し、自らは間違いに染まる事無く強く生きていける、真理に目覚めた人となる事を祈りながら書かれていくのです。

新人類とは、超能力もまったく必要としませんし、また普通の人々からあきれられるような感覚の持ち主でもありません。優れた知性や理性などによりこの科学的実験主義の中では非情に非科学的にも見える霊の世界、生命エネルギーの世界を信じ、新しい価値観、一つの生命体として永遠とも言える時間の流れの中での一時の人生という視点で物事を眺められる人達です。

これからの歴史は、この新人類が旧人類、現在の唯物的利己的な人類を目覚めさせていく過程に他ならないのです。これはもう既に始まっています。宗教の中では既にこうした真理が説かれています。そして、ある程度の成功を納めています。何百万という人々がこ

うした宗教書により人間が死ねば終わる幻のような存在ではない事に気づいています。

しかし、残念な事には、宗教は現在の日本では影の分野であるという事実です。宗教は表の存在として多くの人々の行動原理となり、国民がその理念の元に一致団結した時代も過去にはありましたが、第二次大戦の敗北と共に神道を始めとする各種の宗教は政治とは完全に切り放され、公式な行事から追放されました。裏の存在とされてしまったのです。

このため、現在でも宗教ブームは続いてはいますが、そしてこうした宗教的真理を知る人も増えてはいますが、人々の行動原理となる事ができないでいるのです。個人的な精神的幸福感だけで終わっているのです。ここに大きな壁があります。

ですから、この「アクエリアス」では努めて宗教的表現は避け、できるだけ科学的に真理を説明しています。陽の中に持ち込みたいからです。誰でも何の気兼ね無く真理を話し合える、そうした雰囲気をまず作り出したい。そして、こちらの方が常識なんだと言う世論を高めたいのです。

これによって新人類の活動は非情に活発化します。色々な実績が上がってきます。世の中が少しづつ変わってきます。アクエリアスの時代へと動き始めるのです。

私達は皆、太陽や地球の生命体によって生かされているのです。誰でも同じこの地球に生を受けた仲間であるなら、共に仲良く幸せに暮らしていける社会を実現する事は当たり前の行動なのです。神に頂いた命であるなら、神や自然に感謝しつつ、大切に過ごそうと考えるのは自然の成りゆきなのです。

ですから、磁石が北を指すように本来あるべき姿に戻るだけの事なのですね。ただ、現代は唯物論やその他様々な原因から人々が自分を見失っているのです。これに気づかせれ

ば、自然とそちらの方向へ歯車は回転していくのです。歴史の必然です。

ところが、悪い事に現代科学は多くの殺人兵器を生み出しています。また、お金や様々な財産によって自分の利益だけしか見えなくなってしまっている人々がいます。こうした兵器の使用や権力ある利己主義者によって様々な妨害や破壊が行われる可能性が大いにあります。ある程度は阻止する事ができない流れの中にあるといっても過言ではありません。

そして、なお悪い事には地球の環境自体を崩壊させるほどの核兵器を保有している事です。こうした核兵器が実際にまた再び使用される可能性も大きいのです。

そのままいけば時間の流れと共にそうしたユートピア的社会へと移行していくべき運命であるのですが、自分達の個人的な利益のためにこうした流れを葬り去ろうとする人々によって実現しないで終わる可能性も十分あるのです。

これは、今から百年も前に天才科学者ニコラ・テスラによってフリーエネルギーの第一歩とも言える無線電力送信実験が成功していながら、百年経った現在でも電線によって火力や原子力により発電される電力が多くの熱損失を伴って送られている事実からもわかります。彼らの実験成果はことごとく闇に葬られているからです。

なぜなら、そうしたフリーエネルギーが実現してしまうと現在、石油やその他の産業で巨大な利益を得ている人達が困るからですね。収入源を失いたくないからです。

これからの歴史は、この闇の勢力との戦いとも言えるのです。しかし、この戦いはおそらく新人類が勝利すると思われます。

なぜなら、今世界各地で起きてきている天変地異がその証拠です。ここ数十年の間に世界各地で、地震や火山の噴火、集中豪雨、大干ばつなどが起きていますが、これは自然の

バランスが崩れてきている事が主な原因と考えられています。確かにそれもありますが、実は地球の生命体が故意に起こしているものも多いのです。それは、間違った生き方に明け暮れている現在の人々に対する警告なのです。

つまり、地球の生命体の中に何とか人類を目覚めさせたいという想いがあり、それが間接的な形で表現されているのです。すなわち、地球の生命体も新人類の革命が成功して欲しいと明確に望んでいるという事実があるのです。このため、これからの歴史は様々な奇跡に満ちたものとなるだろうと推定されるわけです。

人類だけの力では大変な困難な革命も地球の生命体やその他の神霊の助けを借りれば成就する可能性は高いという事です。そうした奇跡の時代を経てアクエリアスの時代はもたらされると思われます。

次章からはこの奇跡の時代に起きる主な変革をわかる範囲で解説してみたいと思います

第４章　アクエリアスの時代に起きる変革

１節　伝説の文明が蘇る

皆さん、ＳＦ小説や各種の雑誌などで数万年前にムーやアトランティスという過去の文明があったという話を聞いた事がないでしょうか。世界には、これに関連する伝説が古来から伝わっている地方もあるようですが、これは本当の話なのでしょうか。

私達が現在の教育で教えられている限りでは、人間は一億何千万年前の原人からだんだんと進化してできてきたと言われています。これが本当に事実であるとすれば、人類はたかだかここ一万年前後に生まれてきたという事になり、数万年前に過去の文明があったなどという話はあり得ない事になってしまいます。

確かに、人間の化石や各種の遺品などが発見されているのはここ一万年ほどのものばかりであり、またこの頃に原人と呼ばれる化石が見つかっているのも事実です。しかし、前にも述べたように地球自体は生命体であり、その活動は一万年単位で見ると大きく変動しています。

かつて海であったところが陸地になったり、逆に大陸が海洋に変化したりしています。特に、この一万年前あたりには大きな変動があって現在の大陸の地形とは大きく変わっていたのです。ここで言うムーやアトランティスなどの大陸は現在ではことごとく海の下に沈んでいます。

ならば、これらの文明の遺品が発見されないのは当然の事ですね。現在では深い海の底

に沈んでしまっているのです。しかし、逆にその存在した証拠を探す事も非情に困難な仕事になります。深い海底の下の古い地層の中に眠っているわけです。

現在のところ、これを証拠づけるものはありません。このため、この伝説は神話としておとぎ話かＳＦのように語られてきたのです。

しかし、この過去の文明が蘇ってくる予定になっているのです。２１世紀の始めになると、まず、ミュートラム文明という１０万年程前の文明が再び現れてきます。

この文明は現在の南極大陸とほとんど一致する大陸でその当時は温暖な地域に位置し、人々は恵まれた気候を利用し、食文化が非情に発達していたと言われています。現在の稲作のような農業が営まれ、食物と人間の気質の研究が進んでおり、どのような食物をどれぐらい食べると人間の健康や体力、知能の発達にどれだけ影響があるか、というような事が真剣に研究されていたようです。

そして、現在の博士に当たるような人達もいてこうした食生活と人間の気質の関係の研究が脚光を浴びていたのです。ですから、とても平和的な文明でありましたが、反面、食べ物に中心が片寄ってしまい唯物的な面もありました。

この文明の最後は今から１０万年程前の地軸の移動によります。ある日、突然空が真っ赤に染まり、夜の星がすべて流れるのが目撃されました。地球がくるりと回転し、地軸が大きくズレたのです。この影響は気候の変化となって現れてきました。温暖な地域から極点に移動したミュートラム大陸には、みるみるうちに雪が積もり、氷雪の中に埋もれてしまいました。そして、人々は農業中心の文明でしたから食糧を失い、やがて滅びてしまいました。

しかし、この文明の遺物は今も尚、南極の厚い氷に覆われて保存されているのです。天然の冷蔵庫に大切に保存されています。

このミュートラム文明が再び出現してくるようです。それは再び地球の地軸が移動するからです。この世紀末に地球の地軸はまた大きくズレることが予想されています。そして、現在の南極は熱帯地方に移動するようです。南極の厚い氷はしだいに溶けて水となり、海中へと流れ出します。

もちろん、大変な影響があるでしょう。大きな津波も起こるでしょうし、平均海面も何メートルか上昇しますから海抜の低い地方では沈没するところもあるでしょう。大変な混乱を生じるでしょう。多くの犠牲を伴ってこの過去の文明が再び地上にその姿を現してきます。

この時、世界中に大きな可能性が生まれるのです。何の可能性かと言えば、唯物論ですね。これが完全に否定されるきっかけとなる可能性です。現在の知識人の常識である人間が一万年程前の原人から進化してきたとする進化論の間違いを証明する事になります。

そして、こうした真理に含まれる予言の正しさの証明になります。人間は本当に生命エネルギーが実態であり、永遠の生命を持っているという真理の一片が証明されるわけです。非情に意味のある事です。

そして次に、アトランティスの文明の一部が蘇ります。

皆さんはエジプトにピラミッドという何千年も前の建築物があるのをご存知でしょう。あのピラミッドは古代の人々が百年余りもかけて建造したと伝えられています。しかし、そのピラミッドの建築技術はある意味では現代科学の水準を越えているのです。

たとえば、ギゼーのピラミッドなどに使用されているあの石の大きさはどうでしょう。何十トンという重さがあります。もちろん、一個でです。こんな恐ろしく巨大な石をどうやって運んだのでしょうか。また、それをどうやって正確に三角錘に積んだのでしょうか。ころの原理だけでは到底無理であると私は思います。また、それ以前にあのような巨大な石をどこからどうやって切り出したのでしょうか。そして、これらの石は非情に鋭利な切り口で、まるで現代のレーザー光線を利用したかのようです。

あのピラミッドはこうした謎を含んでいるのです。そして、ギゼーのピラミッドの近くにあるスフィンクスも同様に古代人の力だけでは無理な技術が使われています。

これには宇宙人が建造したという説も一部にはあります。宇宙人の非情に進んだ技術を持ってすれば、確かにピラミッドを造るぐらいは簡単な事でしょう。しかし、何故宇宙人がピラミッドを造る必要があるのでしょう。

ピラミッドはやはり古代人によって造られたのです。それは、現代でも伝わっているように人々の信仰の対象としてです。

しかし、違っているのは現代、言われているような王に対する信仰ではありません。王に対する信仰のためなら王様にお金を貢げば済みますし、王様もその方が喜ぶでしょう。これは、実は神に対する信仰のためなのです。神というこの世では目に見えない存在を巨大な存在として人々の目に見せるためのピラミッドであり、スフィンクスなのです。

そして、当時の人々は現在とは違って学問も余り発達していませんし、いわゆる知識人というようなインテリではありませんでした。もっと素朴な人々であり、非情に信仰深い人達だったのです。

事の起こりは今から一万年前のアトランティス文明の滅亡に遡ります。約、一万年程前まで現在の大西洋にあたる所の、現在ではバーミューダ海域と言われているあたりにアトランティス大陸がありました。

この大陸には今から一万五千年前くらいから文明が非情に発展し、その末期には現在の自動車や飛行船、潜水艦に当たる乗り物まであったのです。そして、不思議な事には今私達が電気や石油を動力源としているような文明ではなく、太陽のエネルギーを直接動力として使用しているものが多かったのです。

都市の中心には一辺が三十メートルもの巨大なピラミッドがあってこれにより太陽のエネルギーを増幅して各家庭にある小さなピラミッドへエネルギーを送っていたのです。この光のエネルギーを動力として取り出す技術があったのです。この他にも色々とある意味では現代科学より優れた文明であったのです。特に特筆すべき点は精神科学が非情に発展していた点です。たとえば、植物の成長を促進する光線とか人体の怪我や病気を治療する光線とかが開発されていましたし、精神エネルギーですね、いわゆる超能力ですが、これらも研究対象になっていました。

このように、ある意味では現代よりも進んだ文明もある日突然、海底に沈没してしまったのです。文明が滅びるときはいつの時も同じです。人々が科学万能主義に陥ってしまったりして、唯物的な文明が勝ち誇り神への素朴な信仰が取り戻される可能性が失せたとき、様々な天変地異により、その無神論の文明は瓦礫のように崩れて姿を消していくのです。アトランティスの場合も同じでした。

人々が科学至上主義に陥って、神とか霊とか非科学的なものを排斥する動きがあり、そ

のような事を唱える者は捕らえられ、処刑されていたのです。アガシャーという偉大な王様が「心を取り戻せ、神を信じ、守護霊に祈り、他の人々を愛しなさい」と訴えたのですが、反勢力に生き埋めにされてしまいます。そして、その時にアトランティスは突然大陸が沈没し海底へと沈んでしまったのです。

しかし、一部の者は飛行船により逃れていったのです。その中にはアガシャーの息子のアモンという王子の一派がありました。彼は今のエジプトの地に着陸し、そこで土地の人々に様々な技術を授け、神様的な崇拝を受けます。そして、自らを太陽神の象徴として人々に信仰を教えたのです。

これから、このナイルの地にも文明が開けてくるわけです。この文明は神秘的な色彩が非情に濃い文明でした。常に太陽や神と一体となった文明でしたが、しだいにその太陽信仰も形だけと化して人々の心が神への信仰よりも地上の欲望に傾いてきた頃、一大事件が起こりました。

今から六千年ほど前の事とされていますが、その頃、地上では文明は高度に発展し、人々は地上高千メートル、直径も何キロもある巨大な塔を作り、その上で当時の王が生き神になるという計画を立て、神への素朴な信仰を忘れ、傲慢になっていたのです。このバベルの塔が半分ほど出来たときだったでしょうか、すさまじい勢いで大雨が降り続き、やがて山をも越えるほどの洪水が押し寄せ、すべてのものが流されてしまったのです。

こうした事もあって、この過去の文明の遺産は確かに素晴らしい効果を発揮するけれど、反面人々が科学万能主義に陥る危険をはらんでいるため、人々が十分に理性的になり科学の発展と神への信仰を両立する事が出来るようになるまで隠ぺいされることになったので

す。

そして、その守り神としてスフィンクスが建造されたのです。ですから、当時のアトランティスから受け継いだ技術はあの巨大な石をレーザー光線のように切りとり、自由自在に運搬し、積み上げる事が出来る技術があったのです。こうした技術は地下深くに隠されてしまったのです。

このアトランティスの文明の遺産が再び発掘されるでしょう。地上にこうした真理が広がり、人々が平和に協調して暮らしていける下地ができたとき、ある指導者によってその場所が確定され、発掘されるでしょう。そして、人々はアトランティスの遺産を目にして人類が何度も何度もこの地上に生まれてはユートピアを目指して様々な文明を築いてきたという事実を確認する事になるのです。

このような奇跡のような事件が予定されているのです。まるでＳＦのような話で、信じ難いと思います。しかし、これは信じるか、信じないかという問題ではないのです。こうした奇跡のような事柄が間違いなく起こると言っているのです。予言ですね。ですから、この予言が正しいか誤りかは事実が証明するわけです。予言どうりにならなければ嘘だという事ですし、予言のとうりに起きれば予言は正しかったという事になります。

そして、こうした正しさを証明していく事が真理の正当生を検証していく事になると思うのです。唯物論や無神論が間違っているという証明へと通じていくのです。

２節　世界戦争が集結する

戦争、いつも人類はこの言葉と共に生きてきました。第二次世界大戦からはもう五十年以上もの年月が流れましたが、冷戦の集結と共に世界の各地で局地的な戦乱が相次いでいます。そして、多くの犠牲者と、貧しい難民と飢餓や伝染病に苦しむ子供達、本当に人類はこの忌まわしい戦争から開放される事はないのでしょうか。

しかし、やがてこの戦争というものからも開放される時が来るのです。完全に戦争自体をしなくなるのは、数百年先の事になるようですが、世界戦争という規模での戦争はこれが最後となるようです。

これが最後という戦争は、後の世に最終戦争とでも呼ばれるようになるでしょうが、この最終戦争が２１世紀の始めに起こります。おそらく、２０２０年頃になると推定されますが、これまでには第三次、あるいは第四次の世界大戦が勃発しているかも知れません。

これらの世界大戦は、おそらく旧ソ連と、ヨーロッパ、中国との争いと中東とヨーロッパ、アメリカとの争いが中心となるでしょう。そして、この時に朝鮮、中国と日本との戦いもあると思われます。

それらの戦争ではあらゆる兵器や爆弾が使用されるでしょう。核兵器も再び使用される可能性があります。それは、主に旧ソ連とヨーロッパ、中国を破壊する事になると思います。大変、悲惨な戦争になるでしょうが、この戦争の結果、世界の勢力地図は大きく塗り変わるのです。

現在（１９９４年）はまだまだ、アメリカが主導権を握っています。旧ソ連は分裂し、そのかつての国威はロシアがわずかに引き継いでいるだけです。ドイツは東西を統一し、新しい国として大きく羽ばたこうとしていますが、東の経済不況が重くのしかかっていま

す。他のヨーロッパ諸国は衰退の途時にあるように見えます。もうかつてのような華やかな国も、先進的な国もありません。ＥＵにより強いヨーロッパの経済連合を作ろうとしていますが、難問も多くその成否は微妙です。

中東では相変わらずイラクはまだ健在です。湾岸戦争では少しも良いところがありませんでしたが、フセインはしぶとく逆転の機会を伺っているように見えます。そして、イスラエルとアラブ諸国との仲も世界のデタントの機運を受けていくぶん柔らかくなったような気持ちがします。

アジアにも戦乱の火種は尽きません。南北朝鮮の会談を直前にした北朝鮮の金主席の死と北朝鮮の核疑惑から朝鮮問題は油断できません。

そのほかにも、ハイチやキューバやアルゼンチンなどの中南米の諸国の紛争など数え上げれば切りがないほどに世界のいたるところで争いの元がくすぶっています。

まさに、一触即発の状態に近づきつつあると言っていいでしょう。こうした険悪な世界の情勢と不透明な景気の先行きからいつも世界の何処かで戦乱があり、多くの被害が出ています。為替や市況も目まぐるしい動きを示し始めています。

こうした現在の状況ですが、これから先、どのように推移するのでしょうか。

整理して考えてみると、現在は世界中に戦乱の火種がくすぶっているという事実が一つある事ははっきりしています。そして、二番目には、世界の情勢の流れとしてはデタントの方へ、つまり、平和を促すような方向へと進みつつあるような情勢があります。湾岸戦争の時もそうでしたし、この度のハイチ侵攻も結局、他国籍軍の無血上陸となりました。旧ソ連が解体して、東西ドイツが統合して、それまでの世界の東西の冷戦状態は崩れ、平

和に統合しようとする流れが確かにあります。

そして、現在（１９９４年夏）までのところ、この流れはある程度の成果を残しています。アメリカ主導の元、大きな戦乱を回避して難民を救済する方向へ各国がある程度の援助や貢献をして、それなりの成功を納めています。日本の人々の多くは、世界の情勢の流れはこれからデタントの方へ流れていくものと思っているようです。

確かに、この可能性は十分にありますし、現在までの情勢を見ていればその根拠はあります。しかし、この先、中東や朝鮮や旧ソ連や中南米、アフリカなど世界の各地で立て続けに戦乱が勃発してきたらどうでしょうか。現在のようなアメリカ主導の他国籍軍の軍事介入だけでは防ぎきれるものではありません。

それと、大きなネックが生じる可能性が大にあります。それは、ヨーロッパです。ヨーロッパでは１９９５年頃を目安に経済を統合してしまおうとするＥＵの大きな変革の動きがあります。（１９９７年まで延期された）これが実現すれば、世界一の経済共同体が出来上がる事になります。日本などの経済に対抗するためにヨーロッパが連合を組んで経済共同体を作ろうとしているのですが、イギリスのサッチャーが反対したようにこの計画は賛否両論渦巻く中での大きな賭です。

統合に成功して、自国が豊かになり、国民が幸福になれるのか、あるいは現在以上に、貧富の差が激しくなるのか、豊かな国と貧しい国とがはっきりと区別されるのかはやってみなければ結論がでません。そして、いずれの国も我が国の経済が発展する事を祈念しての参加であり、できればこの連合の中でリーダー的な地位を掌握したいと願っているのです。

ところが、この利権のための統合計画は利権のため故に廃棄される可能性も多いにあるのです。考えても見て下さい。同じ国の中でも、東京や大阪などの商業や工業の中心となっている都市と逆に、山間部の不便な田舎では過疎が深刻化しています。こうした都市間の格差はやはり基本的な条件の違いによるもので何とかしたい問題ですが、ある程度やむを得ない問題でもあります。

これが、連合経済になったらどうでしょう。現在の西ドイツのように経済的な中心都市に経済の主要な機能が集中していくのは必然です。そして、中心都市となり得ないところはどんどん過疎が進んで来ます。イギリスのような大陸から離れた国は輸送にしても通勤にしても不便ですから、普通はＥＵの中心地にはなり得ないのです。このために、サッチャーは反対したのです。イギリスはかえって没落する可能性が高いのです。結局、ドイツ一国にかなりの部分が集中する結果になるだろうと思います。

もう既に共通の通貨まで造っていますが、この経済連合が成立するかどうかは余談を許しません。

各国の意見がまとまらず、経済連合が夢に破れたとき、そこには利権争いの醜い争いが表面化する事になるでしょう。そして、現在以上に発展する見込みは無くなるわけです。夢敗れて争いが表面化するのです。悪くすれば戦争になるかも知れません。大げさに考え過ぎかも知れませんが、ヨーロッパ諸国は昔から争いあってきた間柄であったはずです。冷戦の間は直接、武器を使った戦争こそありませんでしたが、これらの国の間の関係はかつての戦争時代と少しも変わっていません。

このようなヨーロッパの不和は多国籍軍にとっては大きな痛手になります。日本は現在

のような優柔不断な政治家が政権を担当していますから、何事も先陣を切ってするはずもなく、実質的にアメリカ一国に頼るような状況となるでしょう。しかし、このアメリカにもしも、経済破綻、恐慌のようなものが起きたらどうでしょう。もう、外国の事に首を突っ込んでいる余裕がなくなります。

世界は無法地帯と化すのです。あちこちで、これに乗じて侵略や侵攻が成されるでしょう。というのも、このころに多くの天変地異がみまうようになるからです。度重なる天変地異により国土は荒れ、食糧は不足し、飢餓に苦しむ難民が溢れます。そして、伝染病が流行し、多くの犠牲者を出すようになったら、こうした国々は食糧を求めて、富を求めて、隣国に侵略していくしか道が残されていないのです。

世界的な友食いの時代が来ます。恐ろしい事です。弱肉強食の時代です。戦乱が絶えない時代が訪れる事になるでしょう。

このような、世界の情勢とはうってかわって２１世紀には人類が戦争から開放される可能性も残されています。それは、日本です。この日本の力によって、唯一の可能性が残されているのです。この現在のような日本では当然、無理です。この日本に今広がりつつあるこの真理と、これを悟った新人類の手によって日本が本当に真理国家として生まれ変わったならば、そこに強大な国力と莫大な財力と優秀な技術に裏付けられて日本が世界をその傘下に置き、その指導により世界の国々が真理国家となる道が残されているのです。

ただ、これには奇跡のような意識改革が必要です。現在のように、自分の給料や地位の事ばかり考えている国民達ではどうにもなりません。国民がすべて他の国の人々の幸せを心から願えるようになって始めて可能な事です。

これから日本に驚異的な発明や発見、経済発展などが起きてくるでしょう。そして、それらはことごとく真理の価値を誇示するものとなるでしょう。真理に則って生きる事がどれほど素晴らしい事であり、必要な事であるかを実証する世紀がくるのです。

こうした価値を十分に知った人々が地球上を埋め尽くすようになれば、戦争などという愚かな行為は消えていって当然なのです。驚くような事でも何でもない、当たり前の事なんです。こうした可能性にトライアルする時代であり、またそれがかなりの確率で実現していくであろうと思います。

この最後の戦いは最終戦争と呼ばれるでしょうが、これは単なる戦争であってはならない事も付け加えて置きたいと思います。戦争という殺人行為によって恒久的な平和は決してもたらされる事はないのです。戦争を止めさせるには戦争以外のもので、戦争がいかにバカげた愚かな行為であるかを思い知らせる以外に無いのです。それには、戦争によって相手を倒していたのでは、倒された相手はまた、いつの日かやり返してやろうと思うに決まっているのです。

戦争以外の力で戦争を止めさせなければならないという事です。この力は愛以外にはないのです。愛の力で相手をも包み込む事によって憎しみは消え、親愛と友情が育まれるのです。愛の力で相手と戦う、まさに聖戦です。これを現実に成し遂げるにははるかに進んだ技術と、人々の勇気と生死を越えた愛が必要です。このような奇跡のシナリオが用意されている大いに意味のある激動の時代である事を知っておいて下さい。

３節　宇宙人との交易が開始される

宇宙人との交易が開始されるというタイトルは極めて不思議な事に感じられる人も多いでしょう。

というのは、現在では地球以外に生物がいるという事を公式に認めている政府は無いし、政治家や科学者も少ないからです。国民達はある種の雑誌やテレビなどの特集でＵＦＯの記事を読んだり、見たりして「ＵＦＯというものは本当に実在するのだろうか」と疑問に思っている程度であると思います。

しかし、大多数の人々がどういう認識をしているかには関わらず、ＵＦＯが存在するか、しないかはイエスかノーかのどちらかしかありません。第３章でも宇宙人の存在について述べましたが、地球人以外にも宇宙には人間が生存しています。

それは、地球以外の惑星を探検した事の無い我々、地球人には信じられない話に思われますが、地球人も宇宙からみたら太陽系に棲む一種の宇宙人に過ぎないのです。他の所には他の宇宙人が棲んでおり、それぞれ特有の生活を送っているのです。

それは、日本海に棲む魚が他の海にも違った魚がいるのだろうかと考えているのと同じです。太平洋には彼らとは違った種類の魚もいますし、南極には鯨のような巨大な生物もいます。しかし、そうした他の存在が明白になったとしても、その事実が必ずしも彼らの生活を脅かす事にはなりません。

南極の鯨やあるいは、鮫の存在がわかったからといって日本海に棲む魚達がこうした巨大な魚達に食べられるのではないかと急に恐怖におののく必要はないわけです。同様に、私達地球人が他の惑星に棲む宇宙人の存在を認めたからといって、彼らが地球を征服に来

ると叫んでパニックに陥る必要は少しもありません。なぜなら、そういうつもりがあればとっくに征服されていたであろうからです。現在の地球の科学水準とＵＦＯに乗ってやってくる宇宙人達との科学レベルの差は数百年は完全にあります。

侵略の意志があれば、すぐに征服されるのは目に見えています。でも、それが侵略されていないし、彼らの存在自体も公になっていないという事は、彼らがそうした事を望んでいないという事に他ならないのです。地球の内政に余り関与しないようにしているという事です。

彼らからみれば、我々地球人はまだまだ未開の人々なのです。幼いのです。文明が。それは、単に科学の発達具合だけを指しません。認識ですね。宇宙や、生命や、自然や、神といった事柄に対する認識が非情に低レベルな状態であり、そして他に自分達以上に優れた宇宙人がいる事実に気づこうとしない、そういう気質に問題があるのです。

このような状態ですから、彼らは自分達とうまく交流していける精神状態になるまでそっと見守っているわけです。ですから、私達が宇宙には多くの宇宙人がいて自分達以上に優れた人々や、逆にある意味では劣った人々など無数の仲間がおり、自分達は共に神により作られた仲間として、それぞれの文明を尊重して侵す事無く調和していけるような地球人になる事ができれば、いつでも彼らの仲間入りができるわけです。現在の私達はずっとこんな状態にあったのです。ここ一万年のあいだずっとです。

この状態がまもなく終わるという事ですね。アクエリアスの時代になれば、新人類が文明そのものを変革して人々は真理に基づき生活をするようになりますから、結果的に自己中心的な現在の状態から脱し、彼ら宇宙人とも交流可能な認識へと進化を遂げるわけです。

そして、彼らの方から交易を申し込んでくるでしょう。

そして、現在の地球には無いような新しい科学技術や資源や不思議な機器などを目の当たりにして地球の人々は、また大きな変革を遂げていくのです。新しい大きな視野で、科学や政治や文化や教育をもう一度真剣に変えていくはずです。文明が成長していくわけですね。こうした事が予想されるのです。

科学技術は急速に進歩するでしょう。現在のレベルでは、月に有人宇宙船を飛ばすのがやっとですが、アクエリアスの頃には反重力で推進する乗り物も完成し、やがて社会の交通の主流になるでしょう。また、宇宙に飛び立つ宇宙船はやがて異次元空間を利用してはるかな距離をわずかな時間で旅行する事ができるようになるはずです。他の星雲、マゼランとかアンドロメダという星雲にも一週間程度の旅行気分で行けるような時代もやがてくるでしょう。

しかし、こうなると人々の関心は現在とは対称的に外へ、外へと向いてくるようになります。宇宙の色々なところへ赴くようになり、その星独自の文明を観察する事に生きがいを見いだす人々も出てくるでしょう。現在、私達を多くの宇宙人が観察にきているように、今度は逆に私達が他の惑星の人々をＵＦＯに乗ってそっと見に行く時代がくるわけです。

こうなってくると、地球の中で地球人同士で戦争をするというような行為はバカげた事に見えてきます。ですから、現在のように世界のあちこちで絶えず起きている戦争はやがて無くなるでしょう。でも、今度は宇宙での争い、戦争というものの可能性が出てくるわけです。

地球人同士であれば言語も同じであるし、習慣も良く理解できるので、理解し合える可

能性は高いのですが、異星人の中にはまったく容貌を異にする者も多く、ましてや言語や慣習などといった事は違っていて当たり前です。お互いに理解し合えない事から様々な軋轢や諍いが生じてきます。

私達が過去培ってきた価値観とはまったく違った考え方や行動の仕方が出てきます。大いに困惑するでしょう。アクエリアスを成し遂げた後、人々はまた次の課題を背負うわけです。そして、宇宙的な調和というものを考えるようになっていくのです。物事の考え方が違い、行動の仕方や、食事の仕方などが違うからといって相手を異質な者と見る見方はまだまだ幼い見方であり、大いなる神の目からみれば子供達がにらみ合っているような事にしか見えないわけですね。

表面的な相違を越えた抱擁力と愛情を必要とされるわけです。そして、この時代にはこの事を教える救世主が送られてきます。そして、彼が宇宙的な愛と調和を説くでしょう。そして、人々は大いに感動して、やがて社会全体に広がっていき、社会を変革していく事でしょう。ちょうどこれから、こうした真理が現代の唯物論の社会を変えていくように。

また、話は少し戻りますが、アクエリアスの時代を経て人々の生活も大きな変化を見せるようになるでしょう。現在のように、多くの人々が地上にひしめき合っている状態を脱し、計画的な棲み分けがされるでしょう。

たとえば、工場地帯と住居用の都市とその周辺に広々とした農園や森林などといった環境や機能上、合理的な生活圏が作り出されてきます。そして、陸だけではなく、海底にドームを作って棲み、海底牧場を経営したりする人々も出てきますし、あるいは空中にしゃぼん玉のような住居を作って棲む人々も出てきます。

また、他の惑星への移住ですね。たとえば、月や火星や金星などに人工のドーム状の都市を作りそこで新しい生活を始める人々も出てくるでしょう。そして、そこで採掘される有用な資源を地球に送って生活する人々も出てくるでしょう。

現在とは大変な違いを見せるようになるわけですが、こうした未来が開かれる前提として宇宙人との交易が開始されるという事柄があるわけです。この画期的な事件から急速に地球の科学や文化や人々の生活は変わっていくのです。

そして、この画期的な宇宙人との交易の開始はおそらく、この日本を中心とした勢力から始められると思います。日本を中心として現れてくる強力な政治的指導者により、開始されるでしょう。彼には多少なりとも霊能力があり、宇宙人との対話もそれほど困難を伴わずに実現すると思われます。また、彼ら宇宙人にも色々な種類の者がいて、現在地球にきている宇宙人は二十種類にも及ぶようですが、友達は選ばねばなりません。

なぜなら、宇宙人の中にはひどく自己中心的な者もいて、私達をうまく利用しようと企んでいる者も現実にいるのです。こうした宇宙人が動物の内臓を取り出したり、人間を誘拐して人体実験をしたりしているのです。

ですから、友好的な宇宙人、私達がつきあう事によって私達自身が成長していくような素晴らしい相手と交易を交わしていかなければならないのです。それには、愛ですね。自分達だけではなく、私達のような科学文明の遅れた人類にも分け隔てなく愛を与える事の出きるような精神的にも進化した宇宙の先輩とつきあうべきです。

そして、そうした素晴らしい宇宙の仲間は現実に存在するし、またアクエリアスの変革が成功すれば、おそらく彼らの方から交流を求めてきてくれるでしょう。なぜなら、彼ら

はもう一万年以上も私達を暖かい目で見守っていてくれているからです。その日が到来するのを心待ちにしながら。

4節　神への信仰の時代がくる

こうした変革を経てもたらされるものの第一は、真理の正当性及びその有用性です。現在のような、唯物論や無神論に人々がどっぷりと浸かっている状態では真理などさほど気にもされていませんし、また、必要なものでもありません。人々は、自分の待遇や地位を最重要視し、楽をする事、欲望を果たす事に異様なまでに執着しています。真理など関係がないのです。

しかし、こんな状態でいつまでもいられるわけがないのです。自分だけのエゴを通して周りの人々や環境などへの配慮をしなければ、社会は険悪になります。人々は利害の対立する事で争い続けますし、周りの者は皆無関心な人ばかりです。困った時に助けてくれる人などまずいません。醜い争いがどんどんエスカレートしていきます。社会には非行や暴力、詐欺、窃盗などが氾濫していきます。非情に棲みにくい社会ができてくるのです。

しかし、真理が人々の心に定着していったときはこれとは逆に人々が共に助け合い、愛し合う棲み易い社会ができてきます。それは、結局その中に棲む人々の心の持ち方の問題なのです。他人に冷たく、敵対する人ばかりになれば、その社会は闘争と破壊の社会になります。また、自分の欲に目が眩んで他人の事など気にしない人ばかりになれば、その社会は詐欺と犯罪の蔓延する社会になるのです。ところが、他の人の事を我が事のように気

にかけ、世話をする人々ばかりになれば、その社会は毎日楽しく生活できる社会となります。また、自分も少しでも社会のためになる仕事をしなければいけないと一生懸命働く人ばかりになれば、その社会は調和と発展のある社会となるのです。

ならば、後者の方を選んだ方が自分に取っても、社会に取っても有利な事は明白です。人々が愛し合い、助け合い、共に社会の進歩と調和のために生きているような社会は、理想社会、ユートピアと呼べるような素晴らしい社会となることができるのです。

それには、現在のようなまったく逆の人々を悔悟させ、社会のために無私に働く事ができるような人間に変える必要があります。それこそが、真理であるのです。そして、この真理には神という信仰の対象がどうしても必要となります。なぜなら、人間は他人のためだけに真剣に生きる事は非情に難しいからです。どうしても、他人よりも自分がかわいくなるのが人間なのです。いや、人間だけではなく、この世に棲む動物のほとんどがそうです。

しかし、自分という存在を越えた、神という崇高な存在を目の当たりにしたとき、人は謙虚にならざるを得ないのです。そして、自分の我を抑え、社会のために奉仕する事も可能となります。信仰にはこうした力があります。

第二次大戦当時、日本の軍隊には天皇を神とする信仰が徹底していました。当時の昭和天皇も後に「自分を生き神のように奉るのは迷惑だ。」と言っていたようですが、まさに天皇という指導者を神のように仕立てる事により国民に信仰を押しつけ、命令に服従させていたのです。そして、神風特攻隊という捨て身の攻撃部隊を生み出したのです。これは信仰の力です。信仰がなければ、現在のアメリカ軍や日本の自衛隊のように自分の命を犠

牲にしてまでも国のために戦う部隊などできるはずもありません。

このように信仰には個人の都合を越えて人々を動かせる力がありますが、これには両刃の剣の部分があって、良い方向へその力が使われたならば、大変有効な手段となりますが、もし、間違った方向へ誘導されたならば第二次大戦のような悲惨な結果になります。ゆえに、信仰と正義ですね、正しい方向へ向かう時に始めて信仰は比類無い武器となり得るのです。このため、真理には神への信仰と正しさの基準というものの両方が必要となります。いったい何が正しい事で何が間違っているのか、また神というものがどれほど偉大な存在であり、我々人間がいかに神により恩恵を受けながら生かされているのかを教えるものでなければならないのです。

こうした真理により、人々は素晴らしい心を持ち続ける事ができ、そしてその結果ユートピア社会が実現するわけです。至福の時代、アクエリアスの時代が訪れるのです。

ゆえに、アクエリアスの時代には神への信仰が非情に重要視されますし、また絶対に必要な事として掲げられます。

この時代の人々は誰しも、現在のように神を架空の存在とは思っていません。また、キリスト教のように聖書やミサを行う事をもって信仰の証明とは考えておりません。あるいは、仏教のように念仏を挙げたり、供養をする事を信仰の証明とも考えておりません。

もっと科学的な信仰を持っているのです。現在では、科学と神への信仰とはまるで相反するもののように思われています。科学者や学者の中には、宗教を未開人の習慣のように考えている人達が多いのです。彼らは、科学とは古い慣習や宗教などから人々を自由にするものだと思っているのです。今まで、人々は確かに慣習や道徳、宗教などにより行動や

権利を制限されてきた部分があるのは事実です。それを束縛だと言うなら、確かに自由を阻害されてきたのかもしれません。しかし、そのおかげで秩序があり、社会としてのまとまりが維持されていたのも事実なのです。

前に責任の無い自由は間違いであると言いましたが、科学自体には古い習慣やしきたり、掟といったものを茶番化する意図はありません。あくまでも未知なるものを探究し、世の中を便利に豊かにするのを目的としているのですが、その主流の手段が実験であり、その効果が機械であるとか乗り物やその他の有用な物であるために、実験もできないし、目に見える結果も出す事ができない宗教他の分野を結果的に傍流とする働きを演じたのです。

しかし、アクエリアスの時代の人々は科学と宗教を融合させています。科学的に神の存在を説明できる人々なのです。

神とは、この三次元や四次元以降の広大な世界を創造したエネルギーです。この世界にある物はすべてその内部にエネルギーを内包しています。たとえば、水の三態にしても、氷、水、水蒸気と三種類の形態を取り得るわけですが、これらはすべてその内部エネルギーの変化によるわけです。温度を下げていけば、水の内部エネルギーが失われて氷の状態になります。また、逆に水を熱していけば内部エネルギーが増大して水蒸気となります。このように物質はすべて内部エネルギーによってその形態を保持しているのです。

同様に、生物は肉体の内部エネルギーとそれ以外にその生体を動かす意識としての生命エネルギーが内包されています。ですから、この生命エネルギーを持つ物を生物と呼ぶわけです。生物には最も高度なエネルギーである生命エネルギーが内蔵されているのです。ですから、現在の唯物論では脳によって人間はコントロールされていると思われているよ

うですが、そうではなく、脳にそうした指令を出している主体的な意識、生命エネルギーが存在しているのです。そして、この生命エネルギーはそれ自体で思考したり、感じたり、様々な事のできるエネルギーです。

光エネルギーは周りを明るく照らす事ができます。また、熱エネルギーは周りに熱を放射し、暖める事のできるエネルギーです。そして、生命エネルギーは感覚を持ち、思考する事ができ、自分自身で自己を表現できるエネルギーです。そして、この生命エネルギーがこの世の肉体と結びついて人間やその他の生物となって様々な活動をしているのです。

このように考えていくと、この三次元の世界は内部エネルギーによって存在している各種の物質と様々な生命エネルギーが結びついて存在していると言うことができると思います。ですから、実はすべてがエネルギーによって存在しているといっても過言ではないのです。エネルギーというのは前にもいったようにエネルギーの次元、四次元以降の世界の存在です。四次元以降のエネルギーによって存在できているというのが本当の所なのです。

三次元という物質世界で人間として生きていると、どうしてもエネルギーの存在に気がつきません。そして、お金やマイホームやその他のこの世において価値あるとされている物を一生懸命手に入れようとしているのがほとんどの人々ですが、本当は本質的なものはすべて異次元のエネルギーの世界にあるのです。この世界が本来の世界なのです。この世というのは人間として生まれ、育ち、老いて死ぬまでの数十年の間の特殊な体験なのですね。

さて、こうした私達生命エネルギーはいったいどのようにして生じてきたのでしょうか。それは神から分かれてきたのです。神とは元なる巨大なエネルギーです。このエネルギー

がある時、こうした世界の創造を意図し、自らのエネルギーを分けて色々な生命エネルギーを創造し、またその体として肉体始め様々な物質を創造し、この世界やあの世ともいうところの異次元の世界ができてきたわけです。

ですから、アクエリアスの時代にはこうしたエネルギーの正体が徹底的に科学されますから、その頃の人々は万物が存在するにはそうした存在のためのエネルギーが必要であることを明確に知っています。そして、目に見えぬ異次元の世界が現実にこの空間に同居していることも十分に理解しているでしょう。また、神自身の正体を知るところまではとてもいかないでしょうが、そうした全ての存在の根源のエネルギーが必要であり、またその根源なる意識が存在している事を確信していると思います。

そして、この意識を神と呼んでいるかどうかはわかりませんが、この宇宙の根本意識によって私達が永遠の命を持ち、この世とあの世を循環して、生かされている事実をはっきりと認識しているはずです。

ですから、この時代は間違いなく神への信仰に根付いた時代になります。神があって全ての存在があるのです。人間が生きていく上で神に感謝し、信仰により人々が調和して争い合う事無く生活しているはずです。そして、これがユートピア社会の原型となるのです。

5節　地上は幸福な人々で満たされる

古事記という書物があります。７１１年頃、天武天皇の命により稗田阿礼や太安麻呂らが編纂したもので、現存する日本最古の歴史書です。

この中に登場する人物で謎の人物がいます。それは、神武天皇という方です。古事記によると第１代の天皇という事になっており、東征により諸藩を平定したと伝えられています。そして、この天皇の元、人々は大変幸福に暮らしたと伝えられています。

しかし、初代の天皇の頃はまだ大和朝廷という国はできておらず九州の有力な豪族が高千穂の国という勢力を築いていたに過ぎませんでした。この高千穂の国には確かに根本神と言われる天之御中主之神や有名な天照大神という女帝が出て大いに発展していたのは事実です。この高千穂の国も衰え、やがて大和の国という勢力が九州地方を制圧するようになります。そして、この大和の国が東征して今の奈良県の辺りに大和朝廷を築くのですが、この時に獅子奮迅の活躍をしたのが日本武命らです。

古事記により、現在伝えられている神武天皇の話はこの日本武命と八岐大蛇という怪物を退治した須佐之男命という人の話が合成されてできた架空の人物のようです。しかし、ここでは神武天皇という名前が出ており、その方が人々を幸福にしたという記述がある事を覚えておいて頂きたいと思います。

と言うのは、このアクエリアスの時代にも人々は幸福に満たされるからです。それは、現在の私達が思っているような幸福とは少し違います。

私達は、大金持ちになり、贅沢な暮らしをして他の人達が羨ましがるような地位に着く事が幸福と思っています。しかし、こんな生活が幸福であったとしたら、人々を幸福で満たそうとすれば、辺り一面を埋め尽くすほどの大量の財宝が必要です。国家の財政は破綻してしまいます。また、みんなが重役や大臣などの地位に着くようになれば、こうした地位は逆に価値がなくなってしまいます。このような地位は希少であるからこそ価値がある

わけですから、人々の多数がこの地位を占めるようになれば普通の地位になってしまうのです。

アクエリアスの時代の幸福とは、精神的な幸福です。もともと、幸福とは精神的な充足感ですから何も不思議な事ではありません。精神的な幸福ですから、お金や地位などがなくても可能です。しかし、何もなくても幸福感を持つ事ができなくてはなりません。これが課題となるのです。物は何もなくても幸福感を感じる事ができるものを社会全体に広げなければならないのです。

これが何かと言うと、これは真理以外にないのです。すなわち、人々が真理を知り、それを行じる時に自分の精神的な成長に対して感じる幸福感です。ここでいう真理というのは、科学の実験によって確かめられる法則でもなく、数学で証明される解答でもありません。人間が何処から生じ、何のために生きているのかを教え、日々幸福な生活へと導く教えの事です。

真理の中には無限の成長の道が示されています。永遠の生命というのもその一つでしょう。自分の命が有限のものでない事を知る事により、精神的に余裕が生まれ他の人々への思いやりがでてきます。寛容の気持ちが生じてきます。そして、落ち着きとやさしさで人に接しているとその人達からの賞賛と協力、思いやりが集まります。こうした事が次第、次第に自信となってゆとりが生まれてきます。波立たない、ゆったりとした心を持てるようになります。

この落ちついた静かな湖面のような心が幸福の第一歩なのです。幸福とは、欲望や怒りや悲しみなどの時のような揺れに揺れる心の中にはずっと一緒にいられないんです。静か

な安定した心の中に定着するものなのです。これが幸福への第一の状態でしょう。誰にも乱されない自分の心を維持する事ができるようになるということは、心の自由を得るという事であり、心の王国を守るという事でもあります。

次に、人間が神によって創られた存在であり、その実態は物質ではなく生命のエネルギーであるという事を知る事により、他の生命との協調、調和というものが生まれてきます。自分一人が特別に生きているわけではなく、人類全てが共に同じ神から分岐してきたエネルギーだという事は、人類が皆兄弟という事であり、傷つけあい、争いあう事が不思議な事になってきます。仲良く、助け合って生きていく事が当たり前の事になってきます。

それためにに、愛というものがあるのです。愛し合い、信じあうところに人々の調和が生まれてきます。暖かい社会が生まれ、幸せな生活が訪れます。人々がお互いに害しあう事無く、愛し合い、助け合う社会ができてくるのです。ユートピアの第一歩です。

また、自分が神や地球の生命体や太陽の生命体や自然などにより生かされている事に気づく事から神への感謝が生まれてきます。感謝の気持ちは人々を傲慢から開放し、謙虚にします。人々はおごる事無く純粋に生きていくでしょう。世の中には詐欺や偽りが影を潜めるようになるでしょう。厳しく、辛い、足の引っ張りあいの社会ではなく、信仰の元に人々が善人になりきる社会ができてくるのです。

そして、こうした素晴らしく調和の取れた社会に住む人々が、社会のために、人々の幸福のために無私に働こうとしたとき、そこには更なる発展の道が開けてきます。すなわち、自分の人生を自分の欲望をはらすために生きるのではなく、社会や他の人々の幸福のために自分ができる力を最大限に発揮しようと努める人々が多数でてくると、この人達の努力

や創意、工夫によりどんどんと新しい企画や制度、製品、サービスが現れてきて世の中はすっかり変わりだします。めきめきと進歩してきます。

誰も彼もが、神の栄光の力の一部を受け継いだ人間として自分の持てる力を最高度に発揮しようとしたときに、社会には情熱と進歩が約束されるのです。こうした時代がアクエリアスの時代です。

この時代を現実のものとするために、また一人の救世主が現れてきます。

それも、この日本の地にです。西暦で言うとおそらく２０２０年頃です。そして、この頃の天皇制度は現在のような象徴としての陽炎のような存在ではなく、その徳の力により政治、経済、教育、軍事をも指導するような強力な指導者として君臨しているでしょう。ただし、実質的な権力は何もありません。かつての第二次大戦当時のような独裁者としての天皇制度ではありません。

政治も経済も教育も、全ては国民の意志により運営されていくべきです。しかし、これらの運営に当たっては将来的な展望や、その他様々な問題、課題への対応など、その運営の方針を決めていくために単なる人間心で指導する人達ではなく、神の如く人々や社会全体を幸福へと導いていく最高の指導者が必要とされるのです。そして、人間には未来を読む力はありませんが、霊には絶対時間の中にいきていますからある程度未来がわかります。こうした指導霊の援助を受けて人々の幸福な生活を保証する指導者がやがて現れてきます。

その方の名前は、神武天皇と呼ばれるようになるでしょう。この節の冒頭にでてきた神武天皇がその人です。彼は現在では架空の人物ですが、このアクエリアスの時代に実在の人物となるわけです。その意味では、古事記は単なる歴史書だけではなく、予言書でもあ

ったという事になるわけです。

こうした徳高き天皇の出現とそれにより政治、教育、軍事等が秩序を持って正しく運営され、人々の社会への情熱のある無私の働きもあって、アクエリアスの時代は本当に地上に出現したユートピアとなるだろう事を予言しておきます。

この神武天皇は、先ほどのような真理を国民始め世界の人々へ説くでしょう。そして、人々は己の永遠の生命を自覚し、神により創られた生命として地上にユートピアを築く事に全力を傾けるでしょう。この結果、アクエリアスの時代がもたらされるのです。至福の時代です。人々が地上に生きながら、幸せで幸せで仕方がないほどの幸福に満たされるという黄金の時代の到来です。

第５章　アクエリアスの時代を切り開こう

１節　このままで行けば人類は滅びる

新約聖書にヨハネの黙示録という部分があります。このヨハネはキリストの十二弟子の一人のヨハネではありません。別人ですが、彼が書いたこの黙示録はもう二千年近く前に書かれたものですが今だに多くの人々に読まれ、研究されています。なぜなら、この内容は非情に恐ろしく、悲惨な事柄が起こると書かれているのですが、どうもそれがこの二十世紀末の事らしいのです。

このため、世界中に多くの人達が興味を持って研究しているのですが、何分にも表現が抽象的で理解に苦しむ所も少なくありませんから、完全に解読するのは不可能に近いように思われます。

同様に、ノストラダムスという予言者がいます。そして、彼の書いた「センチュリーズ」という予言詩はその後の五百年の歴史を実に良く言い表しており、その予言の正確さが話題になっています。このノストラダムスの予言の研究者も世界に数多くいます。

このノストラダムスの予言は四行の詩に書かれており、その内容は今までの世界の歴史を言い当てている部分がかなりあるのですが、何分にも表現が象徴的でそれを起こる前に完全に理解する事はかなり困難です。

こうした予言者たちに共通している事は、一様に現在の、この二十世紀末の危機が叫ばれているようだという事です。それは、ノストラダムスの他に類を見ない「１９９９年７

の月、天から恐怖の大王が降ってくる。」という予言からもはっきりしています。明らかに彼らはこの世紀末を中心とした危機を予言しているのです。

そして、ヨハネの黙示録もこの頃の出来事と解釈すればその恐ろしげな内容の多くがまだ起きていない事である事がわかります。

話は少し変わりますが、北欧にスウェーデンボルグという方がいました。いまから二百年ほど前の事です。この方は科学者として活躍した後、心霊者となり「天界と地獄」、「天界の秘儀」などを著して、いわゆるあの世の世界の探検記を世に問いました。この霊界探訪記は大変な反響があり、彼自身もやがて国外に逃亡せざるを得なくなるのですが、少なくとも当時の人々にとっては到底、信じられない内容であった事は事実です。

しかし、この霊界探検の本が現在も絶えず読み継がれ、再出版されているという事はやはり、何かしら虚言として片づけられないものを人々が感じているからでしょう。

要するに、彼、スウェーデンボルグは幽体離脱ができたのです。幽体離脱とは、意識が肉体を離れる事です。これは、普通は死を意味するのですが、これ以外にも一時的には有り得ます。たとえば、睡眠の時、深い睡眠状態に陥ったとき意識が肉体を離れ霊界、異次元空間に漂う場合があります。これ以外に霊能者とも呼ばれる特殊な人達の中には幽体離脱と言って、覚醒状態のままでもその意識を肉体から遊離させ、霊界に踏み込む事ができる人がいます。

彼もこの幽体離脱によって、様々な霊界の様相を見聞きし、その内容を忠実に書き留めたのです。このために、普通では考えられないような霊界の内容を克明に記録した書物が書けたわけです。

黙示録のヨハネも実は同じであったのです。彼も幽体離脱によって霊界の事柄を見てきているのです。そして、彼の場合は神智学でアーカーシャーの記録と呼ばれる霊界でも最高の秘密の記録を見てきたのです。

このアーカーシャーの記録とは、この世で言う書物のような物ではありません。生命の誕生以前の地球の過去から未来まで記されているようです。ただ、文字で書かれるわけでも絵で描かれるわけでもなく、何と表現したら良いのか困るのですが、一種の磁気の記録のように、たとえばカセットテープなどに記録しますね。あのテープの表面に無数の磁性体が塗られていて、そこへ音楽や音声などの信号を電流に変換した後、その磁気の変化を磁性体に記録しているわけですが、これと良く似た原理だと思うのですが、アーカーシャーの記録という特殊な空間に地球の全てが記録されていて、望めばその部分を見る事ができるのです。

ところが、これがまた非情に表現するのが難しいのですが、この見せられる内容というのが映像のようなはっきりとしたビジョンではなく、もやもやとした概念のような抽象的なインスピレーションのようなものを与えられて、それを各人が感じとるという具合なのです。

このために、感じとる予言者の感覚により相違が出ます。また、ヨハネは二千年近くも前に生きた人でしたから、どうしてもその時代の感覚でしか受け取る事ができない面もありました。それゆえに、現代の私達が読んでも何を言っているのかわからなかったり、また夢のような話のように感じるのです。当時は、車も戦車も核爆弾も、ミサイルも当然ない時代であり、人々は自分の足で歩き、限られた道具以外の機械などまったく無い時代で

あったのです。

その環境の中に生きている人間が急に現在のような文明社会の兵器や重機械などを見せられても、それを理解する事は無理であったろうと思われるわけです。

ですから、黙示録の解釈をあれこれと考え込んでいる研究家も多いのですが、要は全体のムード、雰囲気を感じるしかないと思います。細かな一字一句を捉えて色々な解釈をしてみても意味がないわけです。要は大昔の人間が見た光景を当時の人の言葉で推測するしかないのです。

そういうつもりで読むと、これから七つの封印が解かれていって地上に色々な災いが降り懸かる事、そして、人々を残酷非道に扱う悪魔のような人々が現れてきて世は混沌とする事、しかし最後には悪魔は封印されて千年王国が築かれる事などが読み取れるだろうと思います。ノストラダムスが予言詩で語っている事も類似の出来事であると思います。

要するに、こうした予言者たちはこれから先に激動の時代が訪れるということを予言しているわけです。何故か、それは現代の私達に警告を発するためです。数千年、数百年も前に現代の私達への警告を発しているのです。なぜなら、同時期に予言してもその予言は現在でもいくらでもいる予想家の予想と少しも変わらないからです。玉石混交の時代ですから、真実の予言が出ていても気づかない人が多いのです。

ところが、数百年、数千年も前に出して置きますと、その後の歴史によりその予言が篩いに掛けられます。残った予言はそれなりの重みを持ったものとなるわけですね。このために、ずっと以前から現代の危機が意図的に予言されているのです。

さて、現在を振り返って世界を眺めてみますと、もう既にあちこちで天変地異が頻発し

ているのは事実です。毎年、毎年、世界のあちこちで地震や津波、火山の爆発などにより多くの被害が出ていますし、数え切れないほどの犠牲者も出ています。

また、政治情勢においてもルワンダの難民やアパルトヘイト政策などあちこちで不穏な動きがあり、多くの人々が悲惨な目にあっているのも事実です。しかし、その一方でデタントの動きがあり、何人ものノーベル平和賞に輝く政治家が出ているように長らく国交のなかった国同士が急に平和条約を結んだり、協定を結んだりしているのも、また事実です。

こうした情勢を見ると、現在の私達にはこれから世界がどちらの方へ流れていくのか、どのような未来がくるのかはっきりとしないのが現実です。ある者は楽観し、ある者は悲観しているのが現状でしょう。

ところが、ヨハネの黙示録やノストラダムスの予言が何故なさたのかと考えてみると、それは現代の私達へ未来を教え、少しでも良い方向へ進めるられるように対処策を講じよという事だと思うのです。そうであれば、外れてくれれば良いのですが、このままで行けば破滅するような情勢を一端は受け入れるべきであると思います。

そして、大切な事はそのような悲劇的な状況をいったいどのようにすれば乗り切って行けるのかを考えるという事なのです。知恵を絞って乗り越えていく方法を検討する事です。過去の偉大な予言者たちは、それを私達に期待して予言を残してきたのです。

現実に人類が滅びるきっかけなどいくらでもあります。フロンによるオゾン層の破壊もそうですし、世界を何度となく破壊する事が出きるほどの核爆弾もそうでしょうし、２００年頃に衝突すると言われている小惑星もそうですし、自然のバランスが崩れてきており、世界のあちこちで干ばつや洪水の大災害や地震、火山噴火などの天変地異が頻発して

いるのもそうでしょうし、エイズなどの特効薬の無い流行性の病気が広がってきている事もそうでしょう。

まさにパンドラの箱を開けたかのように色々な厄災が出てきています。これらが今後どのように展開されるのかはわかりません。また、私達人類がどのような態度を現していくかもわかりません。しかし、彼らが予言したように運ぶ基盤はすべて既に整っています。材料は既に与えられています。破滅への道のりを転がり落ちる事はたやすい事です。

しかし、そうした中で私達は最悪の未来を予期しつつ、それを最小限度にとどめ、幸せな未来を開くために最大限の努力をしなければなりません。そのために、こうした真理が説かれている事を良く理解して欲しいと思います。誰も苦しい目に会いたいと望んでいる人はいません。全ての人ができれば幸せになりたいと望んでいるのです。アクエリアスの時代が来て、人々が幸福に暮らせる事はすべての人々にとって喜ばしい事なのです。誰も邪魔する必要などないのです。ならば、アクエリアスの時代を開くべきです。人々が皆幸福に暮らせる至福の時代を。

次節からは、アクエリアスの時代をもたらすために奇跡のシナリオを開く鍵について検討してみましょう。

２節　奇跡のシナリオを開く鍵・・・経済改革

まず、奇跡のシナリオを開く鍵の第一は経済改革です。

皆さん、ここまで読んでこられて疑問に思われた事はないでしょうか。それは、何故、

この日本にこのような改革が起きてくるのだろうかという疑問です。この一連の改革はまるで宗教革命とでもいうべき国民全体の意識改革です。現在の状態、人々が唯物論や無神論に毒されている状況とはまるで逆に、神を信じ地上に神の子の楽園を築かんとする運動です。

現在の日本の状態を知る人は、こんな革命が何故日本を中心に起こるのか不思議にも思われるでしょう。なぜなら、現在の日本人で本当に信仰心を持つ人がいったいどれほどいる事でしょうか。おそらく、1割にも満たないのではないでしょうか。総宗教人口は2億人にも達するそうですが、そのほとんどが単なる興味半分、あるいは御利益信仰です。

自らを無神論者と言いきる人は何処にでもいます。こうした無神論の国、日本です。しかし、世界、たとえば西欧諸国にはキリスト教が現在も残っています。裁判でも神に誓って真実を述べる事を誓ってから証言しますし、大統領も聖書の上に手を置いて宣誓します今でも、カトリックの信者は日曜日には教会でミサに出席します。こうした根強い信仰の形態が現在も残っています。

しかし、その実、本当に神を、主なるキリストを信仰しているかと言えばそうではありません。教会の神父でさえ、神や聖霊が本当にいるとは思っていないのです。聖書の中のそれらの記述は、人々に信仰心を植え付けるための装飾だと思っているのです。当然、死ねば終わりだと思っているのです。「神を信じれば救われる」と信者に教えていながら、救いとはどういう事かがわかっていないのです。

救いとは、精神的な開放です。何からの開放かというと、死からの束縛です。死ねばすべて終わりなのだという恐怖からの開放なのです。信じれば救われる、何を信じるのか、

それは肉体が命ではなく、肉体の中でそれを統制している意識が生命自体であり、それは永遠不滅の存在であるという事ですね。神によって創られた永遠の生命が人間の実態であるわけです。

これを信じなさいと言っているのですが、キリスト教自体が二千年もの年月を経て当時のインパクトが失われ、その意味も唯物的に解釈され、もう現代の人々を救う力を持っていないのです。このために、形だけ残って中身が失われてしまっているわけです。

中東などのアラブ諸国も同じです。宗教はマホメットのイスラム教ですが、その原典コーランも単なる戒律を定めただけのものに成り下がっています。人々は毎日、時間になるとメッカの方に向かって頭を地面に擦り付けていますが、それがいったい何になるでしょうか。信仰心の証だということであれば、それなりの意味がありますが、彼らのほとんども神も霊も心の底からは信じていないのです。ただ、戒律を破ると厳しい掟が待っているから、従っているだけに過ぎません。

仏教でも同じですね。日本人も葬式の時になると、お坊さんが意味のわからない念仏を挙げて線香を焚いているのを当然としていますが、そのくせ、神仏が実際にいるとは信じていません。これは、東南アジアの他の国でも同じでしょう。

こうした世界の状況ですが、日本には独特の雰囲気があるのです。

それは、仏教も神道も、その他の宗教も生活の中に入ってはいますが、これこそがこの国の宗教というものがないのです。宗教的な固定色がない。このために、無神論が横行しているのも事実ですが、宗教的には自由がある。これは厳然とした事実です。

つまり、まったく新しいものを入れ易い土壌があるという事です。もう、二千年も前の

古くさい教えでは人々を救う事はできないのです。現在の人々に受け入れられる現代的な教えが必要とされているのです。

このために、日本が選ばれたのです。そして、この真理を浸透させていく第一歩は、経済です。現在の経済の中にはまったくの自由があるからです。野放しという感じがしないでもありませんが、色々な経済活動が活発に行われていて新しい商売が次々と出てきています。

日本経済はもう既に世界のトップレベルに達していますが、これは活発な企業活動によるものです。株式会社を始めとする企業の活発な経済活動の結果、もたらされたものであります。そして、この結果、人々の暮らしは見違えるように向上しました。昔であれば、百姓や漁業くらいしか職がなかった一般の庶民が今では、様々な企業の元で働いていますし、その給料により食品、日用品はもとより、家電製品や自動車、住宅などを購入する事ができるような時代になっています。

これらは、日本の企業活動を中心とした経済成長の賜物です。そして、現在の人々の最大の関心も給料や会社での地位や住居や車などの経済によってもたらされる物が中心です。こうした時代には、神や霊などの純粋に精神的なものだけで何も物をもたらさない信仰は流行らないのですね。人々はどうしても御利益信仰に走ります。このお守りを買って拝めばお金持ちになれるとか、この信者になれば好運が約束されるとか、人々はこうした怪しい宗教にどうしても見返りを目当てに近づいていくのです。そうして詐欺にあったり、様々な変わった事件を起こして周りを驚かせたりしています。

しかし、良く考えてみると、結局人々が最終的に求めているものは自分の幸福であるわ

けですね。それを得るためにはお金や地位などが必要であると思い込んでいるわけです。また、それに欲望が重なってきてどうしても欲しいと執着しているのです。しかし、求めているものは幸福感であって物ではないわけです。物がいくらあってもそれで幸せになれるとは限りません。逆に、物などそれほど無くても幸せになる事もできるかも知れないのです。

幸せな感覚とは、実は精神的な充足感と非情に近いのです。精神的に満ち足りた時に確かに幸福な感じがしますね。そして、それは長年の努力が実って重役に昇進した時とかの場合とも一致する事もあるでしょう。でも、地位が与えられたからではなく、長年の努力の成果が満足すべき形で与えられた事に幸せを感じているのです。ですから、単に地位だけ与えられても明らかに自分にその能力がないとわかっている場合はこれ自体が不幸になる場合もあるのです。

要は、自分の精神的な、受け止める状態によるわけです。受け止め方の問題なのです。この意味で何事も幸福感を受けるように受け止めれば世の中はすぐにバラ色に変わります。精神的なものが一番幸福に影響するのです。

こうした意味から、現在の経済活動の中に真理価値の導入が絶対に必要であると思うのです。ここでいう真理価値とは、その経済活動の結果、人々や社会をどれほど幸福にしたか、良くしたかという指標です。

つまり、現在の経済活動は単なる利益の追求です。目的とする物は投資した以上のお金です。お金や地位を稼ぐ事を目的としているのです。しかし、お金という物は本来、価値中立な物であってそれ自体が善でも悪でもありません。お金の使われ方で善悪が決まる物

なのです。残忍な事を考えている人がお金を持てば大変な事をしでかし、人々を混乱に陥れるでしょうし、逆に福祉を重要視している人がお金を持てば施設などは寄付により大変助かるでしょう。

このお金の使われ方に対する価値観がまったく欠如しているのです。これを真理価値と言いますが、同じお金を使ってもパチンコなどで全部無くしてしまうと悔しいだけですが、もしそのお金を何か困っている人に用立てしてあげて、その結果相手に大変感謝されたらとても気分が良いですね。この二つの場合でも現在の経済原理では同じです。共に、一万円なら一万円の出費です。しかし、その行為によって本人や周りが受ける感覚はまるっきり違うのです。

真理価値においては大変な差があるという事なのです。この真理価値が経済原理の中に導入されなければならないと思います。そうすれば、単なる経済活動の量だけではなく、その質が問われるようになります。たとえば、地方に企業が進出する場合がありますが、単なる法人税や固定資産税の増収だけの価値ではあまり意味がありません。逆に、森林の乱開発や大気汚染、水質汚染などの環境汚染に結びつくかも知れません。こうなれば、真理価値からすれば完全にマイナスです。

社会自体が真理価値を追求する体制になっていれば、こんな会社は進出する事自体ができなくなります。「あなたの会社は私達の地域にいったいどのような貢献をしてくれるのか」という目で判断していくべきなのです。また、逆に企業の方は自分の会社のサービスは、あるいは商品はこのような特徴があり、これだけ人々に幸福感を与える事ができるとPRすべきなのです。

すると、青少年を非行に導くようなサービスや商品などは販売できなくます。真理価値がないからです。利益に結びつかなくなるわけです。現在の経済はそうではありません。玉石混交です。良い物も悪い物も同じように扱われています。すると、企業は結果など考えずに、利益の上がる物だけを追求しますから、中には社会にとってマイナスなサービスや商品も横行します。その結果、確実に害悪が現れてきます。

ですから、真理価値の元に企業も国民も意識改革をしなければなりません。真理価値のある経済活動が利益を生むような体制を整えなければなりません。そうでなければ悪の行為がのさばり続けます。人々も自分や社会にとってより幸福な結果を与えるサービスや商品を選択し、企業も積極的に少しでも高い真理価値を持つ活動を目指すような経済にすべきなのです。

こうなれば、自分の会社の発展を願ってする企業の活発な経済活動が結果的に社会をどんどん良くしていく事になります。人々が住み易く、楽しく生活していける社会に近づいていくわけです。

3節　奇跡のシナリオを開く鍵・・・政治改革

このように、真理価値が求められるような経済になると思います。そして、これを実践する企業も出てくるはずです。

それは、ユートピア株式会社とでも言うべき存在となるでしょう。定款の筆頭に社会をユートピア化する事に貢献する事を目的として企業活動を行うと宣言し、自社の利益だけ

しか考えていない現在のほとんどの株式会社とは違って、人々の幸福や社会への貢献を目的として企業の企画、活動を行おうとする企業がやがて出現してきます。

この企業は、これからの真理価値を盛り込んだ経済のモデルとも言うべき存在となるでしょう。そして、この企業の盛衰が日本のあるいは世界の将来を決する事になると思います。この企業がめざましい発展を遂げて、多くの企業を従えて巨大な企業群を作り、その企業群が日本の経済社会を牛時る程の力を持てば、日本経済の中にこの真理価値は確実に浸透します。

人々は、単なるサービスだけではなく、そのサービスが結果的にどんな効果を持つかを考えて活動をせざるを得なくなります。勝手気ままに活動をしているところは、必ず倒産の危機に瀕するはずです。自然と淘汰されるようになります。こうなると、現在のようなせちがらい世の中とは少し事情が変わってきます。人々がより良い結果を挙げようと活動すれば社会は発展し、潤いに満ちてくるのは当然です。

しかし、こうしたユートピア企業が破れ去ってしまえば、社会の中に真理価値を浸透させる事は無理でしょう。現在の延長で、エゴイズムの企業がのさばり、世の中はどんどん冷たく、無関心になっていきます。やがて、そうした冷酷な社会に悲観した人達が様々な無差別の破壊活動を行うようになります。結果として現れてくるものは、社会の崩壊です。

こうなると、政治改革など有り得ません。この節で扱う政治改革の前提として、この経済改革の成功という事が必要なのです。この経済の中に真理価値を浸透させるという経済改革が成功して始めて可能な政治改革であるという事を前置きとして言って置きたいと思います。

さて、では経済改革後に起きてくる政治改革とはどういうものでしょうか。それについて概要だけお話したいと思います。

まず、有力な指導者が出てきます。徳のある政治家です。現在の政治家のほとんどは自分の地位、人気というものを大変気に掛けています。選挙によって選ばれるのですから、当然の事でしょう。人気がなくなればとたんに票に反映され落選の浮き目に会いますから大変です。絶対に票を落とさないように努めなければならないのですね。

このために、あらゆる政治活動の中にこの個人の人気を下げたくないという事情が介入してきていると私は思います。建て前ばかりが先行し、国民に不評を買うような政策は敬遠され、受けの良い政策を発表しようとしています。野党は、与党に対して反対するのが当然と思っているようです。政策というものは、本来、国の将来的な展望をしっかりと見据えてその方向へ推進していくように行われるもので、良い顔ばかりしている訳にはいきませんし、時には厳しい態度を守らなければならない時もあります。個人的、あるいは組織的な枠を越えて、政治家が一致団結して国の将来について真剣に取り組まなければならないのです。

これが、政治家としての当然の姿なのです。ですから、現在の政治など大した評価を受ける事の無いレベルの政治状態である事を認識して下さい。

その証拠に、今本当に政治に関心を持っている普通の人達がいったいどれほどいるでしょう。ひどい人は、現在の総理大臣の名前さえ忘れています。これほど頻繁に交代されると無理もない事で「今、誰だったかな」と言う人もかなりいるのが現実です。ましてや、大臣などわかるはずがありません。そして、こうした内閣を中心とする国会の法案などに

関心を持つ人というと極少数になってしまうのです。

こうした政治に無関心な人々が非情に多いです。これは、選挙の投票率を見ればはっきりとします。ほとんどの選挙が半分とちょっとの投票率ですね。不在者投票という仕組みまであってもこのくらいしか投票率がないという事は半分近い人達が投票に行く気を起こせないという事を意味するものであり、その選挙自体にそれほど意味を感じないという事なのです。つまり、誰が当選しても大差無いと思っているのです。

これは国民の政治に対する無関心が原因ですが、その根源は現在の政治状態にあるのです。現在の政治は国民にそっぽを向かれているのです。そして、現在の政治家の中に国民の期待に添えるような人物もいないので無関心を装っているのです。

本来、政治というものに国民が無関心でいられるわけがないのです。彼らの生活を支えるのは、給料などで得たお金ですが、このお金は税金という形で一部、無理矢理取られてしまいます。自分の稼ぎの中から徴収されていったお金がどのように使われるのか関心がないわけがないのです。政治とは本当は、非情に国民生活と密着したものであるはずなのです。

それもこれも現在の徳の無い政治家のせいです。しかし、この真理価値が定着した頃には徳高き政治家が輩出してきます。なぜなら、社会には真理価値が浸透していますから、現在のような国民にも、社会にも特に何の貢献もしないような政治家はその存在自体が疑問視されるようになるからです。人々を幸福にし、社会に貢献するものほど価値あるものとされる時代に選ばれる国民の代表は、最高に国民や社会に貢献できる人であるはずです。

こうした政治家達はその地位の基盤がこうした国民の期待ですから、それに添えるよう

に努力するようになります。より国民を幸せに、社会を調和させ、発展させるような活動をしようと努力します。政治家の本来の姿です。結果として「国民の幸福のための政治」がもたらされるわけです。

そして、こうした時期にあわせて偉大な指導者が現れてきます。彼は、多くの国民に推されてその舞台へ上がって行くでしょう。彼の元、様々な改革が行われるでしょう。その改革の内容を今、事細かに書く必要もないでしょうから、大きな部分だけお話しますと、まず第一に日本国憲法が改正されます。

部分的にではなく、おそらく抜本的な改正です。そして、この新しい憲法では神の存在とその信仰がうたわれます。これは現在の私達には非情に不思議な事のように思われるかも知れません。現在は、政教分離と言って政治と宗教を分離する事が良い政治の基本と考えられているからです。しかし、これは独裁者を生み出す事を防止するという意味合い以上の効果はないのです。

むしろ、政治とは国民の信頼の元に指導者と国民とが一体となって行われるべきものであり、国民が一致団結して支持するという事が素晴らしい政治を行う事の前提として必要なのです。国民の圧倒的な支持を得て始めて強力な政治や改革というものは成す事ができるのです。それには、現在のように国民がめいめい勝手な事を言い、気ままに行動している状況ではどうしようもないのです。

国民がすべて良識の元にまとまらなければなりません。そのためには、身勝手な人達を野放しにしていてはいけないのです。自由というものは公衆の利益を害するようなものは認められないのです。すべての国民は憲法の元に忠実に生きる事を目的とする義務が生じ

るわけです。そのための憲法です。しかし、憲法というものは人間が作ったものです。人間が作ったものに人間が服従するのはおかしいです。また、時代や環境の変化により憲法も改変が必要となります。

こうした意味から、憲法自体の条項ではなく、憲法の中の永久に変わらぬ精神を守り抜く必要があるのです。その精神とは、人々がお互いの幸福を守り、社会の調和と発展を目指す事です。しかし、この精神は個人的な欲望や感情は犠牲にしなければならない場合が多いのです。自分が楽をしてお金を儲けようと考えていては、成り立たないわけですね。そうした感情を殺して人々が一生懸命、社会のために働いてこそ成就するわけです。

すると、何故そこまでしなければならないのかという疑問を覆すものが必要となるわけです。「何故、そんなにして尽くさねばならないのか。死ねば終わりなのだから、楽に気ままに暮らせばいいさ。」という人達を説得するものが要るのですね。このために、どうしても神を持ち出さなければならないと思うのです。

本当に、人間が神によって創られた生命のエネルギーがその真実の姿であり、永遠の生命を持ち、この世とあの世を循環しているのであれば、この世にいる間はその国の憲法に従い、神によって与えられた地上の命に感謝しつつ、目的であるところの自分の精神的な成長と同じく神の子である他の人々への愛に生きる事は当然の姿です。何人も異論をはさむ余地はありません。ですから、この部分をしっかりと固めねばなりません。

ただ、これには客観的な証明も人々を納得させる証拠も必要でしょう。そのために、奇跡の事件が色々と起こるのです。過去の伝説の文明が甦るのもそうですし、異次元の世界の存在証明もそうでしょうし、宇宙人との交易もそうです。こうした奇跡を経て人々は現

在の常識、無神論を捨てて神への信仰の時代を迎えるのです。

こうした憲法の抜本的な改正が一つです。もう一つは、本当の国家の指導者としての天皇制の創設です。現在の天皇は国家の象徴です。公式行事に出席して挨拶する程度の役割ですが、今度の天皇は行政、司法、立法、教育の全てに対する指導者です。ただし、実質的な指揮権はありません。すべてに対する指導が仕事であり、直接指揮する事は許されていません。これは、もちろん独裁を防ぐためです。しかし、こうした天皇が大きな力を発揮するためにはよほど優れた指針を発表する必要があります。

その指針の方向へ努力すれば必ず良い結果が出るようなものでなければなりません。このため、現在のような世襲制は廃止されます。国の中で最高に優れた指導者が選出されるようになります。そして、彼の優れた指導力により行政も司法も立法も教育も連携を取り合って人々の幸福が増し、社会が調和し、発展する方向へと誘導されていくのです。このような徳治的民主主義の登場を予言しておきたいと思います。

4節　奇跡のシナリオを開く鍵・・・真理教育

こうした、天皇の徳により良い方向へ導きながらの民主政治が登場してきます。なぜなら、民主政治だけであれば、最高の議決根拠は多数決ですね。国民の大多数が賛成する案件は可決せざるを得ないのです。

しかし、国民が良識を持って判断を下している間はそれで良いのですが、単なる自分の利益で判断しだしたらどうでしょう。たとえば、減税に関する法案などは誰でも取られる

税金が少なくなるのですから賛成しますね。しかし、国家の財政を考えると収入が減るわけですから慎重にやらないと財政危機に陥ります。ところが、国民の大多数が国家の財政の事などに無関心で自分の税金が少なくなる事だけを考えだしたら、国家の財政は傾かざるを得なくなります。

次第に、国力も弱体化して経済も停滞します。国民の生活も苦しくなっていきます。結局、自分達に悪い結果として降り懸かって来るんですが、どうしても目先の事しか考えないんですね。これが実態ですから、単なる多数決が絶対正しいという事は有り得ないのです。少数の方が正しい場合もいくらでもあります。特に、現在のように国際情勢が不透明で先が読めず、国民が政治に無関心な状態では余計です。

やはり、素晴らしい指導者がより良い方向へ導いていかなければ、国民の喜ぶ事だけをやっていたんでは失敗ばかりになってしまいます。衆愚政治に堕さないためには、正しい判断のできる指導者が必要ですし、この指導者の元、三権が団結して機能する政治が最も効果的であると思うのです。

こうした政治制度が出来上がる前提としては、その交代制度が確立している事が必要です。つまり、彼の指導により国を上げて取り組むのですから、この判断が間違っていたら大きな痛手になります。また、独裁などおかしな事を考え出したら大変な事になります。この指導者がおかしくなれば、すぐに自動的に罷免される制度を造っておかなければならないのです。彼が発表した指針はやがて各種の行政機関により施行されますから、その結果を国民が判断して彼の支持を決めていくというフィードバックのシステムが確立しなければなりません。そして、より素晴らしい結果を出せる指導者が選出されていく政治制度

が必要です。

こうした制度を確立した後、政治改革が行われ、その結果、最高の指導者として天皇が選出されるというのが望ましいのです。

そして、経済改革が成功し、この政治改革が成されると前にも少し触れましたが、この徳ある初代の天皇として神武天皇が即位するはずです。この時がこの本で言うアクエリアスの時代の到来です。アクエリアスの時代の到来を告げるのは、神武天皇なのです。

この頃には、国の中はもちろん世界的にも大調和の時代に入っています。世界戦争は集結し、人々はお互いを神の子として尊厳して進歩と調和のために努力しているでしょう。一種のユートピア社会ができているわけです。至福の時代、黄金の時代です。

さて、この黄金時代には真理というものが一般に浸透していますが、この天皇の重要な役割の一つとして、真理の普及があります。真理というものを、その権威で国民に講演し多くの人々に精神的な幸福を与えるという努めがあるわけです。自分の悟りで国民がより幸福に暮らせる心の持ち方を教える仕事があるのです。真理教育という事です。

これから起こる今回の革命は、言ってみれば意識革命です。現在の唯物論や無神論に染まっている人々を１８０度展開して、真理に目覚めさせようとする意識改革から始まる革命なのです。

古来より、人々はユートピアを夢見てきました。地上では、何処の国も戦乱が頻発し、弱肉強食に近いような状態も度々ありましたし、身分制度のようなものでがんじがらめに縛られて奴隷のような待遇に涙した人々もいました。また、何度かの世界大戦のために家も土地も奪われ、親戚や家族とも死に別れて悲惨な生活を経験した人々もいました。

そのような、体験を味わいながら人々は一方で夢のようなユートピア社会を空想してきたのです。誰もが生き生きと楽しく過ごし、身分の違いも無く、貧富の差も少なく、食糧に事欠かず、希望する職業に就けて幸福に暮らす事が出きるような社会はどこかにないものかと空想したものです。

しかし、そうした理想社会は今だに何処にもあった試しはありませんし、またあるとも思えません。なぜなら、現在の人間が寄り集まって理想社会などできるわけがないからです。人々は自分の利益を最優先に考えていますし、神や仏の前に謙虚に自分を反省する習慣も持っていません。やりたい事をどれだけやれるか、欲しいものをどれだけ手に入れる事ができるかが人々の最大の関心事なのです。こんな人達が集まったところで、お金や地位の奪い合いしか始めない事は火を見るより明かです。

人々が集まって、その社会が理想社会になるためにはそこに集う人達は自分の私的な欲より理想社会の建設のために尽くす事のできる資質を持った人達でなければなりません。結局、その中に住む人々の心が社会に反映されるわけですね。ですから、その反映した社会が理想的になるには、元の人々の心は神様のような透明で正しいものでなければならないのです。

この神様のように透明で正しい心とは何かというと、これが真理なのです。真理とは簡単に言えば神様のような心の持ち方を学ぶ事なのです。人々は単なる動物が二本足で立ち、少しばかりの知恵を持ち、他の動物や植物を虐待し、環境を汚染し、孫悟空のようにわがままに生きている現在の姿から脱却するには、本来の姿を教える必要があるのです。本来の姿とは親なる神の心、真理以外にないのです。

この真理に目覚め、神の子のように見える人々が集えば、そこにはユートピアができることは自明の理であるわけですね。これが基本であり、必要条件であるわけです。人々の心がすさんでいて、暗ければ、どんなに優れた指導者が現れたところでユートピアなどできるわけもありません。イエス・キリストが捕らえられ、十字架に掛けられ、処刑されたように反対派により葬り去られるのは目に見えています。

真理とは、学問のように暗記するものでも、また万人に同じように与える画一的なものでもありません。十人十色と言うように、それぞれの人が皆心性は違いますから、そのそれぞれの違いに応じた真理が必要とされるのです。たとえば、悲観的で暗くなりがちな人には、希望の原理、光明思想の真理が必要ですし、精力的ではあるが配慮に欠ける人には、反省の教え、自己規制の真理が説かれなければなりません。

相手の気根に合わせた真理が必要とされるわけで、その真理により相手が素晴らしく変わらなければ意味がないわけです。相手をより幸せな心の状態にするもの、それが真理の目的なのです。ですから、この真理を説く者は縦横無尽に色々な教えを説ける人でなければなりません。様々な真理の説法により、多くの人々を悟らせ、幸福へと導く力が要求されます。

ですから、この天皇の真理教育というものは最高の教えであり、国家の心髄とも言うべき大切なものになります。単なる思想家や学者のような人では無理です。

神の如く真理を説ける人でなければならないのです。大変困難な仕事ですが、それができる人が計画的に生まれてきています。そうした大きな使命を帯びた人達が送り込まれているのです。この人達は極少数ですが、神近き指導霊の指導を受けて人々に真理を説ける

人達なのです。たとえば、釈迦とかキリストなどに指導された人物が真理を説けば、その教えは世界中の人々を震感させ、悟りに至らせ、愛に生きさせるようになるはずですね。

そうした人物が天皇へと選出されるようになれば国民はその講演を聴く度に幸福感が高まるのは必至です。初代の神武天皇もそうした人物です。多くの偉大な指導霊の指導を受けて、珠玉の真理を惜しげもなく次々と国民へ施されるでしょう。人々は幸福で幸福で仕方がない、まさにそうした状態になるはずです。

5節　アクエリアスの時代を切り開こう

真理とは、実に貴重なものなのですね。私達、人間が共に尊重しあい、愛し合い、協調してユートピア社会を築こうとするためには真理により、そうした資質を植え付けなければならないのです。そうでなければ、決して不可能な事であるわけです。そのための、真理です。

真理そのものが生存のために必要であるという事ではありません。人間が、動物とは違って人間らしく、愛し合い、信じあって進歩と調和を目指して生きていくためには、動物とは格段に成長した精神を持っていなければならないわけですね。そして、これは知能という面ではもう既にかなり実現しているでしょう。人間は、自動車やその他の乗り物を発明し、地上だけではなく、空や海や宇宙までも行く事ができるようになっています。また、そのほかにも様々な物を発明し、動物とは比較にならないような生活をしています。

しかし、精神的にはどうでしょうか。人間の中にもまるで凶暴な野獣のように、他人に

暴力を振るったり、窃盗や殺人などの犯罪を犯したりする人達もいつも、どこにでもいますし、普通の人々でさえ、会社や学校などの周りの人達の中で一人や二人は、まるで宿敵でもあるかのように警戒し、敵対しあっている相手がいるのではないでしょうか。

もちろん、動物よりは精神的にも勝っているとは思いますが、これは当たり前の事であって、理想としては神の子のように調和と発展に満ちた関係が望まれるわけですね。ある意味では、私達の地上の人生はこれを具体的な形としてどのように、どれだけ現す事が出きるかを試されていると言っても過言ではないのです。

真理の元に人々の心が正しく一つにまとまったとき、素晴らしい社会ができる可能性が高いわけです。このために、過去、各地で様々な形で真理が説かれてきました。たとえば、アジアの仏教、西欧のキリスト教、アラブのイスラム教、日本の神道などもそうです。これらの宗教は、それぞれ違った人が違った時代に、違った形で神や仏を信仰しなさいと説いたものですが、そしてその違いのために現在でも宗教戦争という愚かな争いも起きていますが、これは本来おかしいのです。

いったい、何のための宗教ですか。特定の神様を拝むのが宗教の目的ではないのです。真理です。真理を述べ伝えて、人々に「神や仏という偉大な存在があり、人間は生命を与えられてこの地球の環境に生活の場を与えられている。それを忘れて自分のわがままだけで生きてはいけない。他の多くの人々と共に協調して素晴らしい社会のために尽くさなければなりません。」という事をそれぞれ違った風に教えているだけです。

たとえば、簡単に言えば、仏教は修行ですね。修行という行為によって自らの心を正そうというところに中心を置き、人々の心を正していく事によって素晴らしい社会への伏線

としようとしているわけです。また、キリスト教は愛ですね。愛というものを中心に据えて、人々に調和というものをもたらそうと考えているわけです。イスラム教は、戒律です。戒律という形で自らの行為を戒め、清く正しい生活を送る事に中心を置いて調和を目指しているのです。日本神道はみそぎ祓いですね。汚れを祓うという行為によって汚れの無い清い人々を造ろうとしているのです。

単純に言えばそういう事だと思います。それぞれ、時代が違い、そこに住んでいた人々の環境が違っていたために、当時で一番効果があると思われる真理の説き方をされているわけです。そして、事実その当時の人々はその教えによってかなり素晴らしい心でいられるようになり、大きな成果があったわけです。それが故に、現在でも消える事無く伝わってきているのですが、時代が変わり世界の端から端まで数時間で行ける世の中になってきますと、自分達と違った教えを奉じている人々がまるで仇のように感じられてくるわけですね。

それぞれの宗教の創始者は、皆この教えこそあなた達を救う教えであると言ったはずですし、また現実にその時はそうであったのですが、他に違った宗教がある事がわかってくると他の宗教を信じている人達が間違っているように思えてくるのですね。それで、「あなたの宗教は間違っているからこの教えに変えなさい。そうすればあなたは救われます」と言うのです。そうすると、相手はもちろん反発します。「あなたの方こそ間違っている、私達の信じる神を侮辱すると許さない」となってしまうのですね。

極々、簡単に言えばこれだけの事なのです。宗教戦争など信者にとっては最低の行為です。それぞれの信じる神が、仏があるいは創始者がそんなことを望んでいると思いますか。

彼らが望んでいる事は一つ。信者が自らの心を清く、正しく持って、共に協調し合い、理想的な世界の建設に努めて欲しい。それだけなのです。そのための教義であったわけですから。

こうした事情から、これから先に私達がアクエリアスの時代を切り開くためには、根本においての真理の統一とその精神の浸透が是非とも必要であると思うのです。

根本においての統一とは何かと言うと、人間とは共に愛し合い、信じ合って素晴らしい社会を築いていかなければならない存在であるという事ですね。そのための有効な手段として真理があるという事です。そして、その時代、環境に応じた教えで人々を納得させ、自らを正させて進歩と調和に満ちた社会を建設しようと計画しているのです。

ですから、現代の人々を教導するには現代の人々に受け入れられるような教えが必要なわけです。現代風の真理が説かれなければならないのです。何も古い教えが間違っているわけではなくて、古い教えではもう現代人を教導する力はないから、新しい教えが出てくるだけです。

このために、私はこれをできるだけ科学的に表現しようと思い、生命エネルギーや異次元の説明でこの世とは違った世界が厳に存在し、私達はそうした偉大なエネルギーにより生かされている事を説明しようとしているのです。そして、現代人がこのまま堕落して行くのを阻止し、逆に素晴らしく立ち直るような精神を取り上げようと努力しているのです。

このアクエリアスという本は、これからの日本を中心として起きてくる予定の人々の根本的な意識革命についての流れのダイジェスト版です。これからこんな事が起きてくるだろう。そして、世界の流れはこちらの方向へ流れて行くだろうと論説しているわけです。

しかし、これは現時点においてはあくまでも予想にしか過ぎません。ノストラダムスが言うような、未来とは確定的なものではありません。彼が言うように、運命とは決して変えられないものではないのです。非情に流動的なものです。地上の人々の色々な行為が様々に絡み合って変化していくものなのです。この意味では、このアクエリアスの本に書いてあるとおりに歴史が展開していくという保証は何処にもありません。人々の意識革命に失敗して、人々のエゴがもっとエスカレートして先進国同士が核戦争を始め、滅んでしまう可能性も決して否定できないのです。

しかし、この時期に地球の文明を指導する立場にある神霊が断固として変革を起こさせようと決意しているのは紛れもない事実です。そして、そのためにこの本にも一部書かれているような出来事を起こす綿密な計画があるのもまた事実です。そして、その使命を託せるような人々はもう既に地上へと送り込まれています。

この神霊達にとっても大きな賭ですね。そうした計画とその執行人を送り込んで大きな期待を持って見守っていのです。必ず成功すると信じて。でも、神霊が直接タッチする事は許されないのです。なぜなら、あくまでも地上に住む人々の精神的な進化が目的であって、理想社会の建設という結果が目的ではないからです。このために完全な自由と方向制を与えて、間接的に指導するにとどめる必要があるわけです。

人々が自分で考え、行動し、その結果ユートピアを築いていくことによって精神的に成長していくわけですね。神様からすべてを教えられてそれに従っているだけでは、ユートピアはできるかもしれませんが、奴隷と同じであって何の成長もないのです。

アクエリアスの時代を切り開くのは、私達一人一人の認識なのです。私達が、この真理

を受け入れ、人生の指針としてこれに基づき努力して生きて行こうと決意する事によって、そしてそうした目覚めた人々が力強く行動していく事によって、アクエリアスの時代は切り開かれて行くのです。

計画通り、地上に神の計画が成就し、真理に目覚めた黄金の文明が開かれる事を祈念してこの辺でひとまず「アクエリアス」を終えたいと思います。